
ズボラで何が悪いっ！？

神去無月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ズボラで何が悪いっ!?

【Nコード】

N0512X

【作者名】

神去無月

【あらすじ】

舞台は海に浮かぶ島、学生による学生のための『学生島』。そんな学生主役の学生島とある学園『私立黎明学園』に在学する、不真面目でいい加減で無責任でひねくれていて、人間性を疑ってしまうような、まるでダメな男——マダオでズボラな主人公『綴有理』の日常を淡々と綴っていきます。

ズボラな俺が平然と遅刻してくる話

俺は欠伸が出そうになるのを必死に我慢した。なんて言っただって、目の前には二重で可愛い顔つきのおっとり系お姉さん先生が椅子に座り、こちらを見上げているのだ。まるで仔犬みたいな先生の真正面で堂々と欠伸をかますなんて胆の細いであろう俺にはできないことである。

「あのお、お話を聞いていますか？」

聞いている聞いている。ちゃんと聞いているとも。

にしても、ちよつと困ったような顔がまた可愛いなあ近衛多恵先生。そんな近衛先生は教職員試験に合格したばかりの新米教師だ。そして俺のクラスの担任でもある。

「はい、なんですかね」

「そのお、今週に入ってからずっと朝のSHRに遅刻しているようなのですが……」

控え目にそう言う近衛先生は怯えているように見えなくもない。

この先生はビシッと説教しなければならぬ場面でも、態度を変えろことをしないようだ、というのが最近の収穫。まあ説教されても面倒なだけだから俺みたいな遅刻常習犯からすれば楽チンなんですけどねー。

「はあ、まあ」

「ええと、たしか寮から校舎まで歩いて2分、でしたよね……？」

いかにも。その通りですよ近衛先生。ですからそんな授業中に先生から質問された気弱な生徒のようなビクついた表情にならないでください。

「すみません……」

「いえいえっ。あの、どこか体の具合でも……?」

近衛先生は上っ面の心配ではなく、本当に俺を気遣っているようだ。おお、すげえ。でも罪悪感が俺を……責めませーん。なんか悪いね、俺ってこういう人間なんです。

「あー、なんか身体が重いような気がします」

こう言うど風邪っぽく聞こえるけど、単にダルいってだけのこと。いや別に先生を騙すとかいう魂胆じゃねえよ? ただ言葉遣いに気をつけたただけだ。

「まあ」

「あ、あと頭痛もします。前頭葉マジ痛いです」

「まあっ」

反応は上々だな。あともう一押し。

「あっ、フラフラしてきました……。目眩が……」

「ま、まあっ。本当にフラフラしていますっ」

お、若干疑ってたのね。近衛先生も短い間に成長したなあと思いました。

けどこれで俺が勝ったようなものだ。さて、フィニッシュといくか。

俺は片手で頭を押さえながら、頭痛に耐えている苦しそうな声色でトドメの一言を放った。

「なので保健室で休んでもいいですか？」

「は、はい。どうぞ」

「ありがとうございます。それじゃあ失礼します」

「え、はい、お大事にっ」

はいミッシェンクリア。難易度と言うとイージー。初心者向けのミッシェンだった。クリアタイムは約3分くらい、タイムボーナス出るでしょ、これ。

俺は職員室から退出すると保健室がある方へ歩き出す。勿論、普通に。風邪を引いた人のように危なっかしい歩き方ではない。

廊下は生徒たちのざわめきで埋め尽くされており、耳の奥が『もう止めて』と悲鳴を上げるくらいうるさい。時間にして、一限目が終わった直後だから、まあ話に花を咲かせたくもなるだろう。ま、俺には咲かせる以前に話し相手がいないんだけど。

そうして歩いているうちに、お目当ての場所——悩みを抱えた生徒が訪ねてやってくる保健室についた。

俺は軽くノックをしてから、部屋の主の返答も聞かないままドアを引いた。

「ちわ」

「あら、おはよう」

そう言ってて椅子をぐるりと90°回転させて俺の方へ向いたのは、保険医の関根先生だ。せきね

関根先生は大人の魅力を最大限に放っている、学園内でも人気の先生だ。パリッとした白衣を羽織り、ブラウスからチラチラ見える女性特有の谷間に、タイトスカートから伸びる黒のストッキング。うーん艶かしい。けしからん。

「一限目はまたサボり？」

「サボりじゃないですよ。たまたま間に合わなかっただけです」

「ふふ。たまたま、ねえ」

意味ありげに笑顔になる関根先生。何もエロ要素はないはずなのに、なぜかちよつとエロっぽく見えるのは俺が男だからだろうね。

「今日は何？」

「ダルいんで、ベッド借りてもいいですか？」

「ううーん。今日はちよつと用事で出ないといけないのよね」

手帳をペラペラと捲りながら関根先生は言う。

ふうん。つまりベッドは使えないと。仕方ない、一応もうちよつと渋ってから諦めるとするか。

「ええー。マジ眠たいんですけど、俺だけ寝てちゃいけないんですか？」

「ダメよ。気持ちはわからなくてもないけどね」

「今の季節が一番過ごしやすいですからね」

今の季節は夏と秋の中間辺り。夏の蒸し暑さが消え、秋の涼しさが顔を見せ始めたくらいだ。

ちよつと肌寒いと感じるくらいが一番イイ。ほんとベスト。朝とか、空気は冷たいけどベッドの中は自分の体温で暖かくなっている。気持ち良すぎる。あの微睡みの中でうだうだするのが最高なんだよな。

「そうね。あなたにとっては至福の一時でしょうね」

「なら……」

『お願いっ』という目線攻撃。ビシビシ。これでどうよ？

「……さあーて、そろそろ戻らないと二限目が始めるわよ」

効かなかった。俺の攻撃は反射され、逆に関根先生から『しつこい』目線が飛んできた。危ねえ。

「まいつか。それじゃ失礼しました」

退くときには退く。関根先生のような物わりのいい先生に、執拗にワガママをこねるのは厳禁である。こういうときはとっとと戦

略的撤退だ。

「はいはい。ちゃんと授業を受けなさいよ?」

「モチですよ、関根先生」

俺が親指を立てて白い歯を見せながら言うと、関根先生は呆れ混じりの苦笑いで俺を見送った。

さて、と。居場所がなくなってしまった今、仕方ないから教室に戻り授業を受けることにしよう。でも嫌なんだよなあ、俺が教室に入ったときに一瞬無言になるの。と言っても、クラスメイトの意識が5秒以上俺に向けられたことはほとんどないわけだから、大して気にすることでもないのかもしれない。だが面倒だ。

溜め息を吐きつつ自分の教室——2年4組のドアの前に立つ俺。
多分『えっと、綴有理つづりゆうりです。初めまして』って言って入っても通
用するんじゃないかと真剣に思う。だって俺、教室ン中じゃ空気だ
もの。背景だもの。影だもの。……冗談だつっうの。空気なのはマ
ジだけど。

「次の授業ってなんだったっけかな」

よおし、未だに時間割りも覚えていない（覚える気がない）孤高
の將軍の凱旋だ。ひれ伏せ愚兵ども。……うあ伊タタタ。

言っとくけど、別に俺はイタイ子ではない。勘違いはしないよう
に。

教室のドアを引く。ガラララとかいうありがちな効果音はない。
スラララ。

この学園の校舎は新しいため、一々無駄な効果音は発生しないの
だ。しかも今は、これでもかと賑わう小休憩中。だから俺が教室に

入ってきて俺に気づかないやつなんて沢山いる。例え気づいたとしても、わざわざ俺みたいなコミュニケーション能力皆無者に関わろうとする輩は一部を除いていないのだ。

「……………」

俺は当然だが黙って自分の座席につく。運がいいことに俺の席は一番後ろで、窓からグラウンドが一望できる窓側。教室の隅っこマジ最高！ てなわけだ。

「でねでね？ あ……」

女子の群れでお喋りしていた隣の席の名前も知らない女子が俺の存在に気づき、珍獣でも発見したかのような目をする。いやマジ勘弁願うわ。つか香水匂わせすぎでしょ。

しかしそんな目も僅か2秒ほど向けられただけで、名無し女子は直ぐにグループでお喋りを再開した。声うるさ。

俺はペンケースとルーズリーフしか入れてない軽い学生鞆を机の横に引っ掛けると、現実逃避するように机に顔を伏せる。両腕に額を乗つけるタイプの、顔面遮断のあれね。

「……………ふ」

誰にもわからないような短く小さな息を吐く。

こうして目を瞑ると、雑音が耳に入ってきてちやうわけだ。「キャハハハ」「マジかよ!」「昨日のアニメが」「トイレ行かね?」「みたいな色々な雑音が。別に頼んでもいないのになぜ耳は音を拾うのだろうか。

ああでも、聴覚は自分に与えられた仕事を忠実にこなしているわけだから責めるのは違うよな。つまり責めるべきは人間を創った神様（笑）というわけだ。

その点、聴覚を始めたとした人間の身体って偉いよなー。めちゃくちゃ働いてるじゃねえか。ストライキすれば勝てるレベルだぞ。

余計な雑音を任意でシャットアウトできる素晴らしい機能を人間に搭載するべきだと思いました。

「あ、有理？」

聞き間違い？　いいえ、空耳です。

「なんだ有理じゃん」

うわ来た。来やがった。お呼びでないクラスメイトが。よしシャットアウトしろ俺の耳。

「いつ来てた？　気づかなかったじゃねーか」

「……」

「一限目の現社、自習だったぜ。課題は机の中だ」

「……」

「テストの範囲らしいからやっというた方がいいと思われる」

……ダメか。ポケットモンスター——略してポケモンならレベルアップで進化できるのになあ。

仕方ない。こいつの一方通行ぶりは筋金入りだ。俺は嫌々ながら

も伏せていた顔を上げた。

「ああ、そうだな。テスト近いもんな」

上げた先には無駄にイケメンな長身野郎が立っていた。名前はたしか芝田耀太しばた しょうただった気がする。最近の不良でもしないような汚い金色の髪を整髪剤で整え、銀のイヤリングが両耳で光っている。容姿こそチャラチャラしているがこいつはチャラ男ではない。二次元をこよなく愛している、いわゆるオタクというやつだ。

女にキヤーキヤー言われてそうな外見とは裏腹に、この芝田耀太という男は、ネットに浸り画像を収集するのが趣味というれっきとした変態バカなのである。

「今日は来ないかと思ってた」

「は？　なんで？」

勝手に決めつけんなっつうの。

「いんや、今日は有理の嫌がってる教科ばかりじゃん？」

ああ、そういうわけね。納得した。

「ん、なんか単位が危ないらしい。嫌々には変わりねえよ」

うん。体育がヤバイ。

体育がある日は学園は休むって決めてる。これ俺ルールね。

「把握した。おっ、そろそろチャイムが鳴るな……じゃ」

ムカつくほど爽やかに立ち去っていき、自分の席に座る芝田。マジ半端ねえ。見ろよ、女子の半分以上が芝田の姿を目で追ってる。うわーモテモテですねー。羨ましー……くはない。

べっ、別に俺もモテたいだなんて微塵も思っていないんだからねっ。勘違いしないでよねっ。

キンコン以下略。チャイムがスピーカーから響き渡った。

そしてやってくる二限目の授業。教科は数学だ。担当は例の近衛先生。

ああ面倒だ。話聞いて、板書して、問題解いて、それを繰り返して授業が終わる。実につまらない。面白味がないんだよねあ。

数学なんて、公式を覚えて式変形さえできれば余裕なんだっつうの。

「で、では、明日までに問題集の間5を解いておいてくださいね？提出してもらいますからね？ お、終わりますっ」

やっと終わった……。途端にうるさくなる教室内。他の教室からも椅子を引くガガガッという耳障りな音とともに騒ぎ声が聞こえてくる。

近衛先生の授業は内容自体は悪くない。ポイント押さえてるし、理解もしやすいと個人的に思う。ただ欠点を挙げるとすれば、それは近衛先生の態度だろうなあ。

指名された生徒が問題に答えられないという、どこでもありそうなことが先ほどの授業で起きた。

先生「では、問4を……佐藤くん。と、解いてみてください」

佐藤「はっ、はい。えー……と、えー……あー、わかりません」
先生「あう……」

こんな感じだった。

で、なぜか知らないが近衛先生が泣きそうになっていた。意味わからん。しかもそのあとのテンションの落ち込む様だったら、もう見てられねえわマジで。いやまあ見てたけど。

近衛先生の表情を思い出してMY精神世界でニヤニヤしていると、イケメンでチャラいけど美少女オタクな芝田が体操着を抱えてやってきた。爽やか笑顔が輝いて見える。ああっ、眩しい！ 溶けてしまおう！

「有理、次体育だな」

「……思い出させんなよ」

意識しないようにしていたのに。なんてやつ。つかなんで俺の机で着替えようとしてんの？ 自分の席で着替えようよ。

「あー憂鬱だわ。どうしてくれる芝田」

俺は半目で睨む。

しかし俺の気力のない瞳では睨んだとしても平常時と変わらないだろう。

芝田はどこ吹く風で、にこやかに笑みを浮かべた。

「耀太でいい」

「芝田でよくね？」

「耀太がいい」

「あっそ。つか、もう女子いねえんだから演技すんのやめろ」

「うい、了解しました。ってかビッチどもの視線量ばねえっす」

変わり身早っ。

「今日はバスケかなー。女子のへそチラに期待大ですぜグツフェヘヘ」

これが、不真面目の代名詞である俺に、自ら進んで干渉してくる変人の本当の姿だ。人は見かけによらねえなと感じた一瞬。ほんと、見かけによらねえ。

ズボラな俺が先生に絡まれる話

季節は秋の一步手前。俺が在学する学園——『私立黎明学園』^{れいめい}は、体育の授業では、体操服を着るかジャージを着るかを自分で決めることができる。季節柄、ジャージを着始める生徒も多くなってきたが、まだまだ薄い体操着で授業を受けるといふ生徒も少なくない。まあ、どうでもいい話なんだけど。

俺とイケてるオタク——略してイケオタの耀太は、普通の体操服にハーパンという格好で第一体育館にいる。第一よりも一回り小さい第二体育館もあるのだがそちらは体育の授業では使わない。ま、学園祭といった色々な行事用なわけだ。

「今日は集団行動の練習らしい。有山が言ってたって体育委員が言ってたぜ」

耀太ががっかりした様子で言った。どんだけ『へそチラ』にワクワクしてたんだよ、お前は変態か。……しまった、こいつは変態だった。あまりにも女子の前にいるときとオタクモードのときを比べてしまうため忘れていた。

俺は壁に寄りかかり、体育館シューズをのろのろ履きながら気怠げに返す。

「ゴリ山先生か。つか高校生にもなって集団行動とか中学生かよ」

「はげど。あ、そーいや有理お前……」

はっ、としたように耀太が俺を見る。気づくのが遅いんだつづの。どうやら、なぜ俺が体育というものを嫌悪しているかがわかつ

たようだ。世話の焼けるやつめ……別に焼いてないけど。

「まあいいよ。向こうも単位のことは知ってるだろうから」

俺が今日の体育に出ることを予期していたんだろう。だからこそ、今日の授業をあの日と同じ集団行動の練習にしたに違いない。そこでどうせ俺に謝罪を要求したり、嫌がらせをしたりするんだろうな。チツ、ゴリ山先生の意図が手に取るようにわかる。

「そうだろうな」

「そうだろうよ」

憂鬱だ。座学と違い身体を動かさなければ成績にモロに反映される体育は嫌いだ、それにムカつく教師をプラスである。ああ、今日で一番憂鬱だ。大事なことなので2回言いました。

女子に運動できるアピールがしたい男子と、男子に見て見て構ってオーラを放つ女子とが集まり、みんなでキャツキャウフフとバレーボールで遊んでいるのをボーッと眺める俺。

身体動かしたくねー。汗とかマジかきたくねー。

「有理、有山が来た」

「あ？」

耀太が顎でしゃくった先には、ゴリラ先生……じゃなくて有山先生がノッシノッシとこちらへ近づいてきていたところだった。

有山先生は体格がこれでもかと言うほどがっしりしている。まるでゴリラだ。オマケに毛深い。まるでゴリラだ。あと顔が陰しすぎ

る、特に口元と眉間。堀の深さといい、まるでゴリラだ。

「相変わらずのゴリラ歩きにワロタ」

「え、だってゴリラの仲間だろ？ 普通じゃね？」

「余裕だなー。じゃ、有理の健闘を祈るぜ。ノシ」

面白がってんじゃねえよイケオタめ。と思わず罵りたくなった。こっちは面倒臭くて死にそうだ。あーマジ面倒死しそう。でも珍しい死亡例だと言うことでニュースで報道されるかもしれないから、やっぱりダメだ。やめやめ。

「おーし。今日は集団行動の練習するぞ！」

声でけえよ。今さら『回れ右』とか『二列横隊』とかふざけんなゴリラ。

ゴリ山先生は生徒たちを見回し、俺の姿を見つけると一瞬驚愕の表情になる。その次には、ニヤニヤとしたいやらしい色を浮かべているではないか。ゴリラがニヤニヤするんだぞ？ あり得ないくらい気持ち悪いものを見たわボケ。

「今日は珍しく綴も出席してるわけだから、全員で同じことをしてみよう！」

これは俺に対する宣戦布告ですね、わかります。

「おしっ、始めるぞ！」

その笑顔と大声が暑苦しい。誰かモザイクと音声加工してくれよ。

ゴリ山先生がホイッスルを吹き俺たちは二列に並ぶ。くるだろうなあ……と思っていたら、やはりきた。

「おんやあ？ チンタラと歩いてるやつが一人いるなあ。やり直し！」

俺を見ながらの発言。はーめんど。つかダルい。

ピッ。ゴリ山先生のホイッスルが鳴らされ、蟻のようにわらわらと移動する俺たち。

「おいおい、自分のことだって気づいてないみたいだなあ。誰か教えてやってもいいんだぞ？」

チッ。さらにクラスを巻き込みやがった。クラスメイトから遠慮がちにチラ見され、『どうしよ……』的な雰囲気になっているのが感覚でわかる。こうなったら俺の責任じゃねえかよ。ふざけんな、面倒臭さが倍になるだろうが。

ゴリ山。調子に乗るのは勝手だけど乗り加減には細心の注意を払え。アホめ。

「しょうがないなー。次にいくぞー」

ゴリ山の「回れー、右」という指示に、俺は素直に従う。あ、念のため明記しておくが俺はちゃんと授業に集中している。ただゴリ山がいちゃもんをつけてきてるだけだ。俺は優等生なんです。

「あーあーあー。一人だけタイミングがずれてるやつがいるなあ」

俺を見ながら言うなつつうの。名指ししてみろよ。

「綴！ お前だぞ！」

おお、名指しされた。

「ぷっ」

「あ？」

近くから微かに笑い声が聞こえてきたから何事かと思ったが、どうやら耀太が吹き出しただけのようだ。くそ、頭を動かした分だけやる気エネルギーを消費しちまったじゃねえかよ。弁償しやがれ。

「つーづーりい。お前なあ……もうちょつとでもやる気だせんのか？」

呆れたように片手を額に添えながらゴリ山が言う。その演技臭い動作をやめてほしい。ムカつくから。

クラスみんなは興味なさそうに友達同士で談笑している。俺とゴリ山のやり取りに興味がないのがまるわかりですってね。俺もくだらねえやり取りに興味なんかねえよ。

「いやあ。俺としては出してゐるつもりなんですけどね」

「その割にはチンタラチンタラ歩きやがって……本当に成績1にしてやろうか？」

「結構です」

「じゃあ今日だけでいいから真面目に授業受ける！ いいか、真面目に受けるんだぞ？ いいな？」

どんだけ念を押すんだよと思うほど言って聞かされた。つかゴリ山が体育館に來ただけで気温が2℃くらい上がったような気が。

「よし、じゃあ続けるぞー」

んー、でも『真面目』という単語を聞くと誰しも、本気であることとか真剣であることだと思ふよな。でも『真面目』には、まだ他にも意味はあるのですよ。

辞書を引いてみよう。ペラペラ。おお！ 真面目とは『真心がこもっていること』と『誠実であること』らしいです。なので俺は真心をこめて、授業を受けることにしましたとさ。

「綴いー！ 回れ右だろうがー！ お前だけ居残りにしてやろうかー！？」

……ゴリ山はほんっとーに嫌なやつだ。マジでムカつく。だって、俺みたいなロクでもない生徒に率先して絡んでくるんだから。

ほんと、ほっというてほしい。切実にそう思う。

ズボラな俺が小説の舞台を説明する話

身体が痛い。ベッドの上で天井を仰向けの状態で見上げながら俺は憎々しげに呻いた。鈍く痛む箇所は主に腕と脚。筋肉痛。ああ憎たらしいよ筋肉痛。こんな煩わしい痛みを出すくらいなら筋肉要らねーと思ったけど筋肉がないと生物として生きていけない。仕方なしだが筋肉が身体に寄生することを許可した。

あと、ゴリ山は死ねばいい。昨日の体育では、結局放課後居残りになった。なぜか知らないがゴリ山とバスケットした。疲れて帰宅して寝て起きたら、筋肉痛。ゴリ山は死ねばいいよ。

「……あああ……」

ああ眠たい。このまま二度寝してしまいたいくらい眠たい。二度寝は最高だ。一度目を覚ましておきながらベッドの中でまた眠りに落ちようと、覚醒しようと奮闘している脳ミソをスリープモードにさせるのだ。

脳ミソは最初こそ『ええっ、起きなくていいんですか!?』と困惑を露にしているものの、次第に微睡みや心地好い温もりに侵食されていき、最後には『それじゃあ、お言葉に甘えますね♪』と睡魔を受け入れるのだ。その瞬間が堪らなくイイのである。

俺は考える。何でも拒絶するのではなく一度受け入れてあげれば、この世から戦争はなくなるんじゃないかって。……は、マジで意味不明すぎるでしょ俺。

とは言うものの、俺は学生である。学生である以上は学園に行ってお勉強をしなければならない。そして今日は英語の授業で小テストがあるのだ。もちろん成績に反映され、受けなければ小テスト点は0点。テストの点数だけで生き延びている俺からすれば、たちま

ちピンチになるかもしれないわけだ。

「……」

俺は無言でベッドから降りて立ち上がる。腕や脚が悲鳴を發したが、なんかリアクションをすることさえ面倒臭い。つか口を開けるのがダルい。

時間にして午前8時前。我ながら早起きさんだと思う。SHRは8時30分だから、まだまだ余裕がありますね。は、マジ寝よっかなー。……つっても筋肉痛で快適に眠れはしないだろうから、睡眠はまた今度だ。許すマジ乳酸。

俺は缶コーヒーを冷蔵庫から取り出し、プルタブを開ける。カシユツ、カコツ、みたいな音を聞きながら黒い液体を飲み干す。朝コーヒー最高！

さて、俺が住んでいるここ『あかつき寮』は学園まで徒歩2分で行く。というか、寮は学園の敷地内に建っているのだ。寮を出る↓少し歩く↓はい到着というびっくり短路。俺がここに入寮しようと思ったのもこの近さゆえである。

まあ色々欠点はあるわけだが……例を挙げよう。？. 部屋がちっさい。

？. 建物がボロいため、音が響いてうるさい。

？. 飯が出ない。

？. 寮長がウザい。

？. 設備に乏しい。

などと、大量に不満つつうか欠点はあるわけだが逆に美点も挙げてみよう。

？. 入寮者が少ないため静かなときは静か。

? 学園と近い

?

?

?

すまん。他に思い浮かばねえわ。強いて言えば、隣に住んでる女の子がちよっとだけ可愛いってことくらいかな。ま、いかにも夜な夜な遊んでます風のビッチ女子だけど。

ここらで、少し学園以外のことに触れておく。

俺が今いるここは日本の領海に浮かんでいる孤島——学生による学生のための『学生島』というバカみたいな島だ。島人口も学生が7割を占めている。

なんでも、学生島なんていう代物は元々の島の持ち主が思いついたことらしく『学生だけを集めた島を作って学力を纏めて向上させよう』というアホ丸出し理論を唱え実行したからなのである。マジでバカ。

当初は本当に学生だけを学園に突っ込んで勉強ばかりさせてるトンデモな場所だったが、その持ち主が寿命で死去して後任で来た人が切れ者すぎた。まさしく新世界の神。いや別に某ノートで殺戮を行ったわけではないけど。島にやってきてまず言った一言が、これだ。

? バカじゃねえの??

面倒になってきたから省くけど、その新任の切れ者が革命起こして、今の学生島が誕生したわけだ。ちなみに学生島は『引越したい場所ランキング』でナンバーワンになったこともあるくらい快適な島だ。デパートからコンビニまで、遊園地から水族館まで、高速道路から空港まで、八百屋からカラオケ屋まで、医者から漁師まで、不良からオタクまで、あらゆる物と人が揃っている。

もはや、学生島とは一種の“国家”と呼べるのではと俺は思う。ただし島を動かすのは政治家ではない。学生島にいる学生たちだ。学業が本分である学生が、本分をまっとうするために何が必要か勘案し、何が不要かを考察する——んー、もうこれ国家だろ。みたいな感じだ。実際に権力や統治する力を持っているから洒落じゃあねえ。この島は学生が主役で主体、それ以外は脇役なんだ。

で、新世界の神が最近になって創ったのが『私立黎明学園』という、学生島の中でも一番生徒数が多く、一番規模も大きい最大級の学園だ。それに部活動も活発で、インターハイとか甲子園とか軽く出場してるからね、この学園。マジばねえ。いやガチで。

学生島は凄い！　これ結論ね。

チラリとペンギンの掛け時計を見ると、長い針が思っていたより進んでいた。そろそろ着替えた方がよさそうな時間帯だ。俺はノロノロと制服に着替え始め——着替え終えました。着替えるのに10分使いましたとさ。ちゃんちゃん。

今日はちよつと寒いからカーディガンでも羽織って行こう。そう思い、ボロいタンスを引き出す。カーデ発見。カーデ着る。袖に穴が空いていた。仕方なくカーデ脱ぐ。寝癖直す。歯を磨く。顔を洗って、さあ学園に出発だ。

ああ、めんどくさっ。

この面倒臭さを短歌で表現してみる。

めんどくさい。

嗚呼めんどくさい。

めんどくさい。

マジめんどくさい。

ガチめんどくさい。

ドヤ。たぶん金賞は獲得できると思うよ！ ……冗談に決まってるだろバカ。真に受けてんじゃねえよ。

ペンケースとルーズリーフだけを入れた学生鞆を持って肩に掛け、所持金650円しかない長財布を尻ポケットに差す。ここ半年使っていないケータイを右ポケットに入れ、寮の鍵やらを左ポケットにしまう。はい準備完了。行きたくもない学園に出発である。

寮から出ると、やっぱり外は少し寒かった。

「……さむ」

コンクリートで固められ何の変化もない地面に視線を向けながら、俺はノロノロと歩き出したのだった。

ズボラな俺が偶然にも美少女と会話する話

動かす度に一々痛む身体に鞭を打ちつつ、自分の教室まで上がるため、ここはエベレストかと錯覚してしまうほど急な階段を上がっている俺。

2学年の教室があるのは3階のフロアだ。1階には図書館や保健室や事務室などがあり、2階は3学年、4階は1学年のフロアとなっている。普段の俺なら階段を上がることなど造作もないが、今は筋肉痛状態。歩けば毒を受けたポケモンさながらの微ダメージを負ってしまうのだ。畜生。

ゼーゼー、と荒い息こそ吐いていないものの、俺のHPはアラートが鳴るちよつと手前まできてる。やべえ、誰かショップで毒消し買ってこいよ！

なーんてことで階段を上がっていると、あと少しというところで思わぬ障害が出てきた。いや、出てきやがった。朝のクソ混んでいる時間帯に階段を塞ぐようにして横に並んでいるバカカップル。塞がれているのでバカカップルを後ろから追い越すことができない。うわマジかよ……。

「……」

苛ついた。クッソ何が「じゃあ放課後はファミレスね♪」「わかった。楽しみだなあ」だよ、マジふざけてんじゃねえよ。ファミレスのどこに楽しめる要素があるんだ。……ああ、あれか？ ドリンクバーでジュース混ぜたりしてブレンド（笑）するとかか？ でカップルで飲ませ合いとかするのか？ バカどもめ。店員に睨まれろ。恥を知ればいい。

カップルは階段を上がるペースが遅いため、俺がカップルの後ろに並んでるような事態に。苛ついたので心の中で思い切り罵声を浴

びせていると、誰かに肩をつつかれた。首だけ動かして見てみると芝田耀太が俺と同じような顔つきをしていた。

「おはよっす」

「んんんー」

口を開く気がしないので口を閉じたまま「おはよう」と言った、聞いててなんか気持ち悪い。不本意だが普通に話すことにしよう。

「朝からイヤなもんを目撃してしまったでござる」

「そうだな。……お前、ちょっとTPOを叩き込んでこいよ」

「ちよおまつ、他力本願すぎっしょ」

ひそひそと話す俺たち。と思ったら、バカップルは2階のフロアにつくと3年生の教室がある方に歩いていった。当たり前みたいな雰囲気を出し、恋人繋ぎをしたままでだ。

「上級生だったのか」

まあ後ろからじゃネクタイとか見えねえもんな。仕方ない。

「イチヤイチャしやがってバカップルめ。リア充は爆発しろ」

「はげど。年齢〓彼女いない歴の俺らの視界に入ってほしくないよな」

は、イケメンが何を抜かすか。「はげど」ってなんだ「はげど」

って。ちゃんて言えつつうの。しかも、さりげなく複数系だしな。いやま、複数系で間違いないけども。

俺は自分のペースで階段を上がりつつ、若干の嫌味を込めて言った。

「お前もモテてるだろ」

「面食いビッチからだし。俺好みの、清純系黒髪ロングの美少女なんてそうそう見つかんねっす」

嫌味が効いてない……だと……。こいつ気づいてねえのか？ なんて猛者なんだ、イケオタ芝田耀太。

「ってか有理」

「あ？」

「怪我でもしてる？」

重たそうな歩き方してれば気づくか。あー説明するの面倒くせえ。

「いや筋肉痛。昨日の居残りでやられた」

言ってみると案外短かった。やだ、なんか恥ずかしいっ。……別に俺は酔っ払ってるわけじゃない。

「マジか。メシウマ——にはならないな」

耀太は最高の決め顔を披露すると、

「——だって……っ、だって俺の大切な有理が苦しんでるんだからっ」

キラキラと光ったような気がした。エフェクトうっざ。イケメンが決め顔しても気持ち悪くないから余計に腹が立つ。イケメンもカップルと一緒に爆発してしまえばいい。

と、3階に到着した。もう1日分のエネルギーを使った気分だ。英語の小テスト終わったら寝よ。保健室に人がいなかったらベッドを借りるのもいいかもしれない。

「ちょ、スルーすか!？」

「さっきのがキモくて」

なにさっきの台詞。まるでホモではありませんか。ホモとか冗談じゃねえよ。ご勘弁願うわ。

「ははは、いやだなー。ノリじゃん」

「近寄んな、ホモ太め」

「ひ、酷い！俺は有理を心配して、あっ、ちょ、置いてかないでっっっ」

orzと崩れる耀太をあとにして、俺はひとり自分の教室へと向かう。あんな醜態晒しの茶番劇に付き合ってられるかつつの。やるのは勝手だけど俺を巻き込むなという話だ。

歩調を早めて歩いていると、ドン！と、女の子とぶつかってしまった。

「おっ」

「ひゃっ」

女の子はお手洗いから出てきたところだったらしく、ぶつかって拍子にハンカチを落としてしまう。あああなんてことだ、俺も何か大事なものを落としてしまったようだ！ 夢や希望、情熱や生命力といった高校生には必要不可欠なものを！ ま、元から持ち合わせてないんですけどね。

「あ、ごめんなさい。うっかりしてて……」

律儀だー。感心感心。素直に自分の非を認めて謝れるって凄いことだよ？ その純心を大切にね。

何気に香るシャンプーのいい匂いに鼻腔をくすぐられつつ心の中で褒めてあげた。知らない人を褒めれる俺も称賛に値する人間だと思いました。まる。

「……」

——で、俺は特に謝るわけでもハンカチを拾ってあげるわけでもなく、華麗にスルーした。ぶつかったことをなかったかのよう^{エアーマン}に。

俺のスルースキルは高いのだ。空気人間の特技ってやつ？

「待ちなさい」

ガシッ。と、学生鞆を掴まれる感覚がした。ということは、誰かが俺の薄っぺらい鞆を掴んだということになるわけだが……そこで単純な疑問が浮かぶ。誰が掴んだのだ？ 空気に溶け込み存在を隠

蔽できる能力を持ったこの俺、またの名を空気人間^{エアーマン}に干渉してくるなんて、耀太と先生くらいなものだけだ。

「呼んでるのに無視？」

……もしかして、先ほどの女子は俺を呼んでいるのだろうか。いや、まさか。たぶん、鞆が空間の裂け目に引っ掛かっているんだろう。最後に女子生徒から話しかけられたのは、去年の学園祭のときだもの。そんな俺が女子に話し掛けられるわけねえだろ。

女子「屋台の店番、替わってもらっていい？」

俺「別に」

女子「そんなじゃよろしくね。……名前なんだっけ？ まっ、いいか☆」

はいこれだけー。それ以来女の子と会話してませーん。……ごめん、マジで悲しくなってきたから誰かジュース奢って？

「ね、もしかして私の声が聞こえないほど残念な耳なの？ それとも応える口がないの？ バカなの？ 死ぬの？」

Oh……なんという毒舌なのでしょう。こんだけボロクソに詰られるやつは可哀想だなあ。人間として残念なやつに違いない。

「……無視、とはね」

「……もしかして本当に俺だったりする？」

振り返ると、女の子がいた。俺の学生鞆を掴み、阿修羅象も真っ青になるくらいの怒気を放ちながら。

女の子は艶々した髪を真っ直ぐ伸ばしていて、腰の上まであった。耀太が言っていた黒髪ロングというやつだ。そして綺麗だ……。なんだこいつモデル？　と思うほど整った顔立ちで、可愛いというより美しいという感じで落ち着いた女の子。その華麗さに、俺は不覚にも一瞬だけ胸が高鳴ってしまった。

「そ、あなたよ。ね、唐突だけど、あなたは自分がどんな人間か考えたことがあるかしら？」

「……は？」

なに、こいつ。いきなり何なんだ……？　新手の逆ナンってやつか。胸糞悪。

「変なこと聞いてごめんなさい。当然ないわよね。聞くだけ無駄だったわ」

あれ？　これもしかして俺、馬鹿にされてる？　明らかに馬鹿にされてるよね？　何ゆえ初対面の美少女に馬鹿扱いされなければならぬのかわからんのだが……でも、厄介事に発展しそうだなあ。こうなれば某女優さんの必殺技を使うしかないよ。

「別に」

言ってやった。某女優もびっくりな超澄まし顔で言ってやりましたとも。

女の子の凜とした表情に困惑が混ざった。

「え……？」

俺は欠伸が出そうになるのを耐えつつ女の子から離れると、学生鞆を掛け直して歩き出す。眠っ。

「……あなたは人とぶつかっておいで、表層的で構わない謝罪の一言でさえ言えない人なのね」

俺に向かって言ってるんだよね……。何なんだ、ほんと、何なんだよ。謝罪が欲しいただけに俺に話し掛けてんのか？　くそ。かったりい。

「……面倒くさ。あー、じゃあ、ごめん」

「……………」

再びリノリウムの床を歩き出す俺。もう、振り返ることはなかった。

さっきの女の子は美人だけど、俺の嫌いなタイプ。化粧もベタベタしてなくていいなーとは思ってたけど、さっきとか凄い威圧的だった。まるで親の仇だ。

しかしだな、俺から物申させていただきますと、お前何様？　って感じ。ま、二度と話すこともないだろうから気にすることじゃないけど。でも罵られるのは嫌いなんだよなあ。

俺、やられたらやり返したくなる主義なんだよ。いわゆる報復主義者ってやつ？

「ん……………」

……あれ、そう言えば、あんな美人学園にいたっけか？　と、いかに俺が学校に馴染めていないかわかる台詞でしたとき。

イケオタな芝田耀太と昼食を探る話

さてさて、英語の小テストを終えた俺たちを迎えたのはザ・昼休憩である。この時間を待っていたか待っていなかったかのどちらかと問われれば、腹が減っていたから前者だろう。わー超くだらねえ。俺は寮で独り暮らしをしているため、誰かが昼飯を作ってくれるなんて便利なことはない。購買でパンや弁当を買うくらいだ。学園には大変旨いと評判の食堂があるが、昼頃は人が多いので行きたくない。しかし是非とも食してみたいなどは常々思っている。

「飯だな、有理っ」

「テンション高いな。ちなみに今日の睡眠時間は？」

有理は自分の腕時計を一瞥してから、

「3時間だぜ」

白い歯を輝かせて、なぜか自慢気に言った。こいつの場合、寝てないアピールってわけではないから、まあムカつきはしない。それにこいつには俺の昼飯を調達してきてもらっている。購買まで行くのダルいし、やっぱり人混むし。つうわけで耀太くんに買ってきてもらっているわけだ。

「いやー、ついついエンディングまで見ちゃって。もーマジ萌死しかけたっす。あはあん、もうん思い出しただけでも悶えるッ」

「……キモ。つか自重しろよ。女子見てるから」

ギャルゲーというやつを寝ずにしているバカ。マジ意味わからん。睡眠<ギャルゲーで、意味わからん。睡眠が第一でしょ。睡眠時間を削ってゲームとかキチガイじゃねえの。

「……コホン。さて有理。本日の戦利品であります」

そう言いながら、ギャルゲーが好きすぎて睡眠時間を削ってまでプレイするバカは幾つかのパンを俺の机に広げていった。

おお！メロンパンがあるじゃねえか、よくやったよと誉めてやりたくなるな！。誉めませんけど。

「ん、金」

「たしかに。じゃ、食べようぜ」

渡した金を財布へしまうと耀太もパンを食べようとするが、椅子がない。

耀太は困ったなあという顔を見ると、一番近くにいた席の大人しめの女子が立ち上がるのを見つけると、その子に近づいていき、

「雪ちゃん、ちょっといい？」

「あ、えっ、うわっ、芝田くんっ。えっとー、な、何かな？」

「今から食堂？　だったら椅子借りてもいい？」

「え、うん、全然使っちゃっていいよ！」

「どうもありがとう」

「あ、うんっ」

すっげーイラッ☆ とした。なにこれ？　これがイケメンを相手にしたときの女子の反応？　頬染めてんじゃねえよ畜生。いやあ、やっぱり世知辛いもんだなあ……。ブスマンでないと願いたい程度の俺には到底真似できないことだわ。ガチで。

最速で椅子をゲットした耀太は椅子に座り、俺の机でパンをもそもそ食べ始めた。やっべーイケメンの力、恐るべし。しかも食べるパンは焼きそばパン。焼きそばパンは俺のためじゃなかったのね。

「食べないの？」

「食うよ。いや、食うよ」

「なぜ2回言ったし」

知らね。もう飽きたからどうでもいいわ。

袋を開けてメロンパンにかぶりつく。サクサクしてるー。おいしー。

「メロンパン旨いなー。サクサク感とか、病みつきすぎんだろ」

「……今日の有理は、よく喋る」

「そうか？」

そんなに喋っているだろうかと考えて、耀太以外に誰とも会話をしていないことを実感する。人と会話してなさすぎだろ俺。会話し

なくちゃ死んじゃう病でもないし、かなりどうでもいいことではあるが、こうまで話さない日が続くと、そのうち日本語を忘れてしまいうそうだ。

「朝、俺以外の生徒と話してたじゃん」

は？ マジ？

「お前以外と喋ってねえけど？」

耀太は顔を近づけ、声を潜めて囁く。ニヤニヤ顔がキモい。

「うそつけい。板垣さんと話してたじゃんかー」

「イタガキさん？」

誰だよそれ。

耀太は俺がガチで知らないようだ気づくと、呆れたように語り始める。

「朝、有理とぶつかった女の子だよ。黒くて髪の毛の長い綺麗な人。なんか入れる雰囲気じゃなかったから後ろで様子を窺ってたんだ」

「は？ あー……ああ、あのときの」

朝ぶつかって、なんか謝れたことを言われたような覚えがある。もう忘れてた。いっけねー☆

「その板垣がなに」

「いや驚いたんだ。有理ってちゃんと喋れるんだなーと思って」

「は、バカにしてんじゃねえよ。言語くらい心得てる」

「そーかそーか」

耀太は何が嬉しいのか、笑顔で焼きそばパンを食べていく。俺はいつもの無表情でメロンパンを黙々と食っていく。

「でも羨ましいぜ」

「何が？」

「あの美少女で有名な板垣さんと話せるなんて」

「そうなのか？」

まあたしかに美人ではあったけど。あ、そういや黒髪ロングで耀太好みじゃねえか。なるほどな。

「ナンパ目的で話し掛けた男子は数知れず、見事に全員が惨敗という結果。『カワイーからってチョーシ乗ってんじゃねーぞ』と喧嘩を売った女子を逆に泣かせた——などなど、色んな逸話が飛び回ってるんだ」

「へー」

だからそれで何？　っていう話だ。

「俺も話してみてーな。見た目美人で声は可愛いとか反則っしょ。」

フヒヒ」

オタモードに注意。喋るのダルいから言わなくてもいいかー。こいつなら素でもモテそうだと思う。

でも机にパン屑は落とすなよ？ 汚いから。

「……オイ」

「ゲヘヘ……へ、なに、どうした？」

「パン屑落とすなよ」

「あ、すまん。拭いときますよー、っと」

「……………」

俺は残り僅かとなっていたイチゴ牛乳を一気に飲み干すと、尻ポケットから長財布を取り出す。

「どしたの」

長財布から500円硬貨を一枚取り出して、耀太の前に置く。耀太は不思議そうにそれを見ていた。

「お前、たしか情報やネタをごちゃごちゃしてたって言ってたよな」

「そーいう話は放課後に、って相場は決まってるんだけどな」

耀太は苦笑し、声を潜めた。どんだけガチな話題なんだよ……。でも俺の性格を忘れてもらっては困らないけど困る。

「面倒くせえ」

今言えばいいものを、なんでわざわざ放課後に時間を作ってまで言わなくちゃいけないの？ バカだろ。告白じゃあるまいし。

「言うと思った。で？」

「板垣ってやつのが情報が欲しい。苦手なものとか、そういう類いのやつ」

エクスクラメーションマーク——『！』が10個くらい同時に耀太の頭上で跳ねた。お前は金魚か。つか見えもしない『！』にツッコミを入れる俺って……。

「理由を聞いてもいい？」

「もしもまた会ったら、泣かされないよう自己防衛用に」

スタイル良し、顔良し、どこを貶せばいいかわからんな。時代は情報戦なのだよ。

「なるほど」

うんうん、と頷く耀太。

「今日の帰り道は気をつけよつと」

「槍でも降ってくる……ってか？」

「いや、爆弾かな？」

耀太は硬貨を受け取り、嬉しそうに笑った。え、500円でいいの？ もっと野口さんがいるのかと勝手に想像してた。

「依頼は承った。有理からの初依頼だし、明日には報告できるよう頑張る」

「まあ任せるわ」

「ああ、期待しといて」

気合いでも入れたの？ そう尋ねたくなるほど、耀太の目は萌え……じゃなくて燃えていた。いつの時代のスポ根だったの。

耀太の小遣い稼ぎ——深くは知らないし興味もないが、どうやら様々な情報を提供することと株で金を稼いでいるらしい。高校生の割に大したやつだ。ほんと、俺には真似できねえよ。そんなことを思いながら俺は長財布の軽さに、心の中で泣いた。

今日の晩飯、マジどうしよう……。

ズボラな俺がもどかしさを感じつつ眠る話

今日の授業を全て終えた俺は、ぶらぶらと帰路に立っていた。と言っものんびり歩いて5分で寮につくため、大してぶらぶらしてるわけではない。ぶらぶらしてるのは俺の将来性だけである。

こうして歩いているだけでも気力や体力を消耗するから人間って怖いよね。俺のやる気スイッチはどこにあるんだろう？　もしかしたらスイッチねえのかも。にしてもまあ、サッカー部とか陸上部が頑張っているのはどうでもいいけど、ホイッスルだとか人の大声は勘弁してほしいところだ。

寮は校門から出ずに、正面玄関をぐるりと回った場所にある。グラウンドの片隅にぽつーんと建っている木造2階建てが『あかつき寮』だ。建っている場所が場所だけに、運動部どもの声などがモロに届いてくるわけである。つかサッカー部の外部コーチ声でかすぎ。俺、怒るよ？　眠れねえもん。

ぶっちゃけ、あかつき寮はあってもなくてもどうでもいい寮だ。学園はあかつき寮とは別に、超立派な寮を幾つも建てている。学園から見える、どこのリゾートホテルだよと思うような高層マンションが例の寮。いやー超リッチ。

小耳に挟んだ話では和洋中を揃えた飲食店、カラオケやボウリングなどの娯楽施設も普通に寮内にあるようだ。冗談かと思いきやマジらしい。まあ全て盗み聞きしたわけだからから嘘か本当かはわからない。信憑性は高そうだけど。

しかし、その寮に入るためには条件がある。部活でそれなりの成績を収めたりだとか、模試や期末テストなどの試験で好成績を叩き出すなど、いわゆる優等生が入寮するところなのだ。頑張って良い成績出せば、その努力だけ良い寮に住めますよーという実に簡単な話なのである。

俺？ 俺は……まあ、下の上くらいだから。下位者に与える寮はあかつき寮で十分だっつう権力者の指向ってわけだ。

そうしているうちに寮に到着した。遠くから見てもボロいけど近くから見たらさらにボロ。

あかつき寮は1階に01号室と02号室と03号室の3部屋。2階に、04号室と05号室と06号室の3部屋。計6部屋ある。間取りとかは知らん。知ったところで「あっそ」で、はい終了。今のところ入居者は寮長を含めて3人だ。寮長がまたウザいんだけど、それはまた別の話。

俺は鍵を開けて軋む引き戸を開ける。すると不可思議なことに、まるで自宅のような空気が俺を出迎えた。「帰宅したわー」って気分になるかぎり、俺は意外とこの寮の居心地の良さが気に入っているのかもしれないとロウスペックな頭ミソで考える。

外靴を足だけで脱ぎ、玄関に放る。寮内用の（自腹で買った）クロックスを履いて、はい溜め息。

「ふー……」

俺の部屋は05号室なので、戦国時代かとツツコミを入れたくなるほどギシギシ鳴る階段を上がり、2階にいかねければならない。これマジ余計。憂鬱。

えっちらおっちら上がり04号室を通りすぎてMYルームの前へ。個々の部屋にも鍵は備わっているが、俺は千錠していいない。だって面倒臭くね？ 一々部屋を出たり入ったりする度に、鍵を取り出して差し込んで回して抜いてドアノブを回さなければならんだよ？ 部屋に入るだけでなんと5動作。世の中省エネなのに、この無駄はいただけねえよ。自室をガードしなくても、寮自体がきっちり千錠されているから大丈夫だ。それに、この寮に入るような物好きはいないと思う。たぶん。きっと。

「……………」

ドアノブをひねり、これで自室へと到達した……。

ただいまー、なんて鬱陶しいことは言わない。誰かが待っているわけでもなし、発声そのものが面倒臭いしな。

さっき履いたばかりのクロックスを脱ぎ、これで自室へと完璧に帰還できたわけだが……。

なんと、名前も知らなければ見たこともない美少女が俺のベッドで丸まっているではないか！ ……という夢を見そうな気がした。すまん、悪ふざけてみた。

学生鞆を床に放り投げ、ベッドに顔面からバフ！ と、倒れ込む。埃がテンション高めに舞い上がったが……まあ、じきに大人しくなるだろう。落ち着け。

うつ伏せのまま脚を折り曲げ、靴下を脱ぐ。それも学生鞆の近くに投げ捨て快適に。でも防御力は2下がってしまった。ピンチ。

さらに携帯電話と長財布をパージし、ついに武装がなくなってしまった。攻撃力が0。これは大ピンチ。

「くっだらねえ……」

耳を澄ませば微妙に聞こえてくる、学園から開放されはしゃぐ生徒の喧騒。部活動はまだ準備中だろう。10分後くらいにはグラウンドが、怒号が飛び交う戦場に変貌するに違いない。

比較的静かな今のうちに睡眠を取っておこう。オーケー決めた。寝る。

俺はベッドの下に手を伸ばしヘッドフォンとウォークマンを取り出す。たららたったーん。で装着。かちかちとウォークマンを操

作して音楽を流す。

「……ああー」

ああ落ち着くわー。音楽以外何も聴こえん、そこがイイ。雑音が消え、自分のお気に入りの曲だけがひたすら繰り返される状況。これが味わえるのだから、俺は半日は頑張れる。

重たく感じてきた瞼を閉じ、俺は仰向けにひっくり返った。枕を手繰り寄せてきて、頭を乗せる。学生服にシワができるとか、宿題とか、晩飯とか、そういうのは気にならなかった。

ただ、気になったのは朝に出会った、あいつ。美人でスタイルが良くて勉強もできそう。でもなんでだろうな……凄い、ムカつく。羨望とか嫉妬などではないと思うんだけど……俺の中であいつは何か引っ掛かっているのだ。

「……寝よ」

バカバカしい。学園という場所から開放された時間なのに、なぜ俺が他の生徒のことを考えなくてはならないのだろう。ほんとバカバカしい。

一抹のもどかしさ。そんな珍しく久しぶりで歓迎はできないものを胸に抱きながら、俺は深あい深あい眠りに落ちたのだった。

お昼寝選手権があったら間違いなく銀メダルが獲得できるレベル。姿勢とか絶対に綺麗だと思うよ、俺。

でも、金は絶対にのび太くんだと思うわけでした。

ズボラな俺が独り悲しく妄想する話

ただいまの時刻をお知らせしてやるよ。ありがたく思え愚民ども。ただいまの時刻は、えーと、えー、知らん。自分で調べる。

……こんな時計があつたら100%ぶっ壊してと思う。

「……………」

開かれた冷蔵庫。

固まる俺の思考と伸ばした腕。

こんな経験をしたことあるやつ挙手。貧乏大学生とか売れないお笑い芸人辺りでは割りと起きてそうなことだと思うけど。

「何も……ない……だ」と

そう、何もない。

冷蔵庫に、何もない。鶏卵もない。レンジでチンするだけのご飯もない。鯖の缶詰もない。缶コーヒーもなければミネラルウォーターすらない。食べる物、飲む物が一切ない。冷蔵庫にないのだから、冷蔵庫以外を探しても食糧は見つからないはずだ。終わった、俺死亡のお知らせだわ……。

「あり得ねえ……朝、コーヒー飲んで……それで」

それで、……それで？

やっべ。今朝が思い出せないときた。アルツハイマーってやつかもしれない。ガチで大ピンチだ。

と、とにかく！ まずは顔を洗おう。俺は裸足で部屋を出て、廊下の端につけられている小学校かよとツツコミたくなるような洗面

所へ向かった。バツシャバツシャと水を顔面に掛けて、俺覚醒。覚醒つつうほど覚醒してないけど。ただいつもより、1.007倍くらい行動力が上昇してるからね。マジ速いよ。赤い彗星もびっくり仰天な速さ。

さて、目が覚めた。そして思い出した。そう言えばここ最近、買い物に行ってなかったんだ。アルツハイマーじゃなくてよかったよ。一安心だわ。

「……にしても、だっりいなー」

買い物に出掛けるのが面倒臭い。買い物に出掛けるのに、着替える、お金を下ろす、歩く、店につく、エトセトラ——という数々のステップを踏まなければならなくなる。これはアウト。土曜日なら別に構わないけど平日は無理。日曜日無理。日曜日は平日の学園生活を取り切るために寝なくてはならないから。

「20時か、スーパーもコンビニもまだやってるな」

24時間フル稼働のATMもな。

人間生きていれば腹は減り、栄養を採り入れなければ死に至ってしまう。俺もこんな性格でボツチで寝てばかりで勉強できなくて運動もできないけど腹は減ってしまうのですごめんなさい。だがしかしbut。今の俺は筋肉痛により行動範囲を狭められている。厄介極まりねえなこれ。

つつうわけで、俺は久しぶりに、というか独り暮らしをしてから初めて出前を頼むことにし——はい無理でしたー。そもそも、どこに電話すればいいの？ 電話番号知らないよ？ 住所とか言えないよ？ しかも手持ちがないし。よって出前作戦は断念せざるを得ない。

い。他の手段を考えなくては――

「幼なじみ」

何気なく、ほんと、何気なく呟いてみた。特に意味はないから。マジで特に意味はないから。大事なことから2回言った。

毎朝毎朝主人公を起こしにやってくる隣家の同級生女の子。手作りお弁当を手渡され、お昼は屋上で食べようかなんて言われる。家事スキルはMAX。昼休憩、男友達に弄られつつ満更でもない女の子と主人公は、同じメニューのお弁当を持って屋上へと行き、当人たちの知らないうちに甘々な雰囲気を展開していく。帰りは2人並んで下校。沈みかけの夕日に照らされながら歩く家への道のりはほんの少し儂く、お別れか、と淋しさを実感するのと同時に早く明日にならないかなと思わせる。そのことに気づいた女の子はなんで意識しちゃうの、と頬をイチゴのように赤く染めてしまう。主人公も女の子の様子を感じ取り、素っ気なく言うのだ、「なあ……晩飯、作ってくんね?」と。女の子は頭を勢いよく上げると、3回ほどパチパチ瞬きをして主人公を見つめる。頬をより一層赤くさせながら、小さく呟くのだ、「いいよ」と。

「んなあああああああああああつ!!」

発狂した。幼なじみ最強じゃねえか! 朝から晩まで面倒見るとか、一緒に過ごすとかもう夫婦だろ!

くっそヤバイ。俺は俺の妄想力を呪う。なんてことを妄想してしまったのだろうかと思えるくらいに呪うわ。家事スキル持ち幼なじみ半端ねえ。それに最近流行りのツンデレやロリとかが混ざるんだろ? 耀太が二次元にのめり込むのも、ちょびつとばかしわかるよな気がした。これはハマるわ。だって便利だもん。幼なじみいれ

ばマジ快適。

あー、今考えた。男子が住む家の隣に女子が住む家を持つてくるよう条約で決めたら、それだけで男女の幼なじみが一組完成じゃね？ あとは女の子の方に家事を習得させれば……最強を上回ったな。無敵だな。

そんな悲しい独りの夜。俺は数分間、月を見上げていた。首いつてえ……。

『妄想はタダだから経済的だよね（笑）』——そんな声が月から聞こえた気がして、俺は小さく舌打ちをした。チツ。

ズボラな俺が携帯電話を使う話

それから一頻り月を眺め終えた俺は携帯電話というものを開いていた。画面は真っ暗。そういえば最後に充電したのいつだったっけかなと、記憶に存在しないほど充電していなかった。

俺は充電切れでウンともスンとも鳴らないケータイを何日も何週間も何ヵ月も持ち歩いていたっていうのか……これはさすがに自分を少し恐ろしく感じた。

ケータイの充電器を引っ張り出してきてプラグをコンセントに差し込み、ケータイに接続する。そして電源をオンにすると、懐かしい待ち受け画面が映し出された。

「……『見てんじゃねえよカス』……だと……?」

黒い背景に白色の達筆で『見てんじゃねえよカス』と書かれているだけのケータイの待ち受け画面。すっげー待ち受けだわ、これ。今さらながらに思った。たぶん俺以外の人に見られたとき用に設定してたんだろうなあと推測する。

ま、ひとりで感情を乱していても仕方ない。空腹は人を変えてしまふ危険なものだからな。ここは冷静に行こうじゃねえかワトソン君よ。

電話帳を開き登録されている人を眺めていく。人数少ねえな……。2桁もないって悲しすぎるだろ。

その数少ない人の中で、俺が知るかぎり使えそうで面倒臭くないやつを選択していく。

「ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、無理、無理……全部使えないじゃねえ

かよっ」

1つ目、同じクラスのイケてるオタクな芝田耀太。

2つ目、中学ンときになんかの因果で知り合った、平塚梨佳ひらつかりかという後輩。

3つ目、生徒指導部の鬼神として知られている女教師——刻无ときむす先生。

4つ目、黎明学園の電話番号。

5つ目と6つ目は今この学生島にいない家族なので当然除外だろう。

……とまあ、消去法を用いれば平塚なわけだけど、あいつはあいつで扱いが面倒だからな。例えるなら、人懐っこすぎて逆に人からウザがられる仔犬。

しかも平塚と最後に会話をしたのがいつだったか覚えてないほど疎遠化している。と言っても単に俺が平塚の絡みにうんざりして無視してただけの話だが、たぶん平塚のことだから充電切れのケータイに電話とか掛けまくってたんだろうなあ。

とか、まあ記憶があやふやなのでよく覚えていないが、とにかく平塚は面倒な女子だったと俺の本能が告げてくる。

しかし背に腹は変えられない！ このままだと空腹で倒れてしまう。ダンジョンのやり直しは痛いから、誰か俺に食べ物を迅速に提供するべき。

俺は慣れないケータイのボタンをぴこぴこ操作する。ケータイを使う機会がまるでないので打つボタンが硬かった。——それから耳に近づけた。

プルルルル、プルルルル、プルルルルと3コール鳴り、4コール目に入った直後、繋がった。

『プルル——ブズ、センパああーイ！ きゃあ！ 有理センパイじゃないですかー！ 一体全体どうしたんですか！？』

「うるっさ！」

声のボリュームでかつ。あまりの音量に、思わずケータイを耳から遠ざけた。

『もうー、連絡しても繋がらないし、死んだのかと思ってましたよ
ゝあっはははははは♪』

「……そうか」

勝手に死なすな。ケータイは死んでたけど。

『それよりセンパイっ』

「……なに」

『あたしの愛、センパイに届いてましたかっ！？ テレパシーです
っとな愛を送っていたんですけど！』

残念でした。俺のアンテナは年中有休だ。受信はできません。
ご了承しろ。

『センパイに命令された通り、学園内ではセンパイに話し掛けてま
せんよ！ それにメールや電話も自粛しました！ だから淋しかっ
たです！』

「……へえ。そう」

『はい！　でへっ、でへへへへへ』

電話切りてー。もう限界が訪れてるんですけど。マジで限界が頭
中をノックしてるんですけど。

ゴンゴンゴンゴンゴン！！　ずびばせえーん、限界でえーず。
マジ鼻声。

『あ！　そういえば！』

「……なに」

『有理センパイから電話なんて初めてですよね！　嬉しいです感激
ですー！』

「……そうか」

まあそうかも。電話なんてしないし、ましてや平塚なんか電話
だなんて考えただけで気分が滅入ってしまうわボケ。

『はいー♪　はう、なんだか胸が高鳴って参りましたよーあっはは
ははは♪』

俺のテンションとは大違いなテンションの平塚。

平塚は俺の一歳下のマシンガントーク女子だ。勝手に喋らせてお
けば1週間くらいずっと喋っていきそうなヤバイやつ。まあ……顔は
可愛い方だと思うが、一癖も二癖もあるので言わずもがな俺の苦手
なタイプである。

「……平塚、ちょっといいか」

『はいはいなんでしょう？ センパイの頼みなら例え火の中水の中
あの子のスカートの中です！ きゃっ、恥ずかしいいっ！』

「……」

RPGでラスボスを前にする勇者の気持ちがわかったようなわかないような……つまり微妙。

『あれっ、もしもしセンパイ？ もしかして愛が足りなくて電波g』

「アンテナはバリバリ立ってるから黙れよバカ」

『きゃーッ！ 勃ってるだなんてセンパイそれセクハラですよー！』

「黙れつつってんだろ」

『はい！ 平塚梨佳、黙ります！』

疲れる……。平塚マジばねえ。疲労度とかグラフにしてみたら驚愕だと思う。かつくーん！ て短時間で一気に右肩上がり。それが営業成績なら会社から表彰モノだよほんと。

俺は早くも平塚に電話したことを後悔し始めていた。やはり空腹は人を変えてしまうようで、まともな判断ができなくなる。恐ろしや恐ろしや。

「お前、今バイトか？」

たしかファミレスだかレストランだかのバイトをしていると、以前本人が一方的に喋り続けていたのを聞いたような覚えがあり、こ

うして電話をした所存だ。

『バイトならもう終わりましたよ？　今は家です。ただいま入浴でござい』

「……入、浴……？」

たしかに、そう言われてみれば、ぴちゃっ、と水が跳ねてるような音が聞こえてきている。こいつなにしてるのアホ？　お風呂にまで携帯電話持ち込まないといけないほどメールとか送られてんの？

『あれれー？　もしやセンパイ、あたしの入浴シーンとか想像します？』

ぶっ。ま、まさか！　そんなことするわけナイジヤナイデスカ。あーくそ、これだから平塚は苦手なんだ。随分と出会わなかったから忘れてしまっていた。このミスは中々痛い。

『いいですよ……センパイにならあたしの』

「黙れ、絶壁」

『がーん。き、気にしていることをー……』

おおっ、効いた効いた。つつうことはあれか、平塚はまだ発育期に突入してないわけか。使える対平塚武器を発見したな、これは。

待て。本題を忘れてる。

平塚マジばねえ。やつの話術はクールな俺をも狂わせる。

「でだな平塚」

『……はい?』

平塚が落ち込んでいる。先ほどと明らかに声のトーンが下がっていた。とても変化がわかりやすいです。

カワイソー。誰だよ女の子で遊んだ不届き者はー。まあ詰まらないことは置いておいて、さっさと本題に行こう。いい加減に引き延ばしすぎだ。

俺は至って普通に、特に深い意味もなく言葉が意味するだけのことを伝えた。

「今から俺ン家に来て、晩飯作ってくれよ」

『——え……?』

「2回も言わせんなよ面倒くせえな。だから、ワケありで腹減ったから何か作ってくれて言ったんだけど」

『あたしが、センパイの家に、晩ごはんを、作りに行く……?』

お前は、あれか、壊れかけのロボットか。区切り区切り話すなよ。

『……………』

「あーダメならいい。仕方ないから耀太に」

『行きますッ!』

キーン。耳がキーン。つつうか頭いてえ。

ほんと頼むから電話越しで叫ぶな。爆音ってレベルじゃねえよ？
ただでさえ常日頃から雑音という人間の話し声に参っているというのに。椅子のガリガガガリリガガツみたいな騒音マジNGな人な
んで、俺。

『行きます。行かせてくださいセンパイの家』

「あ、ああ。わかった。じゃ、じゃあ……夕食の材料を調達してから黎明学園の正門に來い」

珍しく平塚が落ち着いた声で真面目に言うものだから、少し緊張した。トキメキ（笑）とかいう幻想じゃなくて。誰これ別人？ 平塚だよね？ みたいな。

平塚は『わかりました。この平塚梨佳に任せてください』となぜか頼もしげに豪語すると、プチっと電話を切った。

たかが俺ン家に招いただけでこれかあ……。俺はよほど懷かれていますらしい。ここまできると、もはや異常だよ、っと忠告ね、そんな異常者を招いてしまった俺自身に。

「くそ……ダリい」

俺は平塚を迎えにくいため、頼んでおきながら仕方ないとぼやく、という自己中フィールドを展開しながら寮を出ることにした。

ツルペタな平塚梨佳をパシって寮に招く話

平塚梨佳と俺は同じ中学校の出身である。つまり先輩後輩の関係だ。

俺と平塚は学生島で生まれ、学生島で育ってきた。まあ俺はやむを得ない事情から転校があつて学生島から離れた時期もあったけど。その間も平塚はずっと学生島にいたらしい。年賀状や暑中見舞いは毎年きていたからわかる。無論、返したことは一度足りともないが。

俺と平塚がお互いを知り合ったのには詰まらないエピソードがあるのだが、詰まらないし面倒だから省くことにする。その時から、平塚は俺にベツタリくっついてくるようになった。そして、困り果てた俺はこう言ったのだ。『お前、今日から俺に話し掛けるの禁止用があつたらケータイにしろ』と。そう言つてデタラメな携帯番号とアドレスを渡してやった。当然だけど、翌日に喚き散らかされてしまうという散々な目に合った。いやーあれは宥めるのが大変だったわ。たしか本当の番号とアドレスを教えることで、なんとか収まったんだつたっけか？ ……記憶があやふやだ。

そして先輩である俺が一足先に中学校を卒業して私立黎明学園に入ると、やはりと言うべきか、平塚も入ってきた。俺のあとを追ってきたんだろうなと恥ずかしながら解釈しました。だって懐いてた女の子がついてきたら誰だってそう考えてしまうだろ？ うん、俺だけじゃねえはずだ、そんな意識過剰男は。

平塚は俺の言うことをほとんど聞く。来いと呼べば来るし、話し掛けるなと言えば話し掛けない。飯を作ってくれと頼めば、恐らく作ってくれるのだろう。……平塚がそこまでする理由を、俺は知らない。知る必要がない。別に知ったところで変化は訪れないだろうからな。ここは妄想の世界じゃない、現実だ。リセットボタンのないこの現実で厄介事を自ら産み出して面倒臭くなるのは、ほんとう

んざりなんだよ。

ゲームやラノベなら美味しいところなんだろう。やべえマジでシリアスだわこれみたいなの？　しかし俺からしてみると、そういうのマジで要らない。廃品回収にでも回収されてしまえばいいよ。

シリアスなんて、当事者は素晴らしく面倒臭いに決まってる。

「つか遅いだろ……なにやってんだよ」

入浴中の後輩をある意味強引に呼んでおいて、この台詞である。自己中すぎな俺やべえ。それでも学園で嫌われ者にはならないように気を遣っている方（だと思う）なのだが、認めたくないが仲のいいやつには素の俺が出してしまうのだ。ツツコミとか口調とか。

てか最近のケータイって風呂場とかに持ち込んで大丈夫なわけ？　湿気とか物凄いわけだけど壊れたりしないの？　……ああそう。俺の知らないところで、時代は進んでいくんだね。一緒に歩もうって言うてくれたよね時代の嘘つき！

……暇潰しにもならんわ。なんか恥ずかしいし。

気休め程度にしか充電できていないと思われる折り畳み式ケータイを開くと、ディスプレイが俺の顔を照らし出した。

ぐはっ。暗がりだケータイを開いたときの目のダメージは異常。眩しすぎ。もうちょつと遠慮してもいいんじゃない？

ケータイに話し掛けてしまう俺。かなり危ない人だと自分で思った。それこそ意識過剰ならいいのにな。

平塚を呼んでから10分くらい経過した……。

下校時間のすぎた学園は人気ひとけがまるでなく、夜ということも相まってホラーでデンジャラスな雰囲気ふんいきを醸し出している。先生が仕事などでまだ校舎内に残っているからホラーでデンジャラスな雰囲気

は半減しているけれども。

と、俺が校舎を眺めていると自転車の錆び付いた甲高いブレーキ音が、閑静な学園周辺に響き渡った。

どうやらお待ちかねの人物が到着したようだ。

総員、戦闘準備に掛かれとか言ってみたい。俺はいつも言う立場にも言われる立場にもいないので新鮮な気分になれると思うんだけど……どうだろうか。

「あー……総員つつつても俺ひとりだけか」

……………。

なにこの哀愁感！　ちよつ、マジやめてよ。なにガチになってんだよ。そんな目でみないでよおお！

「有理センパイ！」

「ん、ああ。来たか」

色々入って重量の増した、持ち手とか今にも千切れそうになっているビニールの買い物袋を両手で持って、上気した顔を弾けんばかりに綻ばせて言った。

件の平塚梨佳だ。

「平塚梨佳、ただいま到着しましたっ！」

「……」

「って、あれ？　センパイ？　そんなに見つめられると恥ずかしいですよ」

なんていうことだ……。俺は今、タイムスリップしたのかと錯覚したよ？

「もう、有理センパイってばあ。反応してくれないのには慣れてますけど、淋しいじゃないですかあー」

てこてこと俺の前まで歩み寄ってきた平塚は、ちょっと可哀想なことを言いながら、でへへと笑う。

その笑い方、笑い声、笑う顔、仕種、体型、服のセンス、何ひとつとして変わってない。中学ンときと何ら変わってない！ あれ、今って西暦何年？ 誰かマジで教えてー。

「はああ。やっぱり近くで見れば見るほどカッコいいですねっセンパイは」

「……俺は昆布かよ」

噛めば噛むほど味が出る的なの？ 冗談じゃねえよ。俺はしゃぶる派だ。……ナニコレなんか答え違う？ いや合ってるね。

「まあいいや。俺ン家に行くからついて来いよ」

「イエッサー！」

一々敬礼とかしなくていいから。お前何歳だよ。

性格が子供っぽいければ見た目も子供っぽい平塚。対して、俺はお世辞にも筋肉質なイイ男には見えないが、それなりな高校生。……これは善良な島民にあらぬ誤解を生みかねんな。学園内だから大丈

夫だとは思うが、噂とかになったら面倒くせえなあ。あ、教師がいるじゃん。やっぱ急げ俺。

平塚はひとりで俺とは違う方向、学園の外に歩き出そうとした。あーやっぱり学園外に行こうとするか。

俺は声の大きさに注意を払いながら、

「あー、そっちじゃねえ。こっちだ、学園ン中」

意気揚々と進み出した平塚を呼び止め、寮がある方を指差した。

「はい？ 学園の中……ですか？」

「まあな」

「了解でっす！」

心優しい主人公なら、ここで『梨佳、荷物重そうだね。俺が持つてあげるよ』みたいな台詞を吐くんだろうけどお生憎様。俺の脳にそんな台詞はインプットされていません。受け付けてもいません。

「にしても、どうしていきなり呼びつけたんです？」

平塚は千切れそうなスーパ一の袋を気にした様子で尋ねてきた。理由が情けないので言いたくないけど、別に拘る必要はないなど判断する。

「手持ちが50円しかなくて……ちよっと、な……」

昼にパン代100円、耀太に頼んだ件で500円。残金は50円

なり……。

俺の声のトーンが数段階下がったのは気のせいではない。

「なるほど……。そこでセンパイのピンチを救うべく、白羽の矢が立ったのがワタクシというわけですね！」

消去法だけど、と言える雰囲気ではなかった。平塚は本当に嬉しそうに無邪気に笑っている。そこそこ良好な雰囲気をもつ壊すほど、俺も軽率ではないのだよ。空気に敏感な男——空気人間の異名は伊達じゃあない。

「到着したけど、あんま大きな声出すなよ？」

「あれ？　ここって……？」

校門から僅か数分後。我が家『あかつき寮』に到着したわけだが、平塚は小首を傾げている。

平塚が不思議がるのも無理はない。あかつき寮の知名度は震えるほど低いのだ。それはもう、今日の靴下は何色にしようかなーってことくらい適当で、どうでもいいことだ。

学園から認知はされてるはずだが、生徒からすれば『グラウンドの片隅にあるボロ屋ってなに？』又は『どうでもいいか』程度のレベルだと思う。

ま、生徒から干渉されないって点は、俺からすれば寧ろ好都合だと言える。

平塚をあかつき寮に入れると「お？　お、おお」と微妙な声を洩らした。

中は外ほどボロくない↓意外と綺麗↓凄い！！　とか思ってたんだ

ろうな。

「お、お邪魔しまぁ〜す……」

たしか来客用のスリッパがあったはず……どこだったっけかな。
探すの面倒だな。まー、平塚だからなくてもいいよね。

「平塚、2階の05号室が俺の部屋な。荷物持つわ」

階段を上がろうとしていた平塚からビニール袋を奪う。これ俺
りの配慮ね。階段から肉とか野菜をぶちまけられたらどうよ？ 後
片付けとか面倒だろ。そんなことしたくないから、自ら志願してや
った。

「あ、そんな……ありがとうございますセンパイっ」

「別に。あと少しだし」

ビニール袋つつうのは底を支えるようにして持つと破れねえもん
なんだよ。ちょっと思考を凝らせばわかるだろうに。

平塚って胸にも脳にも栄養が行き届いてないんじゃない？ 効率悪
いな。

「……ほら、上がれよ」

「はいっ。05号室へごっごー♪」

平塚はこんなテンションだが、遠足とかピクニックでは決してな
い。

ここはあかつき寮。正式名称は『あかつき荘』。お馬鹿な寮長の

ミスにより、あかつき寮で馴染んだ。

オンボロな寮に俺みたいな生徒が住む寮。……うわ泣けてきたよっ。あかつき寮にも良いところはあるのにね。偉い人にはそれがわからんのです。

「むふふ〜センパイの部屋♪ でへ、うえっへへへ」

歌うように口ずさむ平塚は超ご機嫌な様子だ。

俺はというと、

「重……」

地味に重い袋にげんなりしていた。なに？ スーパーでダンベルでも買ったの？ それとも鉄骨？

俺は中身が気になり、どんな食材を調達してきたのか尋ねようと、階段を上がっている途中の平塚の方を見上げた。

「……は」

耀太辺りなら発狂しそうなイベント——ミニスカートからパンティイとご対面！ ……にはならなかった。俺は何を期待していたんだろうか。変態って空気感染したっけ？

平塚の格好は、無駄にヒラヒラと重なっているキャミソールに通常より少し長めのホットパンツ。露出度は高めだが特段エロいっつうわけでもない、女子高生（外見も精神年齢も中学生だけど）ならおかしくないものだ。

眼前に広がる、平塚の小振りなお尻。肉のあまりついていないスラリとした生脚。俺は溜め息を吐き、くだらん煩惱を振り払った。

「ここですね、05号室」

「鍵開いてるから、先に入れよ」

平塚を促すと、「失礼しまーす……」とこっそり入っていった。
俺もそのあとに続く。ルームへIN。

平塚は無言で部屋を、まるでモナリザを拝見しているかのような
呆気に取りられた様子で見っていた。
やだ、照れる……。

「き……」

「き？」

「き、汚いです……これは許されないレヴェル」

部屋に入った瞬間この言われよう。そんなに汚くはないはずだけ
ど、平塚から見たら汚く感じたらしい。

俺は邪魔つけなビニールの買い物袋を持ちながら改めて自分が生
活している部屋を眺めてみた。

……え、普通じゃね？ というのが感想。特に汚い点は見受けら
れない。

「いやあゝさすがは有理センパイ」

「は？ なんて誉められてんの俺」

「脱いだ物で畳が覆いつくされている中で生活できるなんて、さすがとしか言いようがないです。あとAmazonの段ボール多すぎです」

誉められてないですね、わかります。

えーまあたしかに足場とかないけども。でもベッドから出入口と冷蔵庫までは若干あるからよくね？

そもそも洗濯物は洗濯機に入れればいいじゃない。そう感じたやつはその通りと言えるが、洗濯機は01号室——またの名を寮長室にしき置かれていないため（そもそも洗濯機は寮長の私物である）洗濯機を使おうとすると必然的に寮長と関わらなくてはならない。俺はそれが嫌なのだ。

「——買ってきた物、一体どこに置くんですかぁ！」

なぜか平塚がちよっと怒った感じに言う。なんで若干キレ気味なのか意味不なんですけど。

「……じゃあ、とりあえずそこに」

漫画が積み重なって、漫画タワーとなっているちゃぶ台を顎でしやくる。すると平塚のこれ見よがしな溜め息が聞こえてきた。

「不安定に積み上げられてる漫画の上に、この買い物袋を置くつもりですか？」

平塚のジト目がぐさりと突き刺さる……。眼力を成長させたな平塚め。

「……ああ、Amazonの段ボールの上に置いとけばいいんじゃない

ね？」

「ん……まあ」

我ながらナイスアイデアだと思った。平塚も不満そうだがまあつつたし。

一番大きくて丈夫そうな段ボール箱の上に、平塚が買ってきた食材が入っているビニール袋を置く。そしてベッドへとノロノロ移動した。あー落ち着くわー。

「そう言えば台所はどこにあるんですか？」

ああ台所ね。そりゃ晩飯を作るんだから調理場は必要不可欠だな。調理場から料理は始まるのである。うん、不可欠だ。

「台所は……あー、台所は……台所？」

「……」

つか段ボールってかなり便利じゃね？ 片付けのときでも段ボールに適当に物を突っ込んでガムテで封印すれば片付け即終了だし、Amazonという通販サイトを利用してたら無駄に増えやがった段ボール箱をひっくり返せば簡易テーブルにもなる。おお、段ボール強し。

「……」

「ないんですか」

せめて疑問符つけろやと思ったけど、答えがわかってるんなら余計な会話になるので結構でした。

「……忘れてたわ。台所なかったんだった」

包丁とかガスコンロが危ないとかいう理由で寮長室にしかないんだ。くそ、お陰で電子レンジ系統の飯しか食えねえんだよ。せめて電気ポットがあればカップラーメンとかカップ焼きそばが食べれるのに！

「センパイ……」

しっかりしてくださいよお、とでも言いたげな目付きだな！
自炊なんてしないから忘れてたんだよ！

こんな俺でも罪悪感を感じるのです。3秒ほど。

「じゃあ缶詰とかパンとか買ってきたか？」

「いえ、食材しか……」

「マジかよ」

いよいよ面倒臭くなってきやがった。

座るスペースがないため冷蔵庫の前で立ちっぱの平塚を窺うと、今日は散歩に行かないと言い渡された仔犬のように悄気ていた。え、なに、そんなに晩飯作りたかったの？

「えっと……じゃあ、今から何か簡単な惣菜でも買って来ます。あの、何が食べたいですか？ この時間だから美味しそうな残って

ないかもですけど。あ、ローンソならまだおにぎりとかあるかも――」

……そんなに俺に手料理を振る舞いたいわけ？ お前、俺に惚れてんの？ 的な感じに推測してる俺キモ過ぎ。でもまあ明らかに惚れてるよね。……そういうラブリーキャラだろうというのは重々理解しているから、ナルシスト野郎とか言うなよ。

「あ、一応、食材は冷蔵庫にしまっておきすね！ 腐っても勿体ないです」

明らかに頑張って笑顔になってます風の平塚。でも演技が下手くそ。無理してるのバレバレ。センパイのために無理してる健気な私を見て！ とか内心で思ってるんじゃないかと勘繰りそうになる。ま、平塚に限ってないだろうけど。

ほんと変わらねえ世話の焼ける後輩だな。ったく。面倒臭すぎだろこれ。やっぱ他人なんて家に招くもんじゃねえな。これ結論。

「待て待て」

「はい？」

「晩飯作ってくれるんじゃないの？」

「だって台所が……」

「いや、だから寮長室にあるつつってんじゃないん」

「初耳ですっ！」

だからなんでキレ気味なんだよ。しかも声でかい。隣の06号室にはまだギャルが帰ってきてないみたいだから噂にはならないだろうけど、うるさい。

「ようっし……見ててくださいよ有理センパイ！ 今宵、平塚梨佳の全力を見せますから！！」

なくせに力瘤を腕に作ってみせる平塚。ロリ萌えとか妹萌えな男なら落ちたな、と確信するほど可愛らしい。ああでもそりゃ二次元の女の子の話に限るか。

「はいはい。わかったから声は小さめにな」

仮に……もし仮に平塚が俺のことをまだ好きだとしても、それは残念です、面倒臭い彼女とかいらないんで。

「理解です……！ さあ行きますよセンパイ、あたしの手料理でメロメロのデレデレにしてみせますっ！」

「食えりゃいいからね？ 変な隠し味とかいらないからね？ いや、これ振りじゃないからね？」

部屋を出て、俺と梨佳は買い物袋を抱えて下へと降りる。目指すは敵の本陣——寮長室である01号室。

今ならわかる、織田の鉄砲隊に突撃していた武田の騎馬隊の気持ちか。そうかこんな気持ちだったのか。鉄砲を向けられる中、馬鹿みたいに真正面から突撃……さぞかし面倒臭かったに違いなからう。

あれ？ 単純に何か食べればいいなと思っていただけなのに、いつの間にかこんな面倒なことに陥っていた。

近くのローンソに行って金下ろして買うもん買えばそれで終わり
だったのに。俺ってほんとバカ……。

オンボロなあかつき寮に鬼神が降臨しやがる話

先に言っとく。俺は運動ができない。寝てばかりなので腹筋とか割れてないし二の腕もポヨってる。でも体型が痩せてる方なのは、血筋とか遺伝的なものなんだろう。これはマジ感謝してる。面白くなくて友達のいないデブって、人生終わってるだろうが……救いようがナッシング。でも俊敏なデブ亜種はやべえ。

ラノベやギャルゲの主人公は普段体を鍛えてるわけでもねえのに喧嘩が強かったり足が速かったりな設定が多いけど、ありや嘘っばちだね。鍛えてない主人公はダメ男君にするべきだと思います。だって現に俺が運動できねえもん。だからと言って、俺が主人公の器に当てはまるかと素質を問われたら、明らかに適合できてないけどね！

「センパ〜イ……？ 物凄い音しましたけど大丈夫ですか……？」

「いてえ……主に後頭部がいてえ」

俺、実感したわ。やっぱ日頃から運動して鍛えてないとドアを体当たりでぶち破るなんて真似、到底できねえよ。やべえ！ こりゃ漫画の読みすぎだ！

「ああ〜明日辺り、たんこぶになるかもですねえー。すみません、あたし医療スキルないんで……でもベホマなら使えなくもない、かな……？」

（・・ω・・）な顔で俺を見ながら、申し訳なさそうに言う平塚。そんな哀れむ目で見ないでくれえ！ とでも言っただけのかバカめ。誰が言うかよ。あと、使えなくもないんだったらベホマして

みろ。寧ろしてください後頭部がズキズキ痛みます……。

数分前、下に降りてきた俺たち。台所が唯一ある寮長室を尋ねると、クソ寮長はまだ帰ってきてなかったようで留守だった。残業に囲まれてHPを削られてるんだろうなと予測する。ははっ、ざまあああ。

で、鍵の閉まっている部屋にどうやって入るか、廊下で突っ立って悩むのもダルいし、だからと言って寮長がいつ帰ってくるのかもわからない（俺としては寮長に関わりたくない）し、腹が減って胃液が気持ち悪くなってきたので短期決戦の常套手段、強行突破することにしたのだが——見事に失態をしてしまった。

ボロいドアだから簡単に突破できるだろうと高を括っていたら、俺のスペックが思っている以上に低かったらしい。つまり跳ね返されたのだ。ドアに弾かれるように、逆にぶっ飛ばされた俺は後頭部を廊下の壁にぶつけてしまった。ガゴンとか音が聞こえたような気がする。これが半端なく痛い。後頭部からの痛みなんて慣れていない俺には大ダメージでした。

「ううん♪ 愛しの有理センパイが怪我をしてまであたしのために……感動ですう」

「……」

「痛みますか？ あたしがふーふーしましうか？」

「……」

「ああ……でもでも寡黙なセンパイもカッコいいですねえ」

無視に限るな、こういう話は。下手にツツコミを入れるとこっち

が逆にやられかねん。

「無口なツツコミ系の先輩と、お喋り大好きな後輩ってなんとなく相性が良さそうに思えませんか？」

にしても、平塚はたしかに可愛いけど、付き合うとしたら大人しい感じの清楚な女子がいいかな。……つつつても、ここ最近で清純とか清楚な系統の可憐で奥ゆかしさを感じる女の子なんて絶滅危惧種だよなあ。

「パツと見、後輩の話を無視してるんですけど、なんだかんだで話をしっかりと聞いてくれているんです先輩は」

お互いあんまり話したりはしなくて帰り道とか無言なんだけど、その無言の雰囲気さえもが落ち着けるつつうかなんつつうか。手とか繋ぐのもいいかもしれないな。言葉を交わすことはないんだけどラブラブ甘々で相思相愛のカップル……みたいな？

耀太の言う黒髪ロングもいいような気がしてきた。黒髪ロング……いいねえ……いや、そういや最近見たな、黒髪で長いやつ。板垣夏希だったっけか？

「それで『執拗に絡んでくるなあ』とか先輩は日頃感じてるんですけど、ふとした拍子に、賑やかで騒がしい後輩がいないときに虚無感を感じるんです。『あれ、梨佳がいないとこんなに静かだったのか』——って！ あたしの存在感に気づかされた有理センパイはあたしに告白して——そして、そしてハッピーエンドなんですよおおお！！ きゃああああセンパイ結婚してくださああいつ！！」

やっべえよ俺、なんか理想の彼女との雰囲気語っちゃった。夢見る男子かつつうの。現実が厳しいばっかりに幻想に走ってしまっ

たっぽい。

「——って、聞いてないですねセンパイは！」

ほら、これが現実。厳しい厳しい。ツンドラ荒原並みに厳しいわ。でもこういうやかましい女の子が好みなやつもいるんだよねーと考えると、やはり恋愛という俺と無縁なことでも多少は考えさせられる。

「……」

「……こっち見んな」

「すみません。つい」

「……」

平塚はきつつい半目で俺を睨む。たぶん『このグダグダな状況をどうにかしてください』と考えてるに違いない。生意気なやつめ。生意気な……グダグダでごめんなさい。すみません本当に申し訳ないです。これがいわゆる平謝りというやつである。

いや無計画だところなるわけだ。リアルって、いつも残酷なのよね……フツ、笑いが込み上げてきた。なぜだろう、今無性に盗んだバイクで走り出してえ。

と、唐突に平塚がゆらりとドアの前に立った。

「あたしも体当たりかましてやりましょうかッ……」

平塚がドアを睨み付けながら怖そうで怖くないことを言う。まず

覇気がないからダメだな、うん。

「鈍臭いとは言え、あたしの未来の旦那である有理センパイを結果的に傷つけるとは……許せねえです」

「やめとけ。壊れたら壊れたでまた寮長がウザいし」

「……センパイが言うんなら、まあ我慢してやらなくもねえです」

平塚が上から目線なのはなぜ？　つか、平塚梨佳さんのキャラが変わってるのはわざとだね？　素じゃないよね？　急にキャラ変えると痛いよ。

「……私の部屋の前で何をしているのだ貴様らは」

「え？」

「な、な……んだ、と？」

——人生はいつだって突然の連続だ。by俺。

プレイステーションポータブル

教室でPSPで遊んでたところにゴリ山先生が来襲してゲーム機を没収されるのも、授業で問5を答えろと物理の先生に名指しされるのも、急に尿意に襲われて授業にまるで集中できなくなって漏れないように必死にモジモジするのも、いつもいつもいつも突然なのである。

「綴イ……貴様、私の寮に堂々と彼女を招き入れるとは……。これはどういう見だコラ、ええ？」

あかつき寮の寮長。

本職は英語教師。兼、生徒指導部の先生。

史上稀に見る元ヤンキーというあり得ねえ経歴。

『学園内で煙草の臭いがしたら、そこには鬼神が降臨していた』
とまで言われる煙草愛好家。

どうやら俺は、黎明学園の鬼神を目の前にしているらしい。うお
わあああ！

……俺の盾になって「お前は先に逃げろ！」と言ってくれる友達
いないの？ 耀太ならやりかねんが、あいつ微妙にホモっぽくて苦
手なんだよな……。無駄に距離近いし、高スペックなイケメンだし。

って違うだろ。思考の中に逃げ込む俺！ 鬼神を迎え討て！
いけるやれる生き残れる！ 俺ならやれるできるって！ もっと熱
くなれよおおおおお！

「いや待て。違う。わけを話すから待てて……」

声が震える。理由？ 怖いからに決まってんだろ言わせんなよ恥
ずかしい。

「いやあん♪ 彼女だなんて刻无先生おひげってばあゝ。周りには秘密に
してるんですから恥ずかしいですよ……」

「……ほう。秘密にしているのか」

「平塚あああ」

俺は頭を抱えたポーズをしながら床に倒れた。
ドガ！ という音。俺は背骨を痛めた。いてえ。

「言い訳なら私の部屋で——ん？ 買い物袋、か？」

「そうですようー♪」

ビキビキと刻无先生の額に青筋が走った。どうせくだらん想像をしてるに違いない。

「……」

「違うから。いや、これマジで同棲とか通い妻とかそういうんじゃないからねえから」

「……同棲っ！？ 通い妻っ！？」

しまった、平塚が反応しやがった……！ 俺の致命的なミスだ。

刻无先生——またの名を、学生寮『あかつき荘』寮長。ただいま降臨された。皆の衆、控えええい！ 控えんかああ！

「何をしている？ まあいい。……で、お前は？」

軽くスルーとは……。俺の控えポーズが無駄になったところか痛いやつじゃねえか。ま、そんなポーズ元々してないんだけど。

「えと、平塚梨佳です。この学園の1年6組の生徒です。将来の夢は有理センパイの奥さ——」

「あゝ？ 後半が何？ 三十路が近いからよく聞こえないのだ。はっきりと話してくれ平塚ア？」

……………刻无先生に色恋沙汰は厳禁だ。あと、リア充っぽいのも

ダメだ。よろしくない。理由は察しろ。

謝れ！ 平塚、謝れ！ 取って喰われるぞ、明らかに偽名な刻无先生に喰われてしまうぞ！ 謝れ！

「あ、えう、そのお……ごめんなさいっ」

ガバツと頭を下げた平塚を見る刻无先生の瞳に、ドス黒いものを俺は見た。恐ろしいってレベルじゃねえぞ。元ヤンばねえっす。

「……とりあえず事情を聞くとしようか。こい」

「……あー、面倒くせえ」

「あ、そうだ。刻无先生、台所を借りてもいいですか？」

「夕食か？」

「はいっ！ 有理センパイのために愛を込めるどころか、愛で料理を作ります！」

もはや何も言うまい。

平塚はアホだ。やっぱアホはアホなりにアホを改善しようとする努力が必要だと思う。治らないアホなら諦めるしかねえけど。

「……………そうか」

「はい！ 先生は晩ごはんどうします？ 余計でなければ、あたしが先生の分も作りますよ！」

「……た、頼んでもいいか」

「任せてくださいっ！ 料理にはまあーまあー自信がありますから！」

こうして、後輩を寮に連れ込んでるのがバレた俺は刻无先生に連行されることになりました。

つか刻无先生の嫉妬とか私念とか混じってるだろ。間違いなく混じってるだろこれ。別に異性を連れ込んではいけないみたいなルールが定められているわけでもなしに。

「先生はー、好きな料理って何ですかぁ？」

「私か？ 私は……焼き鳥とか唐揚げ、とか」

「鶏肉系が好物なんですなーっ☆」

「う、うん」

……最後、平塚に若干気を許したと見た。いや、気後れか？ どちらにしろ言えることは、平塚梨佳は恐ろしい子……。

ズボラな俺が後輩お手製の夕食をご馳走になる話

平塚は夕食（2人前）を作るため、俺は晩飯のため、刻无先生は俺の事情聴取のため、それぞれの目的を持ちながら先生の部屋へとお邪魔する。

「では夕食の方は頼んだぞ平塚。調理に必要な物は、あるもの自由に使ってもらって構わないからな」

「……え、あ、はいっ、頑張ります！ ……これも許されないレヴェル」

平塚は顔を強張らせながらボソリと呟くと、入ってすぐ正面に見える台所へと、様々な食材の詰まった買い物袋を運んでいった。早速お料理を始めるっぽい。頑張れ平塚腹減った。

刻无先生は台所をスルーし、茶の間にバイヨハザードのゾンビの如く突き進んでいき、ベッドに食らい付くような体勢で顔面からダイブした。色々と問題のある光景を目の当たりにしてしまったようだ。

仕方ねえ、刻无先生の部屋の様子や生活実態を、この俺が順番にリポートしてやろう。

おおっと、刻无先生に動きありだ。

「あゝ、疲れた疲れた。小テストの採点とか面倒過ぎるぞ……」

なんてぼやきながら、寝転んだまま器用に黒色ブラウスを脱いでハンガーに通し、クローゼットに引っ掛けるのかと思いきや、畳の上に置いた。クローゼットまで4歩程度だろ、歩けよそのくらい…

…。同じく黒色のピチっとしたパンツも脱ごうとしたが俺の存在に気づいて、寸前で思い留まったようだ。

刻无先生の部屋は驚愕の汚さだった。脱いだ下着やシャツ、学園で使う教科書の類いからプリントが仰山綴じられたファイルなどなど、あらゆる物が畳に大量に散らばっていて足の踏み場もないくらい。ベッドの上にまでジャンプとかヤンジャンが放置されている。教職員がジャンプ系なんか読んでんじゃねえよ、生徒受け狙ってんのかよ掃除しろ。

白いカーテンは掃除されてないらしく色ヤバイ。壁もヤバイ。地デジ対応のテレビも画面に埃が付着ヤバイ。部屋が煙草ヤバイ。畳は…。先生の黒いおパンティが散乱しているせいでよく見えません。紫とか黒とか多めだな…。くっ、これが大人の魅力というやつか…！！

「きったねえな。仮にも女なんだから片付けくらいしろよ寮長」

台所スペースと茶の間スペースの仕切り部分の襖に背中を預けていた俺は部屋の中があまりにもあまりなため、うっかり口に出してしまった。やっべえ！

案の定、ベッドに寝転んだまま刻无先生はギロリと切れ長な焦げ茶色の眼を細め、こちらに向けた。

「仮にも、だと？ 中々言うじゃないか綴。それは私に喧嘩を売っていると解釈していいのか？」

「滅相もない」

「……ふん。貴様も平塚の手伝いをするくらい、働こうという志向を見せて欲しいものだな」

自分は手伝う素振りすら見せないくせに、この言い様だよ！　ふっざけんじゃねえよ無駄にオッパイの成長した三十路直前女め！　少しくらいオッパイを平塚に分けてあげてよ！　でも口出しすると怖いから言うのやめとこ。耐えるのも大切だと思うのです。閉口第一！　閉口第一！

チッ、ガチでこれムカつくわー。腹立つわー。

「平塚あー。今日の晩御飯はなにー？」

「今日はですねー、焼き肉のタレをベースに作った特製醤油ダレを絡めさせた鶏肉丼とトマトたっぷりサラダに玉子豆腐、普通のお味噌汁ですよー」

「おお！　それは楽しみだな」

刻无先生は、泣く子もさらに泣かせる鬼神と学園では――いや、学生島では広く知れ渡っているが、それと同じくらい美人だとも言い伝えられている。都市伝説じゃないから、なんとなくだけ悔しいよね。

暗い茶色の髪をボサボサに伸ばしただけの髪型だけど、美人がするとお洒落に見えるから不条理。お洒落と言うよりかはカッコいいって感じに近い。この髪型からも元ヤン臭がそこはかとなく漂ってきてるのは気のせいではない。

身長も高い、でも細身な体つきでボンスラッポンみたいな。ボンキュッボンまではいってない。だから生徒たちから人気とか結構ある。女子からは憧れとか頼りにされてて、男子からは言わずもがな、M野郎からエロ野郎まで様々だ。

「平塚は家で料理とかよくしているのか？」

「結構してますよー。お母さんとかの帰りが遅いときとか。先生は料理とかは……あつ、ごめんなさい……」

「……………いやいい。気にするな……、私は料理とか、そういうの、上手くできないから……」

あー、いや、まあ、つまり、外見は何でもできそうで美人で綺麗好きそうでカッコいい風のこの刻无先生は（認めたくないけど）俺と同種のダメ人間なのだ。刻无先生がいけ好かないのは同類嫌悪なかなー、とか考えたりする。するとより嫌悪感が増すから不思議だよ。

「ハ。できないんじゃないかって、やろうとする気がねえだけのくせに……」

「オイ綴ィ。表出るか？」

「すみませんでした」

こっわー。これは百獣の王ライオンも尻尾を巻いて一目散に逃げ出すオーラ。

ライオン「おいこれマジやべーよ。怖すぎんだろ」

チーター「ライオン先輩マジどうすんすか。やばくねっすか」

トラ「こりゃサバンナの女帝は決定じゃね？俺、アマゾンに引越すわ」

ワニ「刻无サンばねえ。食物連鎖の頂点^{かみ}決定っしょ」

ハイエナ「じゃあちよっと引越しの準備してくるでござす」

とか言うに決まってる。俺だってサバナを刻无先生が歩いてたら反射で逃げ出すもん。マジで。

「んっ……味は大体こんなものかな♪」

平塚が焼いている肉がジュワァ、と醤油ダレのいい匂いと音を茶の間に漂わせてきた。途端に腹の虫が一斉に騒ぎ出す。こちらからお前たち、あまりにうるさいと追い出しますよ。近所迷惑ですからね。

……近所迷惑と言えば、静寂に包まれたテスト中に腹がぐるるとか重低音で轟いたら、本当に死にたくなる。俺は先々週くらいに死にたくなった。周りから感じる視線に顔真っ赤。そういう嫌なことに限って夜寝る前に思い出してうわあて悶絶するから余計に鬱にならね？ あー、どうでもいいか。

刻无先生はぐくりと喉を鳴らした。先々週を思い出して少しテンションの落ちている俺も同じように鳴らした。

「……」

「……」

俺と先生は顔を見合わしてから、

「ちょっと片付けるか」

「私はちやぶ台を発掘してくるとしよう」

珍しく、超珍しく、率先してそれぞれ動き始めた。とことん現金なやつらだよなあ俺たちって。

でも、それが人間ってものなのだよ。キリッ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「ご馳走様でした。かなり出来がよかったぞ平塚」

「……まあ旨かったよ」

マジで旨かった。これは商品化できる。『平塚さんちの特製鶏肉
丼』とか。

……そう言えば、食材費って俺が返してあげるべきなのだろうか。
いや、手持ちないし、また今度でいいよな。覚えてたらちゃんと
返すでしょう。

「えへへ……お粗末様でした」

称賛の言葉に、平塚はにっこりと微笑んだ。その顔は昔よりも、
少しだけ大人びて見えた。

「それじゃ皿とか片付けときますね」

「済まないな。そうしてもらえると助かる」

平塚は慣れたように皿やお碗を木の盆に乗せていき、台拭きでさ
さっとちゃぶ台を拭いて綺麗にすると、あっという間に片付いてし
まった。……こいつの家事スキル、これは評価せざるを得ないよう
だ。

夕食を終え、当然のように手伝わない姿勢を貫いている俺と刻无
先生はと言うと……

「まあ、不純異性交遊には引っ掛かるまい。教師である私もいたことだしな」

「だよな。何も問題とかないんじゃないかね？ 平塚だし」

「ああ。御飯は美味しいしエプロン姿もキュートなものだが、平塚だからな」

と、先生はベッドに肘をついて横になりながら。俺は邪魔な下着類をぶっ飛ばして作ったスペースに仰向けで寝転びながら口々に言う。平塚には悪いかもしれんが、刻无先生を納得させたのだからラッキーだ。

平塚は台所で水をジャージャーさせているため聞こえていないっぽい。鼻歌を歌いながら洗い物……超ご機嫌な様子だ。

今どきあり得ねえ鈍感主人公じゃないから、なんとなく超ご機嫌な理由はわかるけど。

「しかし綴」

「あ？」

「血迷って変なこととはするのではないぞ」

これが可愛い可愛い多恵ちゃん先生なら、「変なことってなんですかー？」とかイジワルして聞いてみたいところだけど相手は鬼神だ、対応をミスセレクトするわけにはいかない。

多恵先生に会いてー。

「わかってるつつうの」

「……貴様はヘタレてるから大丈夫だとは思いますが、もしものためにな。一応、言っておいた」

ヘタレだってー。誰だよヘタレって先生から言われてんの可哀想ー。……俺のことかよ畜生。

こうにもズバツと言われると、こいつ何なん？　ってなるな。俺をデイスってんじゃないやねえぞ。

「あっそ。まあ間違いは起こさねえよ」

別に俺はヘタレてるわけではないが、反論するのが面倒なので不本意だがそういうことにしておいた。

反論すると必ず話が長くなって喉的にも気持ち的にも疲れるからな……。こういうのは軽く流すに限る。

「ならばいい。私も貴様がどうしようもないクズだとは重々心得ているが、見識のあるクズだということは知っているからな」

「え、なにそれ若干誉めてんの？　言っとくけど、『ちょっとこいつイイやつじゃね？』的な雰囲気を出したところで、平塚の飯は食わせねえよ？」

「なっ……」

下心が読めるんだよバアアアアカ！　やっべ、なんかこれチョー楽しいんですけどっ。「なっ……（驚）」いただきましたー。真顔で俺をさりげなく誉めていたところに思わぬ奇襲でびっくり顔の先生ざまああ。……でも、クールビューティーの中に隠れていた、

ちょっと可愛い一面を発見してしまったのは誤算だった。

だが、すべて俺の攻勢で終わるわけがなかった。

「ほう……？」

ニヤアと不敵に妖しい笑みを浮かべた刻无先生。

なーんか嫌な予感がビンビンするんだけど……。と思っていたら、

「ならば台所は貸さないことにしよう」

「なっ……」

やっぱりやられた……。台所があるのは寮長室だけだった。なんという策士。鬼神に策士をプラスだ。ててーん。鬼神は策士の称号を手に入れた！

「つか俺の部屋にも台所作れよつつう話だよなあ」

ぼやいたところで台所が現れるはずもなく。平塚が飯を作りに来たときは、これからもれなく刻无先生もついてくるってか。要らねえええ。ズボラなクールビューティーなんて外面がいいだけで、嫁の貰い手なんて見つからなさそうだ。……こんなこと絶対に口に出せないけど。

壁に掛けてある時計がさりげなく視界に入り、なんとなく時間を確認すると既に21時を過ぎていた。そろそろ帰るか。

「今日はもう帰るかな……」

と、そこにちょうど平塚がやって来た。

「あ、いいなあー！ あたしもお喋りに混ぜてくださいよう」

エプロンを外した平塚が洗い物を終え、茶の間へとやってくる。座るスペースがなくて少し困ってるようだったから、「適当に座れよ」と言っただけだ。「なぜ貴様がそれを言うのだ。私だろ、その台詞」と刻无先生が口を出してきたが、無視してやった。

平塚はプリントの束をどけて場所を確保。汚い部屋を掃除したそうなの、ウズウズした顔をしながら畳の上に腰を下ろす。

「平塚はこんな時間まで大丈夫なのか？ 家族は心配してないのか？」

「あ、大丈夫だと思いますよー。お母さんには言っておきましたからね」

女子高生って母親と仲いいやつは、ほんと仲いいよね。仲悪いやつは、ほんと陰険そうだけど。

俺は脚に絡まっていた勝負下着感がプン匂うブラジャーを振り払い、重たい腰を起こした。これがマジ重労働。鉛のついた腹巻きでも巻いてるんじゃないかって思うくらい。

「センパイ、どこに行くんですか？」

「部屋。今日はもう眠たいし、帰るわ」

すると平塚は、信じられない！ という表情で声高らかに言った。

「家^{うち}まで送っていきたくないんですかつ！ 夜ですよ？ 女の子

ひとりでなんて危ないですよ！」

いやいや知るかよ。そんな面倒なこと、わざわざするわけねえだろ。

学生島の一部は治安は悪いが、それは一部に限ることで、全体的に見れば至って平和。特段問題があるってわけでもない。

「いやお前チャリだろ。家なんて漕いでればすぐ着くから。うろ覚えの曲とか口ずさんでればあつという間だから」

ふふふーん、ふふー……あれ、メロディどんなだったけ？　みたいな。

「そうですけどお……」

項垂れていじいじする仔犬平塚。体型はチワワだけど、性格的には豆柴かな。つかなんて薄着で来たの？　誘惑のつもりなら残念でした、魅力があまりにもないので出直してきてください、まな板に豆粒な平塚さん。

「可哀想に……。私は平塚のそのキャラ、嫌いではないぞ。どこぞの年中寝ているような非生産的な男と違ってな」

ああ、刻无先生は漆黒のダブルマンですね。言うまでもねえか。ベッドから睨んでくるあの獲物を前にしたような獰猛な目……まさしくダブルマンだ。

「自転車をセンパイが漕いで、あたしが後ろからセンパイを抱き締めたかったのになあ……。2人で夜道を自転車で駆け抜けたかったのになあ……グズッ」

「しつこく言っても聞くわけがないだろうから、今回は諦めろ平塚。なに、チャンスはあるのだ、そう気を落とすな……な？」

わかってるんなら一々言うなっつう話だ。それはいわゆるイヤミか。

あと微妙に優しいキャラみたいなた台詞吐いてんじゃねえよ。そういうのは可憐なおっとり系の巨乳なお姉さんの台詞だと思う。茶髪で束感のある軽くウェーブしたロングヘアーのお姉さんに抱き締められたい！……先生の場合、巨乳しか合ってねえじゃねえか。抱き締められた挙げ句、気絶しましたなんて普通にありそうで怖いな。

「せ、センセえーっ！」

「おっと、どうしたのだ急に抱き着いてきたりして」

俺は欠伸をして涙で滲んだ視界で、平塚が刻无先生に覆い被さるのを見た。

「ああこのおっきな胸が憎いい……。それ欲しいです、切実に」

「そうか？ あっても邪魔なだけだと思いがな」

それは禁句だよ、巨乳な刻无先生。

ほら、平塚の一念発起。巨乳への逆襲だ。

「全国の貧乳で悩んでる乙女に謝りやがれですッ！ この！ この！」

ベッドに横になっている先生に重なるようにして胸を揉み上げる

平塚……たぶん、これが二次元なら相当エロチックに見えるんだろうけど、いかんせんこの2人だ、全然エロくない。暴れる平塚が薄着なことや、先生が大きなお胸を揉まれてるくらい。

「な、やめるのだ平塚っ。そんなに、ちょ、そんなに強く揉むなあ！」

「ああ柔らかい！ 指が沈むほど柔らかい！」

こいつらじゃなかったら少々ヤバイ事態になったかもしれないが、しよせん平塚と刻无先生だな。見てくだらねえよ、豆柴がドーベルマンにじゃれてるようなものだもん。そりゃ萌えねえよな。

……ちなみに、今やっと俺が完全に立ち上がったところな。こりやそろそろヘルパーが必要かも知れん。

「よっこらせ……あー、眠てええ」

「あ、じゃあそろそろあたしも帰ります」

先ほどまで胸を揉みくちやにしていた平塚が、何食わぬ顔の俺のあとに続く。あと数人いればゲームのドラゴンクエスト——略称ドラクエのカクカク移動ができるのに。あまり友達がおらず、そんなキャラでもない俺には到底できないことであつた。

「さっさと帰れ。今日はもう疲れた」

鬼神の異名を持つ刻无先生がボッサボサの頭で少し呼吸を乱しながら言う。どんだけ平塚にやられてるだよ……もしや平塚の戦闘力は53万なのだろうか。なわけねえだろバカ。はっ、自分にバカって罵る俺ってほんとバカ……。

「……」

「今日は本当お邪魔しました。楽しかったですっ！」

「私も夕食の件は助かったぞ。気が向けばまた来るといい」

「はいっ！ 機会があれば是非是非です！」

笑顔の平塚が手を振り、刻无先生が微苦笑しつつ手を小さな動作で振り返す。

そんな仲の良さげな雰囲気から一足先に脱出した俺は、2階の自室へと向かいえっちらおっちら脚を動かすのでした。転移能力が欲しいです安西先生……。

ちなみに、私立黎明学園の事務室には安東先生あんどうがいる。これ豆知識な。

「セ、センパ〜イ。買った食材忘れてますようー！」

忘れたんじゃない、持つのがダルいだけだ。

食材が減り軽くなったビニール袋なら、平塚が持っても問題はなはず。よって平塚に運ばせることにした、それだけだ。

「じゃあ、2階まで頼むわ」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

いくら秋の手前と言えど夜の外は中々冷える。

現に俺は学生服の上に、ボロいタンスから引っ張り出してきたチエック柄の冬物パーカーを着ている。やっぱAmazonとかネッ

トは便利だなー、うん。だってコーディネート（笑）とか自分で悩まなくていいもん。

「寒いな」

「ですねえー」

刻无先生の部屋から俺の部屋へと舞台を移した結果、平塚が急遽、部屋の掃除を始め出したから厄介だったね。「んもう、センパイは」とか「エッチな本はないんですか……」とか、マジくだらないことを言いながら隅々まで綺麗に片付けやがったから半端ねえ。平塚の家事スキルはお嫁さんレベルに達していたというのが収穫だったな。

まあ、そんな平塚に無理を言って晩飯を作ってもらったわけだから、せめて見送りくらいならと妥協した俺は黎明学園の正門に、平塚といた。

平塚は愛用の自転車に乗り、いつでも出発進行できる体勢だ。つか露出している腕とか脚がかなり寒そうなんだけど……。

「ではセンパイ、また困ったときはいつでも呼んでくださいね。バイトしてるとき以外なら駆けつけますからっ」

「ああ」

「明日の朝は冷えるみたいなので、布団はしっかり掛けて寝てくださいねっ」

「ああ」

「遅刻はダメですよ？　なんなら、あたしがモーニングコールしましょうか!？」

「いやいい」

「わかりました！　でも生活はきちんとしないのですからね？　センパイはほんといい加減なんですからあゝ」

こいつ……もしかして、

「平塚」

「はいはい？　この平塚梨佳に何なりとお申し付けくださいです！」

「……帰らねえの？」

帰る気ないだろ！

ツツコミじゃなくて、ハテナをつけて疑問文ね。ここ重要。

「……この自転車、エンジンが温まるの遅いんですよねえー」

目頭いてえ。こういう女子なんなの？　「帰りたくない」とかなんの？　マジなんなの？　クソ迷惑で面倒臭いんだけど。

「早く帰れ。何だかんだで時間も遅いし、お前も明日学園だろ」

「はいっ。明日は体育があります。たぶんバスケですよバスケ！」

「ああそう」

俺に会話術というものがあれば、こんな面倒臭い事態に陥らなかつたんだろうけどと後悔した。

できることなら、俺の発言を撤回してやりたい。

「はー、やっぱ、めんどくせえな。お前」

「あ……」

これぞいわゆる後の祭り、ってやつな。面倒臭さメーターがピンチ。振り切れんばかりに振り切れんから振り切れんわ！ ……テンパってしまって意味不明だわ今の俺。

「す、すみませんっ。調子乗ってましたあたし。あの、何て言うか、センパイと会って話せるのが久しぶりで、嬉しくて、つい調子乗って……ごめんなさい……。ウザいですよね、こういう女って。あはは、あ！　そう言えば昔も言われてましたっけ♪」

「……」

「いやー昔から癖のあるキャラなんですよねあたしって。あはははは♪」

気まずいってレベルじゃねえぞこれ。どうすんだよこれ。どうやって収集つけんだよこれ。

平塚はまた、あの笑顔。悲しいけど空気が悪くならないよう無理して明るく笑ってますよーみたいな、平塚の下手くそな笑顔だ。

これは……さすがに言い過ぎた。面と向かって「めんどくせえな。お前」はねえよな。軽率だった。

「センパイ苛々してます、よね……？ あは、ははは……」

つか、平塚が泣きそう。目が潤んでる。声も震えてる。笑って取り繕おうとしているらしいけど、限界みたいだ。

ダメだろうと思った。さすがに、いくらなんでもこれはねえわ。やっぱバカだわ俺。……いや、馬鹿だ。

気の利いた台詞なんか浮かばないし、どうすればいいかわからないから、俺は全然使ってなくて錆び付いている思考回路を久しぶりに稼働させた――

「……あー、そうだな」

「で、ですよー！ じゃあ、か、帰りますね。今日はお邪魔しました！ お休みなさいっ」

「あー、ちょっと待て」

いやー。マジ呪うわ。こんな展開をしゃがって。バカの神様め。

「これ、着ていけよ」

「はい？」

「チャリ漕ぐと寒いし、仕方ねえから特別にこのパーカー貸すわ」

俺はパーカーを脱ぎ、平塚に細い体に羽織らせる。サイズが合っていないためか、パーカーに着られている感が凄くする。

呆氣に取られている平塚は、パーカーと俺を見比べながら、

「え？ ええっ!？」

「……たしかにお前めんどくせえけど、別に俺は嫌いじゃねえよ？ 平塚みたいなやつ。俺、お前がいて助かってるし。それじゃ」

言うだけ言った。慰めとかじゃなくて、本心をぶつけてやるのがポイントだと思うのですよ。

「有理センパイ……」

俺は平塚の反応を知りたくなくて、反転し、背中を向けて寮へと歩き出す。背中に痛いぐらいの視線を感じる。言うまでもなく平塚のものだろう。

「……くそっ、なんで俺がこんな目に……」

悪態をつきたいです安西先生……。なんか恥ずかしい気がするのは、気のせいだと思いたい。

これギャルゲー？ それともラノベ？ どちらにしろ、らしくないことを口にしてしまったようだ。黒歴史認定おめでとうございませう。

あかつき寮に向かいながら考える。

……平塚は、面倒臭い。胸がない。つかロリ。声がうるさい。料理ができる。かわいい。掃除もできる。バイトしてる。俺が嫌いなやつ。……これ全部ガチ。でも、最後のは嘘。嫌いじゃない。

残りのバッテリー残留が限りなく少ないであろう携帯電話を開き、新しくメールを作成する。つか眩しくて目が痛むわバカ。

今年に入って、初の送信メール。まさか、それを平塚梨佳に送るようになるとは、マジで驚愕だ。

「こんなもんか」

電話帳から平塚のアドレスを選び、要件だけを書いた簡単な絵文字顔文字オール0の寂しい寂しいメールを送信した。

メールを見たときの平塚の反応が目に見えるわ。確実に、これから携帯電話の着信音が鳴る日が続くんだろうなと考えると、少し憂鬱な気分になる。

「……電池切れ、か」

携帯電話がバッテリーを切れを知らせた。きっと『充電してくれえええ』とか叫んでるに違いない。マナーモードにしているからアラーム音は鳴らず、うるさくはないが、暗がり電池切れを表示するディスプレイがチカチカして目にかなりのダメージだ。

俺は携帯電話の電源を、電池切れで死ぬ前に自ら切った。さて、ケータイを復活させたとき一体何通のメールが着ていることやら。

ズボラな俺が屋上でサボタージュする話

屋上とは、本来なら立ち入り禁止の場所である。転落防止用にフェンスはあるものの、高校生なら簡単に越えれそうなフェンスだ。ないよりはあった方がいいだろう的な感覚で取り付けたに違いないだろう。そこんところの思惑と安全面はどうなんだろうかと問いたくなる。聞くのめんど臭いから聞かねえけど。

だが、そんな一般生徒立ち入り禁止の屋上に俺はいた。何の変哲もない普通の椅子6脚を、背凭れが外側になるよう2列に並べ、さらに体育倉庫から引っ張り出してきた掘り出し物——新品同様のマットを並べた椅子の上に置く。はい、これで簡易ベッドの完成。はい拍手パチパチパチ。そんなお手軽ベッドに仰向けで寝っ転びながら授業をサボタージュするのは至福の一時と言えよう。

あー至福の一時なう。他の生徒は今頃お勉強中なところ、なんだから独りですみませんねえ。

「へ」

噛んでいたキシリトールのガムをポケットティッシュに吐き捨てる。そして、簡易ベッドの横に予め置いておいた見た目がゴミ同然なゴミ箱に投げ捨てた。で俺の美声の源である喉が『水分……水分……』と渴きを訴えかけてきたので、またまた近くに設置しておいた机に手を伸ばし、飲みかけのペットボトルを掴んで戴く。ああ今日も爽健微茶が美味しいです。潤うわー。

体を動かすことなくこうまでダラダラできるとは、ゴミ箱から物置用の机、飲み物を用意していた自分の才能が恐ろしくなる。やっべえ俺マジ英知。

と、くだらないことは放っておくでしょう。別に俺ナルシストじ

やねえし。

伸びがしなくなつて上半身を起こす。上半身を左右に回すと、背骨と頸部からバキバキとかビキビキとかいう音が鳴った。これ勢いつけ過ぎるとたまに骨を痛めるんだよね……。

「……………」

ボーっと、いつもより回転の遅い思考のまま特に面白いわけでもない屋上からの風景を眺める。

5階建てのバカでかい校舎の屋上から見渡す風景というのは、俺が言くと説得力が半減するが素晴らしいものだ。それはこの学生島の特性がある。

学生島は名にある通りかなり大きな島だ。当然、周囲は海で囲まれている。その海と空の境界線がまたそえられるんだよねー。水色と青色のコントラストつつうの？ いやコントラストの意味知らんけど。と思わせて実は知ってるけど。

青や水色だけではなく、山の緑もそこに参加するとこれまた味が出る。そこで紅葉なんかが混じると「マジ自然サイコー」って気分になるのだ。これぞ、自然の調和が生み成す風景ってやつだろう。

学生島にあるのは山紫水明的な自然だけではなく、ちゃんと若者向きの施設なんかもある。観光や旅行に訪れた人を狙った旅行客用の宿泊施設もちゃんとするのです。かなり立派で豪勢で気前の良い美人のお姉さん方やイケメンのお兄さん方を集めた、最高峰のホテルとか旅館とか？ リア充どもはアトリウムのプールや花壇の並び癒し空間で戯れてるともっぱらの噂。

DQNやギャル向けのスポットも多いから、すっげえ目障り耳障りなことも多いけどな。ま、そんなのは街中にあるから、俺みたいな出不精の人間はあまり関係のない話ではある。

大体の娯楽施設は、様々な学園に通う学生たちの本拠地である学生寮が多く建つ学生島東区にある。幼稚園から大学院まで、学生メインな建物は東区に集中している、学生さん大集合な地区なのだ。

西区は主に港やら空港やらモノレールやら、この島に訪れた物好きを出迎えてさしあげる場所だ。ああ、ちなみに学生が島民のほとんどを占めるこの学生島では主な移動手段はモノレールや新幹線、自転車や徒歩だ。自動車とかバイクは全然使われていない。法律とか免許の問題があるんだろうと思う。

北区は山、海、川などの自然を存分に堪能する地区となっている。天体観測会場や動物盛りだくさんの牧場なんかもあるらしい。行く必要ないし人混み嫌いだからよく知らないけど。

南区はまだ発展途中。遊園地とか水族館、動物園みたいなカップルや家族連れどもがわんさか出てきそうな超危険区域。俺は絶対に近寄らないし、パンフレットも視界に入れないように徹してる。誰か俺の努力を認めてよ！ 認められても、それはそれでまた悲しいつつうか、なんか儂く感じるけれども。

あとこれはあくまで噂の範疇なのだが、どうも南区では宇宙関連の建物が建造予定らしい。ああスペースシャトル拝みてえ。別にマニアってわけでもないけど、なんとなく見たい。

そして、中央区。中央区はまあ大体わかるだろ。東西南北区に挙げられなかったものが集まった場所だ。病院とか郵便局とか、そんな感じのやつ。あとお偉い方が多い。

生徒会とか風紀委員会……こう聞くと「学校の委員会かよ（笑）」とか思ふかもしれないが、そいつはかなり大きな間違いだ。

この島は学生が主体の、学生によって成り立っている島だ。つまり学生を舐めちゃいかんぜよ、つつうわけだ。教職員も真っ青。

学生≧教師だからね。と言っても、なんだかんだでそれは委員会の上位に君臨する『超優等生』に限る話だが。俺を含めた大多数の学生はやっぱり先生方の毒牙にかかるのです。テストとかレポートとか。ほんとマジ厄介。留年とかガチでしたくねええ！

……学生島でエリートコースを卒業したやつは、やっぱり政治家を始めとした日本のトップで働くのだと理事長から聞いたことがある。やっぱデキる人間は違うっつうことだねー。別にこれイヤミで言ってるわけじゃねえよ？ 俺そんな嫌がられそうな人間じゃねえもん。たぶん。

そのとき、ポケットに入っていた携帯電話のバイブがヴヴヴと振動した。……ヴヴヴとバイブが振動したって、なんか『ヴヴヴ』っていう擬音語エロくね？

たぶん、このバイブはメールの着信を告げるものだろう。相手は、平塚梨佳という1つ下の後輩に違いない。違いない。

昨日の夜、色々あって仕方なく、本っ当に仕方なくだが、携帯電話によるメールや通話、学園内で話し掛けてもいいことを許可するメールを送ったのだ。ただし、きちんと遠慮はしろよというニュアンスを文章に含ませたから、大丈夫だろうと思う。無事に伝わっていれば、の話だけど。

受信した一件のメールを見るため、わざわざケータイ出して開かなければならない。面倒くせえな、と思ったけど実はあまり面倒でもなかったりする。

「バカじゃねえの」

メールの送り主はやっぱり平塚で、内容は昼休憩と一緒に昼食を採りませんかというものだった。他にも初メールにつき、色々と俺に対する想いだとか意気込みだとかパーカーは1週間後に返すだとか、めっちゃくちや書かれていたから苛ついた。なにこいつ。ハートの絵文字や照れてる顔文字使ってんじゃねえよ。あなたはギャルですか。違いますよね、たぶん。

「『やだ』つと……」

はいはい。お断りのメールを送ったよ。……でも、久しぶりのメールは、少し嬉しいつつうか、なんか高校生っぽくて新鮮だ。いかに俺が学園生活を謳歌できていないかわかる一言を呟いてしまった、失態だ。恥ずかしい。

どうせなら昼休みまで屋上でまったり過ごしたかったが、どうやら腹の虫が生意気にも合唱を始めるような兆候を感じ取ったので、戦略的帰還をすることにしよう。いざ行かん、オタクやリア充やギヤルやメルヘラや普通の生徒が蔓延る魔の空間まきようしつへ！

「ん……？」

今、一瞬だが視界で何かが動いたような気がしたが……勘違いだと気づく。原因は前髪が風で靡いたのだろう、こりゃうっかり。

……散髪とか面倒くさ。メガとかギガっていう面倒臭さじゃない、もはやテラのレベルだ。なんで髪の毛は伸びるのかなと思いました。そんなに張り切って伸びなくてもいいよ、と声を掛けてやろう。

髪切るのに手間が掛かるんでお願いですから伸びないでください頼みます。……これでOK。伸びたら慰謝料でも取ろうか。

「皆さんお気づきだろうか……教室に戻るのを、俺が躊躇っていることに」

……これが本当の独り言だ。胸に刻んでおけ。

ズボラな俺が戦々恐々する話

「は、綴有理？ そんなやついたっけ……？ お前知ってる？」

「知らね。あ、でもそれっぽいやつならいたよな」

4限目の授業が始まるまでの小休憩時間、伏せ寝をしていた俺は聴覚が無駄に頑張っているせいで聞こえていた雑音の中に信じられないワードが出、心臓が凍りつく思いをした。つか、じわじわと凍っている。現在進行形だ。

え、いや、なに？ なんで俺の名前がクラスメイトの会話で出てくんの？ ごめんマジ意味わからん。空気人間である俺がクラスメイトの会話で挙がることなど一切なかったし、これからも挙がるはずなどないと思っていたのに。なにがどうしてなんでなぜ？ ただいま絶賛困惑中。

「……」

普段は耳障りだなあとウザがっているクラスメイトの雑談に、一度興味を抱いてしまえば否応なしに耳を傾けてしまう俺。

「あー、そうなんですかあー……」

聞き耳を立てていると、聞き覚えのある声がした。できれば聞きたくない声。このとき既に、俺の心臓は冷凍みかんの如くカチンコチンになっていた。噛みついて前歯に染み、思わず呻くくらい凍っていた。

「ごめんねー。……つかさあマジ可愛くね？」

「……おう、半端ねえやべえな。ね、キミの名前なに？ 綴だっけ？ そいつ呼んであげるよ」

おいおいおい。ちよつと待て色々言わせろ。これはナンパに分類されるの？ それとも俺が女子と会話をする頻度が閏年並みに少ないから過剰なだけ？ つかさりげなく女子の名前を聞き出そうとしてるよね。なんか裏の声がちよくちよく聞こえてくるんだけど。

居ても立ってもいられなくなった俺は、伏せ寝モードから、スタミナを毎ターン10消費する行動モードへ移行する。10分の伏せ寝でスタミナ1回復だからこの代償は中々でかい。

「おお……始業のチャイムが鳴ってもいないのに有理が顔を上げるとは！」

隣の席に座っていた、イケメン耀太が、巷で「スマホ」や「スマフォ」などと略称されているスマートフォンとか言うやつをしまいながら爽やかにくだらないことをほざく。態度や顔面が爽やかなら、ワックスの香りまでもが爽やかだ。100人中92人がイケメンと答えるであろう芝田耀太は、重たい風邪を引いて苦しめばいいよ。

「無視、か。……って有理、どこか行くのか？ 授業始まるぜ？」

でもここはお前が出る幕じゃねえんだよ。悪いけど出番は昼飯までお預けだあゝばよとつつあん。待ていルパーン！ てアホか。そういうことをしてる場合じゃねえだろ！

血管がどっくんどっくん脈打つのを皮膚下で感じつつ席を立ち、問題の女子生徒1名と存分にチャラチャラしてる男子2名が話している廊下へ近づく。

「あくでももうチャイム鳴るしさあ、キミのメアド俺たちに教えてよ」

「そうそう。綴ってやつに俺たちが知らせといて、昼きゅーけー時間にも2人が集まる場所をメールでキミに教えてあげれるからね。ね？　これよくね？」

「えっと……あはは……」

明らかに困っている様子で苦笑いをしている女子生徒1名というのは、俺の予想通り平塚梨佳だった。

あと、平塚に言い寄ってる男子2名が物凄くウザったい。面倒なこと並べてメアド教えてろ、だなんてバカ丸出しだろこいつら。

そこへ、

「ちょ。2人でドア塞がないでよ通れないじゃん」

ビッチ臭が漂うギャル3名が追加。どうしてこうなった……。でもこいつらはすぐに離れるだろう。ギャル子どもが離れしだい、さりげなくさらに接近だ。

「有理、何してるんだ？　立ち上がったと思ったら動き止めて……まさか、有理を中心に時が止まったというのか!？」

早く離れろギャルめ。俺はギャルやチャラ男みたいな人種が一番嫌いだ。

ギャル子は化粧を塗りければしく、シャー芯が何本も乗りそうな付け睫をつける。スカートはパンツが見えそうなほど上げ、きつ

つい香りの香水を纏う。授業中だろうと休み中だろうと、俺お気に入りの保健室であろうと遠慮なしに駄弁りクソやかましい。

チャラ男はヘアワックスやらヘアアイロンで何十分もかけてセツトしたホストみたいな髪型をしきりに気にして手鏡でチェック。同じくパンツが見えそうなほど下にずらされたズボンを引き摺り、ピアスやらネックレスやらをチャラチャラ輝かせて、俺ってマジお洒落アピールしてる。

ガチ話、平塚や耀太の方が断然マシだから。つか、寧ろあいつらの方が気を遣わない分、楽でいい。

平塚、俺に気づけ。そしてさっさと自分の教室に戻れ。と言いたところだけど、背の低い平塚の前に男子2人が立ち塞がっているから、気づいてもらって平塚がハイ退散……というのは無理があるか。限りなく気が進まないけど、やはり俺が直々に動くしかなさそうだ。だっりー。

と思い、授業が始まる5分前からトイレに行つてこの的なオーラを漂わせ、ドア付近に歩き出したときだった。

突如として、ギャル軍団がチャラ男2人組に突っ掛かり始めた。

「……」

バカとかアホとかいう小学生でも言いそうな悪口の範疇を超えている。俺が口に出すのを躊躇うつつか顔をしかめるくらいの罵詈雑言の嵐。近くもなく遠くもない距離で聞いていて唯一まともだったのは「てかさ、この子ビビってるじゃん。やめたげなよ」という、後方からの至って常識的な発言だった。

……そう言えば、あのチャライ男2人とギャル軍団はめっちゃくちゃ仲が悪かったんだ。男女の関係って怖いと、改めて認識しました。ついでに、男女の関係がない俺は平和だなと安堵の溜め息を吐きま

した。これは割りとかちで。

それじゃあ、今のうちに平塚を逃がすでしょう。

教室には出入口が前と後ろの二ヶ所ある。口論になっているのは後ろ。俺は前から廊下に出て、平塚を追い返せばいいだろう。

俺は比較的速度やかに廊下へと移動した。と、言ってもやつぱりノロノロとした動作なのは、さすが俺だなあと称賛に値した。

「……………」

廊下に出ると、教室と廊下の狭間に平塚がいた。ついでにギャル軍団のしたっぱキャラみたいなのがギャル子も、なぜか知らないけどいた。

なんでギャル子と平塚が一緒にいるのかなー。なんで平塚は逃げてないのかなー。なんでギャル子は平塚に話し掛けてるのかなー。これじゃ話し掛けねえじゃねえか！理由はギャル子が近くにいるから！俺、嫌いな人に近づくと目眩や頭痛、吐き気などの症状が出る体質なんだよ。

「……あ、有理センパイ」

「ん？」

すっかり出鼻を挫かれた気分になっていたら、平塚が俺に気づいた。そしてすぐ傍にいたギャル子も、同時に俺という存在に気づきやがった。普段は空気と同様の扱いなのに……いや、俺と空気さんを同列にするなよ、空気さんに失礼だろ謝れよ！空気さんに。

「……」

ギャル子にめっちゃ見られてる……。こいつが何でここで出てくるの？　みたいな目でめっちゃガン見されてる……。ごめん、平塚は俺に用事があるんだと思います、よって俺が出陣せざるを得ないんです。

ガン見されてるのを持ち前のスルースキルでなんとか誤魔化し、平塚に『階段下に行くぞ』と顎で階段側をしゃくる。

俺のサインに気づいた平塚は、ギャル子から離れて先に階段のあ
る方へと足早に向かっていった。

「知り合いだったんだ？」

「……」

平塚より数秒遅めに移動し始めた俺に、ギャル子が声を掛ける。
え、これ俺に話し掛けてんだよね？　ああクソもう昔を思い出す。
話し掛けられてると思って応えたら、俺を挟んだ隣の人に話し掛けていたなんて、これ間違えたらかなり恥ずかしいんだからな！

「まあ、一応」

「ふーん。意外かも」

余計なお世話だ、と心の中で吐き捨て、俺は未だに口喧嘩を巻き起こしている我が教室をあとにした。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「じゃあ要するに、お前は俺に直談判しに3階の2年生フロアまでわざわざ来たっつうわけかよ」

「はいっ。だって、センパイにメールを送っても絶対に『やだ』って返ってくるの、わかりきってます」

Oh……聞いてくれよジョニー。この平塚梨佳っていう後輩、昼飯と一緒に食べたいから、それを直接俺に言うため、顔を出しづらいであろう上級生の教室までノコノコやってきたんだってよ。メールで断られるのがわかってただけに、行動に移したらしいよ。

「はあ、これは呆れるわ……。なんなの、お前」

「そう嫌な顔をしないでくださいようー。あたしだって、ほんとに緊張してたんですよ？ センパイの教室を刻无先生に聞いて、やっと着いたら……はあ」

そうだろうと思った。チャラ男2人に絡まれてたとき、平塚の笑顔が引き攣ってたからな。ま、あんな先輩に話し掛けられれば物怖じする子みたいになっても仕方ないだろうけど。

「俺はてっきり、昨日みたいなテンションで『センパああイ、一緒にご飯食べませんかーっ！』って言って突撃するのかと……」

だとしたらゾツとする。仮にハイテンションで突撃されてたら、これからの学園生活が苦痛倍増の日々に見事に変貌だ。理由は単純かつ明解で、平塚レベルの可愛い女子が知り合いにいる俺に、それを目の当たりにしたクラスのチャラ男どもが黙ってるはずがないからである。……悲しいことに、親しくない人に頼みごとされると、NOと言えない人なんです。めんどくても、「日直の仕事やっといて」って言われたら、「……うん」って答えてしまう人間なんだ俺。

内心ブルーになった俺の心理状態など平塚は知るはずなく、不思議そうな面持ちで俺を見ている。なんでそんな顔してんの？ と、逆に俺が不思議に思うわ。

「いやいや、そんな暴挙に出るわけないじゃないですか」

「マジか」

「だって、そういうの、いかにも有理センパイが嫌がりそんなことじゃないですかー」

「まあ、な」

「センパイって一匹狼？　みたいな感じですよんね」

「いや一匹狼とか知らねえよ。でもクラスで目立つような真似はしたくねえわ」

目立ちたいやつはメジャーなやつ同士で群がって目立ってればいい。俺は目立ちたくないから、マイナーでいい。

「マイナーなやつが出しゃばるもんじゃねえんだよ。つまり俺の中で、目立つ＝苦痛ね。覚えとけよ？　テスト出るから」

どんなテストだよ。……ははっ、有理さん自己ツツコミお疲れッス。

平塚は張っても変化の見られない貧相な胸を張り、誇らしげに言った。

「承知です！ センパイに嫌がらせなんて、あたし絶対にしませんから！ あ、でもでも掃除や料理はしますけど。えへ、これもセンパイへの愛情ゆえと思って諦めてうえっへへへ……」

最後のは余計だったが、それ以外は……まあ、好評価ではあるよな。悪くはないだろ。うん。

一瞬ペースを崩されそうになって若干テンパったが何のその。話題を変えて、というか本題に戻してやれば万事オーケーだ。

「それと昼飯だけだな、俺は友達と食べてんの。お前も友達と食べとけよ」

「センパイが……友、達と……？」

「なんだよ、その明日地球が滅びるのを知ったような顔つきは！」

失礼だろ。……あ、そうか、わかった、こいつ俺をバカにしてるな？ なんて失礼なやつなんだ。綴有理は誠に遺憾である。

「だっ、だって……センパイに友達がいたなんて初耳ですっ！」

「そんなこと一々言うわけねえだろ。お前はマジで何なんだよ……」
そこへ、4限目の授業の始まりを告げるチャイムが鳴り響いた。
それは同時に、このややこしい会話を強制終了してくれる、ありがたいものでもあった。

「あっ、もう戻らないと遅刻です遅刻っ！」

そんな余計な台詞を吐く時間があるなら、さっさと1年生の教室に戻れっという話。実にアホだ。ここは二次元じゃねえんだぞ。

「いいから早く帰れつつうの。昼飯はまた今度な」

「また今度」というのがいつになるのか、俺自身わからないけどね。

「はいっ、また今度、ぜつつたいですよ!!？」

力強く念を押して芝生を走り回る仔犬の如き勢いで階段を駆け降りていく平塚。その後ろ姿に、俺はいい加減な返答を洩らした。

「ああ、気が向けばな」

豆柴が尻尾を振りながら駆けていくシーンを想像していただいた。それを平塚梨佳に変換してみれば、それが今、俺が目にしていく光景と言えよう。

少し短めのスカートをヒラヒラさせ、夏用ブラウスに青色リボン結び、光の反射具合で茶色にも見える黒髪のショートカットを揺らしながら去っていく。……これでハイニーソックスならポイント高かったんだけどなあ。ほんと、中学のときと変わってない。

「……ま、変わらないってのも、それはそれでいいことなんだろうけど」

さて、チャイムも鳴ったし、そろそろ先生がやって来るだろう。俺も帰らなければ。

4限目を乗り切れば昼休憩。あと少しだ、頑張れ日本！ 踏ん張れ綴有理！

自らを激励した結果、3ミリほど気合いメーターが上昇した俺は、

ギヤルとチャラ男に絡まれませんようにと若干ビビりながら教室へとマイペースに戻った。

ズボラな俺がギャル子から手紙を渡される話

この世には少なからずボッチが存在する。ボッチになる理由は様々だろうが、俺はボッチはボッチでも2種類のボッチに分けられると考察している。

1つ目——ボッチを克服して、休日と一緒にボウリングやカラオケを楽しんだり、授業などで自然と班を組んだりする友達が欲しいと夢見ているポジティブ思考なボッチ。

2つ目——友達なんて要らないし平気だから、頼むから関わらないでくれと馴れ合いを嫌い孤独を自ら望む一匹狼気質のネガティブ思考のボッチ。

……だが、最近になって俺は新種かも知れない3種類目のボッチを発見した。

そう、この俺——綴有理という男子高校生だ。

俺は友達を作って友情を育みたいわけでも、孤独の中で卓逸した観察力を養いたいわけでもない。適当に過ごせて、無事に卒業できて、適当な感じに進学か就職できればいいのである。この学園に、というか、この島を訪れたのにも理由があるわけではなく単純に自分が産まれた故郷なだけだからだ。

凄く情性的なボッチ、それが第3のボッチだ！……あれ、これ別に新種ってわけでもねえな。やだ俺めちゃくちゃ恥ずかしい。

——1日の学園生活でテンションが上がる波があるとすれば、高い波になるのは間違いなく昼休みと放課後だ。今はその昼休みの時間、学園内は購買部や食堂に向かう生徒や弁当箱を持って親しい人と歩く生徒などで活気に満ちている。

空気に溶け込む能力を備えた俺にはどうでもいい話ではあるが、周りが異様に騒がしくなるのは少し許し難い。まあ、こんな雑音、学園で生活していれば自然と許容できる範囲内になるわけだが。で

も騒がしいものは騒がしい。黙れバカどもめ、口ン中にご飯が入ってるのに平然と豪快に笑ってんじゃねえよ、お下品だろ。

「つまりだ、板垣夏希に関する情報が一切手に入らなかったんだ。彼女に関する情報を意図的に隠蔽しているみたいに」

そう言って、俺の机の正面に椅子を引っ張ってきて座っている芝田耀太は蒸しパンを頬張った。台詞だけ聞くと超真面目な話とかわれそうだが、会話自体は至って普通。おぼはんが世間話する程度の明るさだ。

俺は「ふうん」と微妙な反応を返す。だって実際に微妙なんだから仕方ないよね。

「隠蔽って、誰が隠すんだよ。本人か？ それとも風紀や生徒会か？」

学生島の島民であり学生である以上、必ず個人情報というのは生徒会や風紀委員会、教職員などによって管理されているものだ。耀太が言うには、情報があるべきデータベースに板垣夏希の個人情報が入らなかったらしい。住所や年齢、学歴からスリーサイズまで。

「わかんねっす」

「何かしら隠す理由があるんじゃないの？ ンなこと知る由もねえけど」

「ミステリアスな板垣さんたらス・テ・キ♪ ってかー？ マジ俺得過ぎる。でも、収穫は一応あったんだぜ？」

「ハ。なんだよ」

あまり期待せずに聞くとしよう。はい、今日もカレーパンはとても美味しいです。安定の美味しさを褒め称えたい。

「鼻で笑われた、けど有理だからいいや。フッフそれはだなー」

こういう風に勿体振るやつなんなの？ 焦らしてるの？ 教えたいけど教えてあげないよ的な雰囲気醸し出してるともりなの？
どちらにしろ、こういうやつ超うぜえええ！

「カレーパソマソが不人気な理由がわからん。何がアソパソマソだよ」

自分の顔の一部をもぎ取って「食べろ」と渡すなんてキチガイの極みだろ。塩酸かけてやろうか畜生。

「ドライアイってこと」

はいはい、ドライアイドライアイ。あれ目薬ないとキツイよねー。エアコンの風がこっち来ると目の表面がマジでシパシパする。

エアコンと言えば、そろそろ寒さが増してくるだろうし、俺が持つ唯一無二の暖房器具であるこたつの準備しないとならん。

「わかったのはそれだけ。たまたま板垣さんが目薬差すところを見掛けたんだ」

「で？」

「んで、使ってた目薬がドライアイに効くって有名な目薬だったから……。あ、なんかスマソ。睨まんといってください」

この芝田耀太、様々な情報を取り扱う商売モドキをしているからと聞いて依頼したが、大したことなかった。情報網とか駆使してマジばねえ情報を教えてくれるのかと思ってたら、ドライアイときた。マジでドライアイ。半端ねえなドライアイ。

「もうどうでもいいから別にいいわ。耀太には手間を掛けさせたな、お詫びにコーヒー牛乳を買ってきてくれ」

「ひゃっはー！ 任せてよ愛しのMYハニー！ 紙コップと紙パックどっちがいいんだ？」

「紙パック」

瞬時に返答する俺。全てにツッコむと思うなよ、全てにツッコミを入れようとすれば、それはそれは疲れるんだからな。マジでめんど臭いよ。

紙コップの自販機は食堂ン中しかないんだよな。紙パックの自販機なら、大体1階にあるから、帰り際とか楽で助かるんだけど。

「40秒で支度しな！」

「いや誰に言ってるんだよ。お前が行くんだろ」

「それ、有理に言って欲しかったなと思って」

なんという爽やかさ。秋風はこいつを中心に渦巻いているに違いない。秋の醍醐味、紅葉も耀太を中心にしていくんだろうね。

「……40秒で支度しな」

耀太はパシられているのにも拘わらず満面の笑みで歩いていった。つか、耀太をパシりに使い過ぎな俺マジ面倒臭がり屋さん。

俺も某鬼神ほど性格がひねくれているわけではないので、耀太が楽しみに残しておいた焼きそばパンは食べないでおくことにした。代わりに何食べようかな……じゃあ、フレンチトーストでも戴こうか。

100円しか出費していない俺が、3個目のパンを食べ始めたとき、思わぬ人物が俺に近づいてきて、横に立ち止まった。

執拗に甘ったるい香水の匂いが俺を包み、カレーパンの余味を一瞬にして消滅させる。これぞ瞬殺。

「……なんだっけ、つづ、り？　だよね？」

そいつはスカートを平塚よりさらに上げた状態で黒ニーソを履き、素晴らしい絶対領域を我が物にしていた。視線を上になぞらしていくと、お次はベージュのカーディガンにブラウスという上半身が目に入るわけだが……うん、見事な実り具合だ。たわわに成長していますって感じ。肩にかかるくらいの髪は明るい茶色に染め上げられ、左側の髪をピンク色の花が2つちよこんと着いているヘアゴムでくくり、サイドポニーという髪型にしている。

はいはい可愛いよー。可愛いですからねー。頼むから話し掛けないで欲しかった。う……頭痛が。

「え、ちよ、無視!？」

声でけえ……。くっそ、どうして俺に！　話し掛けんなよビッチめ！　畜生、影でボッチを嘲笑ってるくせに！　……あ、話題にすら挙がらねえか。失礼しました。被害妄想が過ぎました。

「……なに」

「え、なんでいきなり怒ってんの？」

「怒ってねえよ」

「や、絶対怒ってるし」

「だから怒ってねえよ。……で、何の用だよ？」

これがギャル子ひとりで、したっぱキャラだから、まだ普通に喋れてる。いつもなら2〜4人で行動してるくせに、何でこいつはひとりなんだ？ あっ、もしかしてハブられてんの？ うわカワイソ！。

「あ、うん。えとさ、これ」

「は？」

手渡されたのは、ルーズリーフを折って折って折りまくられた小さな紙切れ一枚。どこからどう見ても、ラブレター系の代物には見えなかった。

「やっぱ、綾たち帰ってきちゃった？　じゃ待ってるから忘れずに来てよね！」

「……」

「待てよ」とは呼び止められなかった。

「なんで俺に話し掛けてきたの？」とか「この紙はなんなの？」とか「なんでそんなにおっぱい大きいの？」とか、聞きたいことが沢山あったけど、手紙みたいなものを渡したギャル子は自分の席だと思われる教壇近くの方へ小走りに行ってしまう、とても今から話し掛けにいける雰囲気ではなかった。

このルーズリーフの手紙（手紙と呼べるか微妙だが）を広げてみれば疑問の幾つかは解決するんだろうけど、ここは俺の推理を少しだけ披露してみよう。

……ふむ。推測では、人にあまり知られたくないことだろう。これは簡単で、普段集団行動をしているギャル子がわざわざ単独で俺に手紙を渡してきたこと。それにクラスの連中もかなり少ない。決定的なのが、先ほどの「やっぱ、綾たち帰ってきちゃった？」という台詞である。これは仲間知られたくないという風に聞いて取れるだろう。

現に、さっきのギャル子は既に軍団に加わっており手紙のことなど話題にしていらないように見える。よって悪戯や冷やかしの類いでもないようだな、ワトソン君よ。

名前すらうろ覚えなのにも拘わらず俺に接触してきた、というのも、俺が誠実そうで真面目に見えたからに違いないだろうね。

あと、「じゃ待ってるから忘れずに来てよね！」という台詞から推測するに、俺をギャル子が待つというそのままの意味で捉えて問題ないはずだ。……ん？　これって、もしかして。

告白　じゃ　ね？

いや嘘、さっきの嘘ね。さすがに告白はないわー。フラグ建てた覚えはない、それに告白なら、もっと、ほら、何て言うか、それっぽい雰囲気とかあってもよくね？　さっきの雰囲気は明らかにそれっぽくなかったよ。うん。

……あー、わかった。わかってしまった。
さっきのギャル子……4限目が始まる前に、平塚に話し掛けていたやつだ。

「マジかよ……」

……憂鬱だ。ははっ、マジ憂鬱だ。大事なことで2回言いました。

あのクソビッチ、俺をからかったり、バカにするつもりだ。平塚との関係を根掘り葉掘り聞き、挙げ句の果てに「生意気」(笑)「

「マジでキモい(笑)」「ボッチとか今どきダサくない?」(笑)「とか罵倒されるに違いねえ!

くそ、こういうときは、助けてドラえもんッ! 俺は心の中で助けを呼んだ。

——そのとき、開け放たれた窓から一陣の風が海の香りを乗せながら教室を吹き抜けた。俺は思わず目を細める。

午後の暖かな日射しが差し込む窓際の俺の席では、まるでその風を待ち望んでいたと言わんばかりに、パンの入っていた袋たちが一斉に舞い上がり、ひらりひらりと宙を踊った。

そして、パン屑が、机に落ちた。

「コーヒー牛乳——お待ちどお、だぜ」

国民的狸型ロボットのドラえもんじゃなくて、ひとりの人間が。イケてるくせに二次元に全力を注いでいる、芝田耀太が。

目の前に、コーヒー牛乳を持って立っていた。

あーごめん、つまらんよね、無駄にカッコつけたわ、これはガチですまんかった。

「有理お前どうかした？　すげー気分悪そうな顔だけど」

「別に」

コーヒー牛乳を受け取り、ストローを差し込んで早速ゴチになります。

「っはー。やっぱコーヒー牛乳うめえわ」

「だなー。給食に普通の牛乳じゃなくて、コーヒー牛乳を出せばいいのにと何度思ったことか」

耀太も俺と同じコーヒー牛乳を飲み、感想を呟く。それ、俺も思ってた。出身地が違っても、思うことは一緒か……。感慨深いものだよね。

「てか、給食じゃなくてバイキング形式にしたら最強じゃん？」

「最強って何がだよ。バイキングなんかしたら、金銭的にも、教育的にも問題あるだろ」

好き嫌いとか。栄養の偏りとか。

でも、最近では昔ほど厳しくないらしい。まあ色々な事情が複雑に絡み合ってるんだろうと推測する。

俺なんか小学校低学年の頃、給食を全部食べ切るまでずっと給食を食わされてたからね。他はとくに授業に入っても、俺ひとりポツーンと給食を広げてんの。先生はずっと睨んでるし、給食は完食できないしで泣きそうだったね。いやー今思い出しても泣きそうになるわ。ま、何だかんだで、その先生には感謝してるんだけど。

「まー、そんな話を今さらしたところで何がどうなるってわけでも

ないから、何でもいいっちゃあ何でもいいんだけどなー」

耀太は揚々と焼きそばパンにかぶり付き、咀嚼しつつほのぼのと言う。

「ところで、何？ その無駄に小さく折られた怪しげな紙は」

「あ？」

耀太に指摘され、そういやギャル子から何か渡されてたなと思いつく。いや別に忘れてたわけじゃない、ただ意識がコーヒー牛乳に集中していて、他のことに散漫になってしまっただけだ。決して数分前のことを忘れてたわけじゃないから誤解するなよ？

「あー、それは」

これは言っているのだろうか。いや、別に言うほどのものでもないな。

「何でもねえよ」

「おk。それじゃあ、今秋のアニメについて語ろうぞ」

べらべらと喋り始めた耀太は放置し、手紙を回収してポケットに突っ込んだ。内容はあとで見ればいいだろう。今は、暴走しかけの変態オタクを止めてやらねば。ああ！ 友情って素晴らしい！

「おい耀太。オタモードになる引き金を、自分で引いてたら元も子もねえだろ」

「フヒヒ……あ、ああ！ うん、そうだ、そうだったそうだった。かたじけのうござりまする」

「これで隠れオタを名乗ってるから片腹痛いわ。おい、そのムカつくイケメン、口調も直せよ」

「……あ、うむ、かたじけない」

もうお前のキャラがわかんねえよ、何が素の耀太なのか俺にはさっぱりだ！　これで私生活もこんなのだったらドン引きだぞ。

やっぱそこらの変態とは格が違うね。軽ーく常軌を逸してるね。つまり最上級の変態ってこと。一々言わせんな面倒臭い。

「んで、やっぱ貧乳には貧乳の魅力が、巨乳には巨乳の魅力がそれぞれあると思うんだ。一概にどの乳が至高、なんて言えねっす」

もうやだ……誰かこいつを止めてくれよ。

イケメンで勉強できてスポーツ万能でリア充オーラを嫌と言うほど振り撒いている人気者耀太が女子の胸があーだこーだ言っても、さほど女子にキモがられることはないだろうけどね。根暗で地味で不人気者な俺にとっては死活問題なんですわ。言動のひとつひとつがクラスメイトからキモがられないかどうか冷や冷やするんだよボケ。少しくらい声のボリュウムに気を遣ってもいいだろ。マジでリア充は爆発しろ畜生！

……いかなな、冷静さが取り柄の俺が冷静さに欠けてどうする。ダメだろ落ち着けひっひっふー。

「お前はもう少しTPOを考えろつつうの。好きなキャラ語るの自宅だけにしとけよ」

「好きなキャラなんて、両手で数え切れないほどいるから無理だぜ」
数が多いからって、それが無理という結論に繋がる意味がわからん。

あと頼むから俺に向けて微笑まないで欲しい。鳥肌立つだろ。

「中でも最近のイチオシは——ヤバい！　なんか、みなぎってきた
！！」

「お前はお願いだから周りの視線を気にしてくれ」

あ、いや待て。……そうか。耀太と必ずしも一緒にいなければなら
ないなんて必要性はないんだ。だったら俺がこの変態から離れられ
ばいいんじゃない？　これマジでナイスアイデア。

しかし、耀太の狂ってると思えない言行はまだまだ続くので
あった。

「ルイズ！　ルイズ！　ルイズ！　ルイズううううわあああああ
あああああああああああああああん！！！！

ああああああ……ああ……あっあっ！　あああああああ！！！！
ルイズルイズルイズうううわあああああ！！！！

ああクンカクンカ！　クンカクンカ！　スーハースーハー！　スー
ハースーハー！　いい匂いだなあ……くんくん。

んはあっ！　ルイズ・フランソワーズさんの桃色ブロンドの髪をク
ンカクンカしたいお！　クンカクンカ！　あああ！！！！

間違えた！　モフモフしたいお！　モフモフ！　モフモフ！　髪髪
モフモフ！　カリカリモフモフ……きゅんきゅんきゅい！！！！

小説12巻のルイズたんかわいかったよう！！　ああああ……あ
ああ……あっあああああ！！　ふあああああんっ！！！！

アニメ2期放送されて良かったねルイズたん！　あああああああ！

かわいい！ ルイズたん！ かわいい！ あっあああああ！
コミック2巻も発売されて嬉し……いやあああああ……！！
に
やあああああああん！！ ぎゃあああああああ！！
ぐああああああああ！！ コミックなんて現実じゃない！
……！！ あ……小説もアニメもよく考えたら……

ルイズちゃんは今現実じゃない？ にゃあああああああああ
ん！！ うあああああああああ！！

そんなあああああ！！ いやあああああああ！！
はああああああん！！ ハルケギニアあああ！！

この！ ちきしょー！ やめてやる！！ 現実なんかやめ……て……
……え！？ 見……てる？ 表紙絵のルイズちゃんが僕を見てる？

表紙絵のルイズちゃん僕を見てるぞ！ ルイズちゃんが僕を見
てるぞ！ 挿絵のルイズちゃんが僕を見てるぞ！！

アニメのルイズちゃんが僕に話しかけてるぞ！！！！ よかった……
世の中まだまだ捨てたモンじゃないんだねっ！

いやっほおおおおお！！！！ 僕にはルイズちゃんがいる！！
やったよケティ！！ ひとりでできるもん！！！！

あ、コミックのルイズちゃんああああああああああん！！
いやあああああああああああ！！！！

あっあんあっああんあアン様ああ！！ シ、シエスター！！ ア
ンリエッタああああああ！！ タバサああああ！！

ううっううう！！ 俺の想いよルイズへ届け！！ ハルケギニア
のルイズへ届け！！

じゃあな耀太。残り時間ひとりで狂ってろ。つかコピペまる覚え
って……溜め息すら出ねえよド変態。リサイクルショップにでも売
られとけ。

俺はコーヒー牛乳の紙パックをお供に、この変態とは関係ないで
すよーという空気を発しながら、そそくさと立ち去った。

ズボラな俺が体育館裏で告白される話

バスケット部やバレー部、体育の授業などで使われている、学生島でも有数の広さを誇る私立黎明学園の第1体育館。

時間は放課後。どこの部活もまだ始まっておらず、遠くから聞こえてくる生徒たちの騒ぎ声が僅かに聞き取れる程度だ。

そんな時刻の体育館裏。日陰となっている場所で、湿り気を帯びた雑草の上、厚い雲に覆われた曇天の下、俺はそいつと2人きり。

「——好き、だったの」

「……、は……？」

「てか、好きなの！ 2回も言わせないでよ！」

心の中の想い——好意を持っているということを告げる、その言葉。

まさか、まさかこんなダメ人間の筆頭である俺が女の子から告白されるとは夢にも思っていなかった。

胸元の大きく開いたブラウスにベージュ色のカーディガン、下着を見て欲しいのかと勘違いしそうになるほど上げられたスカート。可愛い部類に入る童顔気味の顔に、気合いを入れてセットしたとみられる茶色のサイドポニー。

……幾ら俺の嫌いな人種であるギャルからコクられたとしても、好意を真っ直ぐ伝えられて、普段誰かから「好き」だなんて言われ慣れていない俺の心が揺らがないはずがない。ただし平塚は例外とする。

俺は生唾を飲み込み、焦らすつもりは毛頭なかったのだが、そいつの俯いた赤い顔を見つめながら、ゆっくりと口を開いた——

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

時は数時間ほど遡り、昼休憩の終了間際。お供のコーヒ―牛乳を片手に、立ち入り禁止である屋上に俺はいた。つか屋上以外に居場所がないというね。図書館は飲食禁止だし。

椅子を並べた上にマットを敷いて作ったベッドに寝転び、秋の日射しを浴びている。暖かな日光と肌寒いくらいの風が何とも言えない気持ちよさを演出してくれている。くく……お主たちも悪よのう。屋上は俺だけの秘密の場所だ。雨が降らない限り、何時間でもこの場所にいれる。いやこれ本気話。

あー眠い、このまま寝てもいいよね。だって睡魔が囁きかけてくるんだもん。こりゃ耐えられねえよ。

たしか午後の授業は……物理だった？ 歴史っぽいけど地理だったっけ？ 国語だったような民俗学だったっけかな？ まあ、要するに覚えてない。出席点はたぶん大丈夫だろう。

いや、でもこれは確認しておいた方がよさそうだ。出席点が足りなくて留年とかマジ赤っ恥だからね？ 確認するくらいダルいわけでもない、念のため確認だけしておこう。

「……」

携帯電話をポケットから取り出し、予めケータイで写しておいた時限表を確認する。……芸術かよ。掠りすらしてねえじゃねえか。くそマジで面倒な授業がきやがった。芸術の授業はテーマに沿った何かしらの作品を作って期限内に提出しなければならぬ。つまり嫌でも授業に取り組まなければならぬわけだ。なんという面倒な授業なんだ……。

憂鬱な気分。そしてケータイをしまうとき、指先に何か紙類が触れた。

「あ？」

ポケットの底からサルベージしてやると、ルーズリーフを何回も折ったような物が……ああ！　そう言えばギャル子から手紙を受け取ったんだっただけか。

カサカサと広がっていく。すると、バランスの悪いギャル文字がちまちまっと書かれているだけだった。普通に口頭でよかったんじゃない？　と不思議に感じる文章の少なさ。何がしたいわけ？　俺、常識人だから非常識な人の心理がわからないわけよ。

書かれていたのは、『今日の放課後、第1体育館裏で待ってます』という、シンプルなもの。これだけなのにも拘わらず口に出すのではなく手紙を寄越してくるとは……マジで意味不。

「ま、なんとなく察しはつくんだけどな」

口頭でなく、やかましい友達のギャル軍団もクラスメイトもあまりいない状況で手紙。こりゃ、それなりにそれなりなことつつうわけですね、わかります。

唯一マジでわからんのはなぜ俺なのか、ということだ。ガチ告白か？　それともギャル軍団の罰ゲーム的な感じでドッキリか？　わかりませーん。

ま、放課後に本人に会って話を聞けばいいだろ。憶測でものを考えても無駄になるだけなので、この件は頭の片隅にでも追いやっておくでしょう。

おら、さっさと奥に行きやがれ！　ひ、ひえーお許しをー！　てアホか。とんだ茶番だよ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

本日最後の授業、数学。今日も近衛多恵先生は可愛いなあ！ 寮長が多恵ちゃん先生なら、きつと俺の人生は幾らかは変わってると思う。変わってるという保証はできないけど。

「……」

多恵先生の愛くるしいアニメ声をBGMに、最後の授業を乗り切ろう！

ほらあと10秒でチャイムが鳴るぞ。 9……8……7……6……5……4……3……2……1……よし。

キンコン以下略。

本日の授業が終了しました、ただちに授業をやめやがってください。いや、多恵ちゃん先生だから、やめてくださいね、にしておこう。心の中でしか言えないけど、これはチキンとかヘタレとかいう類いではないので注意するように。

「はい。で、では金曜日は……あ、明日ですね。明日は問題集を持ってきてくださいね？」

はぁーい！ とクラスメイトからの元気な返答に、多恵ちゃん先生はとても20歳代には見えない童顔をパァと綻ばせる。これが二次元なら、色とりどりの小さな花が舞ってるシーンだね。

「あつ、あと、今日配布した中間考査対策プリントは必ずやっておいてくださいね？ はい、で、では終わります」

純情だよなあ。なんか見てるこっちの方が『しっかりしなくちゃ

！』みたいな気分になるわ。これも多恵ちゃん先生の魅力のひとつなんかね。

授業が終わると学校全体が途端に賑やかになった。部活に行くやつ、一目散に帰るやつ、教室で駄弁るやつ、授業でわからなかった箇所を先生に聞きに行くやつ、唐突にお菓子を食べ始めるやつ。こういう光景を見ると、「何だかんだで青春を謳歌してるなあ」って感じる。もちろん俺のことじゃねえよ？ いやだって楽しそうじゃん。日陰者の俺から言わせてもらうと、キミたちのリアルは十二分に充実してるよ。

「じゃあ今日カラオケつく？」「俺バイトだわー」「ねーわー」「部活だし」「買いもん行こー」「腹減ったあ」「帰りZUTAYA寄ってかね？」などなど、放課後の学生らしい会話を耳にしながら、俺も帰宅する波に便乗して教室を出る。どうか多恵先生がDQNどもに性的嫌がらせを受けませんように、と願いながら。

「あっ……！！」

他人の心配をする余裕なんてなかった。俺は弾道ミサイルに追尾されてるんだっただ忘れてた。

そう、弾道ミサイルという名の平塚梨佳だ。なぜ弾道ミサイルだなんて比喻しているかというと、平塚の影響が俺以外にも始まったからだ。平塚というミサイル一発で、クラスのギャル軍団とチャラ男組合との抗争を勃発させたんだから、超厄介なやつだよ！

マジで俺ロックオンされてんの？ 誰か撃ち落としてくれと頼もうと思ったけど頼れる友達なんていなかったから悲しいです。

……くそ、クラスの何人かは俺と平塚が話していたのを目撃したっぽいような目つきで俺を見ていたから……。平塚は可愛いけど迷惑の塊だ、そんなのに迫られてはいるが、俺にとっちゃ迷惑なので俺はリア充なんかじゃねえ。だってこれっぽっちも充実してねえ

もん。

「セ、センパイ。よければ一緒に帰りませんか……？」

「無駄に頬を染めんな。あと距離が近い、離れろ」

階段で待ち受けていたのは黎明学園の弾道ミサイルこと、平塚梨佳だった。

誰かマジで撃ち落としてくれ……。つかイージス艦持つてこいよ。

「えゝ？ 放課後くらい別にいいじゃないですかあ」

「別にいくない」

「……わかりましたよう」

こいつはわかってない、人の耳と目の性能を。ふとした拍子に俺たちの姿が目に入ったり、会話が聞こえたりするんだから。それで「あの可愛い子と一緒にいる野郎は誰？」ってことになる。そして俺の平和な日常がベルリンの壁の如く崩壊するだろ。そんな事態を招くくらいなら、平塚を遠ざけた方が断然いい。

美少女の影響力は、いつどんな時代だって多大なものなのだから。キリッ。

「……」

「……」

「……おい」

「はい？」

「……なんで俺に着いて来てんだよ」

下駄箱まで来たところで嫌な予感がしたので振り返ると、やはりやつがいた。

ご主人のあとを一步遅れてついてくる生後4ヶ月の仔犬かよ。…
…あながち間違いつてわけでもねえな。

俺が当然のように文句を垂れると、平塚は生意気にも澄まし顔で言った。

「あたしはセンパイのあとなんて追ってませんよ？　あたしは昇降口を目指して歩いてるだけです」

センパイってー、かなり自意識過剰なんじゃないですか？　と聞こえたような気がしたが、それは幻聴だバカめ。俺はこんなやつに惑わされん、惑わされはせんよ！

なぜなら、ここは2年生用の昇降口なのです。よって、1年生の平塚がここにすることも先ほどの発言もおかしいのです。

「平塚？」

「なんです？　言っときますけど、あたし、そう簡単には尻尾を振りませんですよ」

振ってる！　振ってるから平塚さん！　俺から話し掛けられて、嬉しそうに振ってますよ！

そんな平塚に、容赦なく事実を告げた。

「1年生の昇降口、こっちじゃねえだろ」

「……あっ」

しまった！　みたいな顔しても手遅れだからね。やーい恥ずかしいやつめー。

「……」

「じゃあな」

「……はい、また明日です」

完全勝利。俺の敵じゃなかったな。最後の台詞が少し怖いけど。つか、かなり声音が怖かったけど！

あいつ、将来ヤンデレになるんじゃないかなあ。そう考えると冗談抜きで怖いんだけど。マジでサクッと刺されそう！

平塚に背を向け、平常心を取り戻した俺は、昇降口から外靴に履き替え、ぐらりと校舎に沿って外を周り、第1体育館の裏へ着く。校舎がでかいと移動する距離も比例して多くなるから面倒だよな。

「……」

っと、どうやらこの俺を呼び出した物好きは、先に来て待っていたらしい。ケータイを暇そうな顔でぴこぴこ弄っていた。

桃井結衣（いづみ）という、手紙を貰って初めて名前のわかったギャル子が、やって来た俺に気づく。桃井の足元にはうっすいスクバがあった。教科書とか持って帰らないタイプだな、こいつ。

「あ、綴くん？」

疑問系なのはなぜだろう、なーんて思わないよ。答えは知ってる、普段関わらないし興味もない同士だからだ。

「で、何の用だよ」

「うわ、それちょっとストレート過ぎない？」

直球以外に何を投げて欲しいんだよ。カーブか？ それともスライダーか？ ま、どっちも投げれないんですけどねー。練習したくても、中々必要なモノが揃わなくて……って何言わすんじゃないボケ。

「変化球でも投げろってかよ」

「や、別にそうゆうんじゃないんだけどさ」

「ああそう」

俺が言うのもナンだが、台詞の節々に嫌気を纏わせて話しているのにも拘わらず、桃井は嫌そうな顔をしなかった。それどころか、なぜか頼もしげな瞳で見ってくる。

「綴くんってさ」

「あ？」

「普通にあたしらとも喋れるんだね。ぶっちゃけ、こうやって喋るまでちゃんと会話できるか心配だったんだよねー」

失礼だな。幾ら俺でも会話くらいできるつつうの。と言っても、お前みたいなギャル相手だと、ギャルカーストの中でも下位のやつに限られるんだけどな。

ギャルカーストのトップに君臨する桐村綾とか、ああいうやつはマジで無理。目を見ることすら無理。裸でエベレスト登頂するくらい無理。

「いやいや話そうと思えば話せるからね？ 普段話そうとしないだけで」

ほんとだよ？ まあ確かに他の人間と比べてコミュ力は低いかもしれないが、ないわけじゃあない。人より多少、好き嫌いが激しいとか、積極性に劣るとか、そんな感じの可愛いレベルなんだよ俺って。

「そうだったんだ。それなら一応安心……かな？」

「なんでお前が安心するんだよ。あ、あと早く用件言ってくんね？ このあと用事あるんだけど」

用事Ⅱ帰宅だけど。

「あ、うん、えとね……」

俺が急かすと、桃井は顔を背けた。その頬は赤い。髪から覗いている耳はさらに赤い。こいつ反応わかりやす過ぎだろ！

……バカだなあこいつ。夕方と呼ぶにはまだまだで、辺り一面夕焼けで赤く染まってるわけでもないのに勝手に照れて赤面してる。ラノベなんかでよく見かける『女の子の顔が夕焼けのせいで赤く見えた』なんて表現が使えねえじゃねえかよ。これ、ガチ告白の可能性がじんわり滲み出てきた感じしね？

「えっとー、そのー……何と言いますか、ねえ？」

「ねえ？」と首を傾げられても困るんだけど！ なんなんこいつ。伝えたいことを俺に察しろってか？ 知り合って1日も経ってねえのにそれは無茶だろ。つか早く言えよダルいやつだな。しゃきしゃきと喋らんかいしゃきしゃきと！

『ウザってえなあ！ 早く言えよ！ 今さら純情振ってんじゃねえよ、知り合ったばかりの男と夜中まで遊んでそうな、このビッチ女め！ 俺はお前みたいなのとなんか話したくもねえんだよアホー！』……なんて、これだけズバズバ言えたらいいのになあ……。つたく、こりゃマジで面倒な事態だよほんと。

「呼び出したのには色々事情ってゆうか、……何て言うか、ちよつと頼み事があって……」

「ん。で？ 頼み事つつうのは？」

つか誰かこの空気換えてくんねーかな。あ、外だから風さんに頼めばいいか。おーい風さん、この空気をどこか遠い場所な吹き飛ばしてやってくれーってバカか俺はいい加減にやめろつつうの！俺マジで懲りてねえ！ これはもはや癖と言ってもいい。

でも居づらい雰囲気なのは本当なんです。

「すうー……はー……、すうー……はー……」

唐突に深呼吸を始めた桃井。大きな胸があると上下しているのがよくわかっていいですね。

と、ぼんやりとどうでもいいことを考えていると、桃井が意を決したような——例えばまるで女が男にプロポーズをするような——

凜とした表情で俺をキツと見つめてくる。決意の表れなのか、今までと違い張り詰めた雰囲気醸し出していた。空気や人の態度に過敏な俺には、その変化がすぐにわかった。

「……先に言っとくけど、聞いたあとバカにしないでよ？ 誰にも言わないでよ？ ……綾たちにも、言わないでよ……？」

マジか。これ、罰ゲームでクラスのボッチに話し掛けてみただけなのか。ノリじゃねえのか。

……本気、かよ。

「わかった。バカにしねえし誰にも言わねえよ」

「ありがと……」

桃井は何をカミングアウトしてくれるのか。その頼み事とは、一体何なのか。

「あたし……実は——」

願わくば、それが面倒事でありませんように。

それが本気でありませんように。

それがこれからの学生生活に悪影響を出しませんように。

ピピーーーーーッ！

突然、甲高いホイッスル音が体育館の内側から鳴り響く。

「——好き、だったの」

……………。

前半は、いつの間にか始まっていたバスケット部の練習音で掻き消さ

れ、聞き取れなかった。

「……、は……？」

だから、尋ねた。はっきりと返答するために。

「てか、好きなの！ 2回も言わせないでよ！」

マジ、か……。拍子抜けしたぞこれ。告白って、こんなものなのかー。

呼び出された瞬間から、実は少しだけ「告白されるかも」とは考えていた。でもそれは願望でなく、可能性だった。たぶんそうだった。

……俺はなんて答えればいいんだろうか。Yesと言えば、見た目はいいがギャルと付き合わなければならなくなる。Noと言えば、この瞬間から気ままずくなり、明日くらいからはギャル軍団から鋭利な刃物のような瞳でなぶられるに運命にあるんだろう。

……けど俺は――

「俺は、つき――」

「そ……それで、その、綴くんに手伝ってくれないかなーって」

「？」

ん？ んんっ？

「手伝ってくれないかなーって」だと？ なんでそんな台詞が今の場面で出てくるのか、ちょっと俺わかんない。うん、全然わからないんですけどー。

え、なに？ こいつ俺にコクったんじゃないの？ 俺はコクられ

て、あと答えるだけじゃ……。

「今まで生きてきた中でトップ3に入る混乱具合だぞこれ……」

いやこれガチで。凄い混乱してるから、今。

「なんで？」

桃井は目を合わせようとはせず、視線を俺の足元辺りに落としたまま尋ねる。

「お前コクったよな。で、手伝って言ったよな。この関連性がわかんねえ……」

「なっ、え、まあコクったって言うか……実は芝田くんが好きなんだよねーって言っただけ、かな」

「……」

——え。は。は？

「……………」

「ちょ、顔ヤバイよ？ だいじょぶ？」

あ、これってそういうオチか。そういうオチか！

あーはいはい。なるほどね！ わかった。漸く謎が解けましたよ。話は簡単だったのだ。このギャルは芝田耀太のことが好きで、耀太と仲のいい俺に目をつけ協力を申し込んだ、ただそれだけのことだったのである。誤算と言えば、バスケット部の練習で肝心な部分が聞

き取れなかったことだろう。

まっ、まあ？ 俺は最初からこういうことなんじゃないかなって
気づいてからねー。だってあり得ねえじゃん、俺に告白だなんて。

「……なるほど」

「でさ、綴くんて芝田くんと仲いいじゃん？」

「まあな。手伝ってほしいことつつつたら、大体わかる」

「マジ！？」

うんマジ。大マジだよ。

「好きな女子のタイプとかだろ？ あと、趣味とか好きなことや物。
それにメアドとか」

「おお、わかってるわかってる！ さっすが綴くん！ 伊達に一時
期『芝田耀太と綴なんとかはガチホモ！？』なんてヤバイ噂が流れ
ただけのことあるね！」

いつの時代の少女漫画かとツツコミたくなるくらい瞳をキラキラ
輝かせ、テンションを高めていく桃井。たがしかし、俺の瞳は限り
なく輝きを失っていた。それはもう、目の前を泳いでいたのがルア
ーだと気づいたけど時既に遅しで釣り上げられた魚のように。キャ
ッチアンドリリースを願うだけだね。マジ哀れ。

気持ち悪い噂なんて勘弁してくれよ……。

「なんだよそれ……」

初耳だぞ。つか『綴なんとか』って、俺どんだけ知名度低いんだよ。マジ泣きするぞ畜生。

「詳しくは知らないんだけどさ、いつも2人で行動してるじゃん？　それで、なんとなくそんな臭いがするって雪ちゃんが言ってたらしいんだ」

もしかして雪ちゃんさん腐女子なのかよ……。イメージと全然違うんだけど、なぜか納得できる。今思い直せば、雪ちゃんさんは耀太を見て照れていたのではなく、俺と耀太を見てアッチ系の妄想をして照れていたと言うのか。雪ちゃんさん恐るべし。

「……ここまできたら聞くけど」

「うん、いいよ」

「桐村綾に知らたくはないんだよね？」

すると桃井の顔が少し曇った。その変化から、睨んだ通り問題点はここだったかと悟る。

「うん、実は――」

桃井が晒してくれた話を要約するところだ。

桃井は外見からも口調からもわかる通りクラスのギャル軍団に所属している。だが同時に、他クラスにいる小学生のときから同じの幼馴染みグループとも付き合いがあるのだ。

ここからが厄介で、芝田耀太はイケメンで心遣いのできる人当た

りの大変よい人間で、さらに勉強もできてスポーツもできる万能人間と言える。ゆえに沢山の女子からモテる。四六時中モテている。ギャル軍団の桐村綾も幼馴染みグループの友人たちも、そして桃井結衣当人も、芝田耀太のことが好きなのだ。

桃井結衣は付き合いの長い幼馴染みグループから、芝田耀太のメルアドや好みのタイプが知りたいと言われ、尋ねる役を押し付けられたそう。で、ギャル軍団の団長である桐村綾も芝田耀太を好きでいる。桐村綾はライオンが威嚇するような感覚で、団員に『芝田耀太に手を出したら虐めてやるからな』という一種の牽制をしているそう。

そんな中での、幼馴染みグループから厄介事を押し付けられた桃井結衣は当然困り果てる。そりゃそうだ、ボスから『手を出すな』と牽制されているのにも拘わらず、耀太に必要以上に関わらなければならなくなってしまったのだから。

そして2つ気づいた、桃井結衣は貧乏くじを引き当てるのが得意なこと。俺が女子に産まれなくてよかったーと心の底から安堵していること。

女子界マジでシビア過ぎんだろ……。

「ど、どうかな……?」

おっと、ここにもチワワがいるようだ。目をうるうるさせて俺を上目遣いで見てくる。……可愛い。でもそれとこれとは話は別。

「色々理由はあるけど、厄介事に首を突っ込みたくないっつうのが一番でかい」

「あは。そっか……、そだよね」

「……」

くそ……泣きそうな顔しやがって。平塚のときもそうだったけど、泣くのを耐えているような表情には弱いんだよ。そういうの面倒で嫌いだから。

「別に教えてもいいけど。でも」

「ほんと！？　で、でもなに？」

「お前はそれでいいのかよ？　お前も耀太のこと好きなんだろう？　指くわえて我慢すんのかよ」

「……やー、なんてゆうかさ、あたしひとりじゃないんだよね。しようがないじゃん、芝田くん凄い人気だし。あたし取り柄ないし、影薄いしさ」

「お前は影薄いけど可愛い方だよ。なんて、面と向かって言えるかよ！」

……仕方ねえ。久しぶりに善意で行動するとしようか。桃井の顔を盗み見していると、そんな気持ちになってきた。

だから、不本意ながら協力することに決めた。

「手伝ってやってもいいけどな、1つ約束しろ」

「ん、約束する」

まだ言っただろ。こいつバカか。

「お前たちでトラブったとしても俺の名前は出さないこと。つかどんな場合でも俺が関わってるって口滑らすなよ？」

「わかった。がんばる！」

ま、さっさと耀太から聞くこと聞き出してこいつに教えれば終了だ。そんな手間のかかることでもねえしな。ボランティア精神ボランティア精神。

「綴くん、手伝ってくれてありがとう」

桃井が細々と言う。

手伝ったところで、お前の恋が実るわけじゃないのにな。損なやつめ。

「……猫被ってんじゃないよ。鳥肌立ったわ」

「ひどっ！？　ありがとって素直にお礼言っただけじゃん！」

「ギャルでスイーツでビッチのくせに……」

「失礼だよ！　それめっちゃあたしに失礼だよ！　もう怒った、くん付けするのやーめた。おまけに変なあだ名付けてやるもん」

「ふうん」

「何がいいかなー。つづりん？　ゆうりん？　つづっち？　……うわキモ」

「お前自分で言っただろ！　お前も失礼だよ！」

そのあと暫くあだ名を巡り口論おしゃべりした俺と桃井は、互いにメールアドレスを交換した。桃井はこのあと例の桐村たちと中央区までショッピングに行くそうなのでここでお別れだ。

俺は即行で寮に帰り深々と溜め息を吐いてからぐっすりと寝た。空腹を感じ目を覚ますと、ケータイに1通のメールが届いているではないか。

メールを読み、放課後の出来事がマジ話だったことを再確認した。俺は告白されたのだ、と。

……こうして何の因果か赤の他人に協力することになってしまった俺。迷惑極まりないったらありゃしねえよ。まだ秋だけど、はっきりと言える。

今年で一番ダルいこと間違いなし！　ってな。

ズボラな俺がやっぱり恋愛は面倒臭いとぼやく話

桃井に協力することを決めた翌日。

朝起きた瞬間から調子が悪かったので、学園に登園して朝一から保健室のお世話になっていた。やっぱり保健室のベッドはそんなじよ。これらの寝具とは格が違うね。なんかもうオーラから違う。『さあ来い。全て受け止めてやろう』みたいな雰囲気漂ってるもん。

俺の特等席である、5台並んでいるうちの一番奥に鎮座しているベッド。そんなベッドの中に重たい身体を沈めながら、俺は目を瞑ってダラダラしていた。寝るつもりはなく午後から授業に出ようと考へてる。中間考査も近いし、リア充たちが弾ける魔の1週間——黎明祭も近づいてきているからなー。黎明祭とは、学園祭と同じようなものだ。規模はかなり違うけど。

ベッドで横になっているのは単純に時間潰しだ。他のやつならグラリーとかモバゲーとか何らかのアプリを狂ったように見てるところだろう。そいつらはマジでヤバイ。何がヤバイって、学園内にいるうちはとにかくケータイ、スマフォ、ゲーム機、ケータイ、スマフォ、ゲーム機の繰り返しだからだ。授業中だろうと昼飯中だろうと空いている時間は常にそういうことをやっている。挙げ句の果てには課金ときた。

最近では、『モバ』『AKB』『ガチャ』『ポイント』『ウイイレ』などなど沢山の単語に嫌悪感を覚えるようになる始末だよ？これ逆に俺がヤバイだろうってなるわ。口を開けばあーだこーだとべらべら喋る。お前たちは少し節度を守れつつうの。中毒者かよ。

「起きてるかしら？」

仕切り用のカーテンの向こう側から、保健室の主にして俺の数少ない理解者——関根先生が声を掛ける。

関根先生が園内で一番声にフェロモンが出てると思うんだよな。色っぽくて艶かしい。一体何人の生徒を今までに悩ましてきたことか。

ここの学園は罪作りな先生が多い！　これ即ち結論である。

「ん、起きてますよ」

「少しラボの方に顔を出してくるから、留守番を頼める？」

「了解です」

関根先生が研究室に行くと、保健室は俺ひとりになるわけか。いや別にいかがわしいことなんて考えてないからね？　単純に事実確認なだけだからね。

関根先生はそれだけ言うとおつという間に保健室から姿を消した。準備できてたんかい。超どうでもいいわ。

まあいいや。昼休みまでゴロゴロして過ごそう。決めた、俺ベツドから絶対に降らない。

ふと携帯電話が視界に入る。メールが着ているのを知らせる明かりがチラチラ点滅してた。このチラチラが気になったのか、と腕を伸ばしてケータイを開きながら納得する。

「……」

桃井結衣からだった。

内容は、昼が近づいても登園してこない俺の体調と、昨日のお願いはやっぱり迷惑じゃないかな？　という顔文字を駆使した派手な

文面による心配だった。

なんで女子って『あたしわ』とか『いやいや』って文字を小さくすんの？ 胸糞悪いんだけど。これで男子も小さくしてるつつたら、もはや殺意を抱くレベルだ。……そんなにメールする相手いないから実際のところわかんないけど。

「……ふん、今さらだっつうの」

こさじ一杯分のイライラを呟き、保健室で寝てることと昼からは授業を受けることをメールに書く。昼の授業は数学と情報がある、これは受けておかねば中間考査に支障が出ると勝手に予測したからだ。

するとケータイが1通のメールを着信する。マナーモードで音は鳴らないようにしているので耳は大丈夫だが、まさかと思って、そのメールを開くと桃井からの返信だった。

『今からそっち行くね！』と書かれている。おいおい発育の順調なお嬢さん、今は授業中ですよ。

コンコン。

ドアが控えめにノックされ、「失礼します……」とまたまた控えめな声が聞こえてきた。

「マジで来たのかよ……」

驚いたっつうか呆れたっつうか、なんっつうか行動力のあるやつだな。

俺がカーテンを開くと桃井がドアの前に困ったような顔つきで立っていた。

「あ、そこにいたんだ。関根先生もないしツツチーも見えないし

さー」

俺を見つけると、表情を緩めたような桃井が近づきそんなことを言う。

「何で来たんだよ。つかツツチーて言うな」

『つづり』で『ツツチー』てか？ あだ名なんて中学生までじゃねえの？ 高校生だったらクールに名字か名前呼びじゃね？ 俺がおかしいってか。そうですかそうですか、すみませんねえ友達とそんなやり取り交わしたことないのでわからんのですよ。

桃井は俺がいるベッドの隣に置かれている、もう1台のベッドにポスンと腰を下ろした。これで俺たちはベッドを椅子に向かい合う形になる。……真正面に女子って、かなり居づらいんだけどね、気づいてる？ いや気づけよ。

「『つづりん』でもいいかなーって思ったけど、なんかツツチーってそんな顔じゃないよね。可愛くないってゆうか無愛想ってゆうか」

「意味わかんねえから。それより授業はいいのかよ」

たしか普通に授業中だったはずだ、しかも堅物な先生の物理の。よく抜け出して来れたなと思うわ。

ああ、女子必殺の『お腹がいたいので』や『おトイレに』を使ったのか。あれめちゃくちゃ便利な言葉だよな。先生絶対に拒まないもんな。あー男子にも生理あればい……いや、やっぱ前言撤回。くそ面倒臭いから要らねえわ。しかも辛そうだし。

俺の憶測が勝手に巡り巡っているところに、桃井がズバリと言っ

た。

「今日の物理自習だよ？」

マジかよ見当違いじゃねえか恥ずかしい。

「なんか下級生で一騒動あったらしいよ？　またアジられたらしい
って聞いたんだって」

「又聞きじゃねえか。つかンなこと気にしてる場合じゃねえだろ、
お前」

「う……」

上下関係に縛られるギャル軍団と付き合いの長さゆえに厄介事を
押し付けられる幼馴染みグループの板挟みになってるくせに。最悪
の結果、ガチで両方からハブられるかも知れんぞ。

「わかってるって。てか、それを聞きたくて来たって感じ？」

「はいはいわかったよ」

「うーわっ、超投げやりなんだけど！」

だって面倒くせえだろ。誰が好き好んでこんな役を引き受けるか
つつうの。

……そういや、こいつひとりだよな。

「……桐村たちと一緒に居なくていいのか？　てっきりお前が保健

室行くつつつたら『うちもうちも』ってなるかと思ってたんだけど」

「あー……微妙に当たりかも。『うちもうちも』ってゆうか、あたしを心配してくれて『付き添おうか?』っぽい風かな」

「ふうん。お前らって仲がいいから、また話が面倒だよなあ」

これがいいように扱き使われてるだけのパシリ役なら、俺も敵意を剥き出しにできるものの……やつらは仲間意識が強いからな。仲間意識つつうか、大勢で行動して都合のいい味方が欲しいだけでも言えるけど。それでもそれはやつらなりの友情であって、一方的に邪険にするのは少し違う感じがする。俺はそんな友情絶対にゴメンだけど。

「そかな？」

「そうだから、お前困ってんだろ」

「あそつか」

まあ仲が悪くても困る件なんですけどねー。

これは桐村軍団の耳に、桃井が芝田に手を出そうとしているって噂が入らなければいいだけの話。俺が桃井に情報を提供してやればその心配はない。……幼馴染みグループが余計なことをペチャクチャ喋らなければの話に限るけどな。俺的には、そこが一番の懸念ポイントだ。杞憂に終わることを願いたい。

俺もこの件からは早く足を洗いたいし、さっさと終わらせるとするか。

「じゃあ教えてやるからメモでも取れよ」

「上から目線が超ムカつくけど……お願いします」

いいねえその悔しそうな表情！ 下唇を噛むのか高評価でそそられるねえ！ ……冗談だつうの。俺にそんな趣味ねえし。

コホンッ。と、わざとらしく咳払いをしてから、ルーズリーフにシャーペンを装備し身を乗り出す真剣な顔の桃井を前に、俺は口を開いた。

「耀太の好きなタイプは、清纯そうで髪が黒くて長いやつ」

「うわ……あたしと共通点まるでないじゃん……」

「ああ、逆にお前たちみたいなギャルは嫌いだって言ってたっけな」

「あたしらが!？」

ははっ、ざまあああ！

でもこれ事実だし？ 嘘ついてないし？ 桃井に睨まれる理由ないよねー。

「ダメダメじゃん……」

「で、好きな食べ物は焼きそばパンやお好み焼き。たこ焼きも好き
つつつた」

「マジで!？ あたしお好み焼き得意だよ!」

「はいはい」

誰だって作れるだろ。俺だって作れる。たぶん。

つかテンション上げんなようるせえな。少しの動作で香水が漂ってきて、俺の繊細な鼻腔を刺激する。

「嫌いな食べ物知らん。たぶん嫌いな食べ物ないんじゃないか？」

「そっかー。確かにそんな顔してるよね」

どんな顔だよ！ いや、言いたいことはわかる。でも耀太の場合、それは上っ面の外見だけだ。これもカッコいい男の力なのか……なんか気分が滅入ってきたなんでだろう。

「でもツッチーは好き嫌い激しそうだよね。なんか全身が物語ってる感じ？」

うざ……ッ！ 的を射ているから余計にウザい。

好き嫌いなんて個性あってこそじゃん、別に好き嫌いあってもよくね！？

お前は俺を怒らせた。

「そんなこと言うやつには教えてやーらね」

「はあ！？ ちょ、そうゆうのマジでウザい！ ツッチー性格悪すぎ！」

「なっ、近づくなっ！ 顔が近い顔が！」

桃井は怒ったような泣きそうな、普段から友達に弄られてる感の満載な顔で俺を睨んでくる。不思議ー全然怖くないーやっぱり桃井

ってギャル力あんまりないからかなー。いっちょまえに香水は臭いけど。

「はあー」

溜め息を吐きたいのは俺の方だったの。

くそ、心臓がドクドクうるさい。俺の顔赤くなってねえだろうな？ 顔赤いとかマジダサイから。……急に近づくとか正気の沙汰じゃねえぞ。

「でだな、耀太の趣味は――」

あ、やべえ。ちょっと待って。趣味どうやって説明しよう……。

「趣味は？ 焦らしとかほんと要らないから、早く教えてよ。綾たち来ちゃうかもしれないじゃん」

……………。

「……パソコン、かな」

間違っていない。平日から祝日までパソコンの前に座ってるに違いない。間違ったこと言ってるねえ。

「ふむふむパソコンって。パソコンで何してるのか知ってる？」

「知らん」

「答えるの早っ！？ ほんと知ってr」

「知らん！」

「……ふーん？」

疑いの視線が俺を貫く。しかし、世の中には知らない方がロマンを壊さなくてすんだり、友達とは言え個人の趣味を他人に吹聴するのはNGだろう。

だって、ほら、耀太って二次元美少女オタクだし。そのこと隠してるし。それを俺が喋るってのも、なんかアレじゃね？

「まあいいけどさ。あ、じゃあプレゼントして喜びそうな物わk」

「わからん！」

「えー」

猜疑心の大盛なジト目で睨まれる。でも、俺知らない。耀太が新作エロゲーが欲しいなんて呟いてたの知らない。聞いたことない。覚えてない。そんな目で睨まれても知らないもんは知らないんだよ
おお！

「なんか隠してる感がバレバレなんだけど……」

「空気読めよ！ 触れたらイケナイ話題だって気づけよ！」

「え？ ええっ！？ なんかよくわかんないけど、ごめんツツチー」

おかしいな、今日は気分が、おかしいな。5、7、5だけど語呂が悪いな。これも俺の才能か。

「……これ耀太のメアド」

「おお……これが、芝田くんのメルアド」

桃井は何百万もする宝石を眺めるかのように、耀太のメアドを凝視する。そしてポソリと呟いた。

「今まで何人の女子が撃沈したことか……」

そりゃギャルが耀太にアタックしても無駄だろう。あいつ、ギャルのこと毛嫌いしてるからな。

エアガン持ってゴジラに突っ込むに等しいよ。熱線吐かれて一撃死だっつうのに……。合掌。

これだから恋愛って面倒臭いよね。するだけ疲れるだけだろ、恋なんて。

美人やイケメンをゲットして、友人に自慢したり、満足感を得たのか、イチチャラブして性欲を満たすだけだろうに。

嬉しそうな桃井をぼんやり見、苦笑いを浮かべているであろう俺は口の中でそう呟いた。

ズボラな俺が食糧調達のため外出する話

最近になってよく耳にするワードが『ゆとり教育』や『詰め込み教育』だ。

だが学生によって成り立っている学生島では、そんなワードは糞喰らえだ。

学生島のあらゆるものを統括し動かしているのが、学生島に存在している各学校や学園の生徒会から一定人数を収集して結成された『生徒会統括部』だ。強大な権力が備わっている、まさに学生島最強と言っているだろう。その『生徒会統括部』殿の手により、ちゃあーんと教育水準を管理徹底されているらしいので『ゆとり』でも『詰め込み』でもないそうだ。

他にも『生徒会統括部』などのような各学校と学園から集められてできた組織が数多く存在する。

幾つか紹介しよう。

学生島の治安維持を目的とし、独自の法令により取り締まる『風紀委員会』。これは各風紀委員会から優秀な人材によって構成されているエリート集団さんで端的に言えば警察の代わりみたいなものである。放課後や休日ですらに活動している働き者なのだ。風紀委員は身体はどこかに必ず『風紀』と書かれた風紀委員である赤色系統の証をつけている。それは人様々でワッペンだったりバッジだったり。これがまた見にくいから厄介なんだよな。気づいたら真後ろに風紀委員がいた、なんてこともザラにある。つか気づかない方が多いんじゃないかと思うけどな俺は。

お次は『開発研究部』で略称は『発研』はっけんだ。これは動植物を助けたり守るための薬から、技術の進歩を証明する機械やプログラムを作り上げる、非常に重要な集まりだ。俺なんかが覚えていられないほどの科学者や技術者が勢揃いし、日々試行錯誤を積み重ねている。マジでありがたい。そのうちガンダムとかドラえもんが本当に存在

するかもしれん。肌を若返させるサプリなんかもそう遠くない未来にはコンビニ辺りで販売していそう。

他にも『生徒会執行部』『リスクマネジメント委員会』などなど。放逸な生活を送っている俺が反省して正座したくなるほど、この島はやる気と誇りに満ち溢れている若者たちの手によって支えられているのだ。

このように書くとは仰々しく感じるが、これらはあくまで特殊なケースである。学生島の大半は普通の人間だ。運動のできるやつ、ちよつとできるやつ、苦手なやつ。勉強のできるやつ、ちよつとできるやつ、苦手なやつ。人付き合いのできるやつ、ちよつとできるやつ、苦手なやつ。

お店だってそうだ。全国チェーンのマックだってあるし、KFCだってある。コンビニだってそこら中に建っている。ただしそれだけだ。さすがに東京都なんかにあるようなバカでかかったり有名な物を並べているような店なんかは学生島には進出してきてない。でもそんな有名ブランドや企業がなくても、学生島にある巨大ショッピングモール辺りで十分だから、その辺は「流石は生徒会！ ニーズをわかってる！」と称賛するしかないところだ。

——で、だよ。

今日は土曜日。一部の学生と働いている成人を除いて、世の学生たちがゆつくりできる日だ。

ある者はバイトに勤しみ、またある者は部活動で汗を流す。またまたある者は1日中家の中で好き勝手にできる至福の日。そして俺も例外でなく、土曜日という今日を実に有意義に過ごしている。…：過ぎすはずだったのだが、いよいよ食料が尽きてヤバイ。餓死ヤバイ。栄養ヤバイ。あとコインランドリーにも行かなければならなあああ面倒臭すぎて死ねるあああ。

と、いうわけで大変に不本意ではあるが、今日はお買い物をする

ことを決心した俺なのであった。どうやら自分で名付けた『黎学の帰宅部エース』の力を発揮するときが来たようだ。まったく鍛えられていない我が脚を刮目せよ！

「めんどくせえええ……」

平塚をパシって食料を調達するのも考えたが、それはそれで面倒臭くなりそうをやめた。

耀太は論外。桃井から聞いて、あんな噂が流れていたと知った心理状態で耀太と会いたくない。会ったらたぶん嘔吐して倒れて救急車呼ばれる。

桃井も論外。ギャルだしスイーツだしビッチだし。あいつはあいつでやるのが山積みのような予感。そもそもパシれるほど俺と親しくない。

あれー。俺ひとりが動くしかなさそうぞー。

「……面倒くせえ……」

A m a z o m使うか……いや間に合わん。出前？ ピザ？ なんかやだ。

俺は黒のスラックスに若干の淡い模様の入った白いワイシャツにノロノロ〜と亀も指を差して笑う遅さで着替える。出掛ける準備からもうダルいよ……。バッチリ充電したケータイを持ち、スツカスカの長財布を持ち、これで準備完了。

問題はどこで大量の飲食糧を購入するかだよなー。金銭的に余裕はあるけど、できれば安く抑えたい。となると徒歩10分以上掛かるが安売りをしているスーパーか、例の巨大ショッピングモール。どっちも行きたくねえな。スーパーは遠い、ショッピングモールは規模さゆえに人が蟻のように蠢いているのだろう、容易に想像がつ

く。

現金も下ろす必要があるからATMのあって一番近いスーパーと言え、黎明学園の生徒が入寮している学生寮前スーパーか。でもそれだと休日だしバイトしてるやつとかいそうだな……そう考えると行く気力が削がれるわ。まあ、黎学の生徒がいたところで向こうがこっちを知ってるはずないんだけどな。

グダグタしてても埒が明かない。いい加減あかつき寮を出るとしよう。出たついでに、外で昼飯を食べるのもいいかもしれん。朝飯食べてないし、ちょっとガツガツ戴こうかな。俺ひとりボツチで。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

黎明学園の生徒御用達のスーパー。凄い普通。その出入口前。そこで意外な人物と鉢合わせになった。いや、なってしまった。

何ゆえ休日にまでこんな輩と顔を合わせなければならぬのか……俺は自分のタイミングの悪さに、永眠したいゲージが少し上昇したような気がした。

「ツツチー？ ああツツチーじゃん！」

「何で、お前が……」

茶色い髪のサイドポニーと全国的女子高生平均より大きな胸を揺らしながら、休日であるはずなのに制服姿の桃井が近づいてくる。

片手にはスーパーの袋が握られており、大量のスナック菓子とアイスクリームの姿が視認できる、が……多すぎだろ！ まさかひとりですべて全部食うのか？ ははっ、お友達と一緒に食べる用ですよ。ねー。わかります。

「いやだって一番近いし。誰だって家の目の前にスーパーあれば利用するでしょ」

確かに仰る通りなんだけど。なんかね、いや、ちょっとなんかイメージがね。

つか、桃井って成績よかったのか。黎明学園の学生寮って優等生しか入寮できないはずなんだけどな。……ああ、教師に媚びでも売ったか。もしくは——いや、やめとこ。自分のネガティブ思考に虫酸が走る。

「……お前もスーパーなんて使うんだな。俺はてっきりコンビニとショッピングモールしか使わない主義なのかと思ってたわ」

俺が驚いたニュアンスで言うと、桃井は顔を少ししかめた。整えられた眉がひそめられる。

「あのねー、あたしだって近場で済ませたいときくらいあるんですー」

「ふうん。驚いたけど違和感はあるまいのかな」

違和感の少なさ。その理由に気づく。桃井のメイクが普段学園で見るものより薄いのだ。普段つつつてもここ数日の話だけど。

……そのまま薄い化粧なら、悪くないのにな。メイクだけでこれだけ変わるとは、やはり詐偽だね詐偽。プリクラもメイクも全部詐偽決定。

「でツツチーも買い物？」

「そんなところ」

「どんなの買うの？」

えー、こいつデリカシーなさ過ぎじゃね？ 何を買おうが俺の自由だろ。何で買う物を一々言わなくちゃいけないんだよ。

「……食糧とか色々」

「へー！ ツツチーって自炊できんの？ え、なんてゆうか全然キヤラと違うくない！？」

あははははと高い声で笑う桃井。うぜえ……。俺の感覚器官が悲鳴を上げている。

「ほっとけよ。じゃあな」

「あっ、待ってって！ ごめん笑い過ぎた」

特定の音をシャットアウトする能力を身につけるにはどんな修行をすればいいんだろうな。10分ほど座禅でも組んでりゃ会得するんかね？

「……」

「無視とか感じ悪いよ？」

スーパーの中に入ると、なせか桃井も後ろからついて入ってきたではないか。マジやめろ。冗談抜きでついてくんな話し掛けんな関わんな頼むから。

「何でついて来るんだよ。お前もう買い物終わってるだろ？」

プラスチックでできた買い物籠を片手に俺が指摘する。「うーん？」と惚けたような声が後ろから聞こえてきた。首を回して背後を見ると、桃井が首を傾げて小さく唸っていた。

「芝田くんのコト、もちよつと知りたいなーって思ってたさ」

そんなの「本人からメールで聞けばいいんじゃない？」とツツコもうとして、思い出す。こいつは耀太に関わることを避けていたんだ。関われないから、俺に関わってきやがったんだった。

「ハ、生憎。今日は忙しいから無理」

「え！ まさかツツチーから『忙しい』とゆう言葉が出てくるなんて……」

こいつ俺の人間性把握するの早すぎだろ……。やめてくれよ、心に突き刺さるから。もしヒビ割れたら、俺の自慢にもならんガラスのハートを弁償できんのかよ。できるわけねえだろ。なんつったって非売品ですからね。ドヤッ。

「え、なんでドヤ顔してんのかわかんない。超キモいんだけど……」

「お前うるさいな」

「はあ？ 意味わかんないし」

桃井は少しの時間溜めを作ってから、

「……あたし買った物しまつてくる」

おお帰れ帰れ。菓子やアイス食って風呂入る前に体重とか体脂肪率でも気にして悩んでろアホビッチめ。

「すぐ戻ってくるから待ってて！」

言うが早いのか、桃井は駆けて行ってしまった。

それより「待ってて」ってどういうこと。

「……マジでなんなんだよあいつ。意味わかんねえ……」

ポカーンとするしかないじゃん。

「いいや。鯖缶買うか」

いつまでも桃井が去った方を向いているのも嫌だから、俺は食糧調達という本来の目的を果たすべく、缶詰めや消費期限の長いものを求めて動き始めた。

「……」

缶詰めが兵隊の如く陳列されている。こいつらは俺に買ってもらいたいのか、それとも買ってもらいたくないのか。どっちなんだろうな……なーんて、超くだらないことを頭の隅っこだけを使って考えつつ、目に入った缶詰めに籠に移動させていく。

コンビーフ、ツナ、鯖。あとフルーツ系と野菜系も欲しいからとりあえずじゃんじゃん籠に投げ入れていると、籠が缶詰めで覆われた。なんかギラギラしてるー気色悪いー。

電子レンジで温める白ごはん、またの名を白米、またまたの名を白飯——欠かせないそれらを缶詰め絨毯の上に置く。

やっすい缶ジュースも、手当たり次第に投げた。スーパーなどでジュースを買っていると、自販機で購入するのが馬鹿馬鹿しくなってくる。あれ、これなんか似てると思ったらラザニアじゃね？ ほんら銀色白色銀色みたいな。似てないですねどうもすみません。

重たくなってきた買い物籠が憎たらしく思えてきたため、さっさと買い物が終わらせることにした。このままだと腕がそして、支払いを済ますためレジで並んでいる途中で桃井と遭遇した。

「あ、ツッチー。もしかしてもう終わっちゃった？」

あ！ やせいの ももいゆいが とびだしてきた！

ピロローン♪ ももいゆい、ビッチポケモン、得意技は甘ったるい香水を振り撒き相手の鼻呼吸を使えなくさせる嗅覚ダメージと、大きな胸をばいんばいん揺らして釘付けにさせる視覚ダメージ。…こいつめ、破壊光線でも目から出してやろうか。ビガーッて出してやろうか。

「ツッチー、なんか失礼な目してない？」

わー、こいつエスパーかよ。決めた、こいつエスパータイプね。

あつ、やっぱ前言取り消し、こんなやつ虫タイプで十分だわ。

「ガン無視されたー……。まいつか」

虫タイプだけに無視ってか。ははっ、全然上手くねえよバァァアカ！

先ほどからの失礼な発言が桃井に届くはずもなく、当の本人は俺

の後ろに平然と並んでいた。それに虫タイプ云々は偶然の産物だね。

そこで、

「うわっ、なにそれっ」

籠の中身を見た桃井が「うげげ！」みたいな顔つきになって言う。悔しいけど中々のリアクション。点数にして30点以上40点未満と言ったところだ。

「わかってる。皆まで言うな」

「そ、そお？　ならいんだけどさ」

明らかに引き気味の顔をした桃井から視線を切り、レジのおぼさんが大量の缶類を、バーコードでぴっぴっぴっとしながら読み上げていくのを黙って眺める。

おぼさんは「こんな缶詰め買って……非常食用かしら？」みたいなことを内心で思ってるんじゃないかと思った。そんな顔をしている。でも、客が何買おうが勝手なわけだから。そんな変人を見るような眼差しを向けなくてほしいわけですよ、はい。マニアックなエロ本を買うわけでもなしに……ねえ？

俺はATMから引き出してきたばかりの獲れたてピチピチ1万円札を出す。

横にいる桃井が「うわ……」と呟きを洩らした。

ナイーブで少し傷ついた俺は支払いを終え、缶やパックがビニールを突き破らんばかりに入っているビニール袋を手を持つ。

そして、ここにはもう来ないことを誓い、スーパーを後にした。

「いっぱい買ったね。次どこ行くの？」

スーパーを出て、開口一番に桃井が信じられないことを言う。こいつはどこまで俺の動向を知りたいわけなん？ まさかこいつ白昼堂々とストーキングするつもりかよ。甚だ迷惑だわ。

「着いてくるのかよ」

「だからお菓子とアイス家にしまつて来たんじゃない」

あかつき寮がある黎明学園に向かう俺。変わらず背後にいる桃井。俺と桃井との距離が、2人の仲がよくないことをよく示してくれている。

「マジか……。いやね、今日は忙しいって言ってるわけだから」

「なんか見ててそんな感じはするけどさ。でも買い物しながらもお喋りできるじゃん？」

こいつうぜええ！ どんだけ耀太の話を聞きたいんだよ、いい加減うざったく感じる領域に足を踏み込んできたぞ。いや、ガチで目障り耳障り鼻障り。

協力してもらっている立場にしながら、協力している立場にいる俺の機嫌を気にしない辺り、桃井の凶太さがわかる。そんなのだからややこしい人間関係に陥るんだよ間抜けめ。

「いやいや、焦らなくても教えるからマジで。メールでも電話でもしてやるから今日は、な？」

とっとと消え失せろってな。

けどまあ俺は闊達で真摯で陽気なわけだから？ 桃井が厄介でウザくても約束は果たすわけだから？ そこんところは信用して欲しいなとか望んでたりする。

「あ、うん。そーなんだけどさ」

言葉を濁す桃井は心なしか元気がないように見えなくもない。

えー、これって「何かあったのか？」て聞くのか、「……」て無言でいてあげるのかよくわかんねえな。経験値が足りねえから、こういうときどんな顔をすればわからないの。……笑う場面じゃねえけどな。

仕方ねえなー。なんでこんなに世話を焼かせるのかなー。こういう人間って絶対に独りで生きていけないやつに違いないな。

「わかった」

「何が？」

「俺まだ昼飯を食べてないんだわ」

「ふんふんそれで？」

「で」

「んでんで？」

「用事が済んでからで昼飯食いながらでいいなら、話してやってもいいよ」

「マジ!?!」

合いの手要らねええ。てかテンションの浮き沈みが半端ねえ。潜水艦かよ。魚雷撃ち込まれたくないならまずは、そのよく動くお口をミッフィーするんだ。

「……用事が終わったら電話する。それまでは……そうだなー、東区の表通りで時間潰してろ」

「うん、りょーかい」

俺が歩き出しても桃井は着いてくる様子を見せなかった。どうやら、素直に言うことを聞いてくれたようだ。耀太関連強いな……。

決めた。俺、明日は1日中寝る。今日動いた分だけ寝てやる。課題なんて知るか。もうどうにでもなりやがれつつうの。

ズボラな俺が休日を返上する話？

再び俺ひとりとなった後は、あかつき寮に戻りクソスーパーで買った物を適当に放置し、続いていつも利用しているコインランドリーで制服や私服を洗濯をした。洗濯機さん乾燥機さん、いつもご苦労様です。

そして、俺は東第1学区（東西南北中央に分かれ、さらに幾つかの学区で分かれているうちの1つ）の表通り——東区の学生をターゲットにした洒落た店から子供向けの店まで並んでいる道をウォークマンで音楽を聴きながら歩いている。

若者が目立つこの通り。様々な人間から発せられる雑音も、ミュージックプレイヤーとイヤホンがあれば無敵だと思う。ちなみにヘッドフォンを所有しているがそれは部屋用である。

女の甲高い笑い声も、男の汚い罵り合いも、このウォークマン様にかかれば全てシャットアウトできるのでよ Watson 君。君も1つどうかね？　ってひとり芝居はマジでやめようねって固く決意したじゃん俺のうっかりさん。

先ほど桃井に電話したところ、そう遠くない駅前にいるとのことだった。で、なぜか俺が駅前に向かっていると。桃井が俺んところに来いよ。何様なんだよ桃様かよ……時代劇に居そうでイヤーな気分になるな。つか傍若無人に振る舞い過ぎだろ、俺に対して。

……そんなやつと関わることを自ら選択してしまった俺を、俺は祝う……！　間違えた、呪うだった。

駅前に到着したわけだが——なんだこの人の多さ。お祭りですか、それともイベントか何かですか。

駅前には円形の噴水があり噴水を囲うようにベンチが並んでいる

のだが、そのベンチは全て人間で座り尽くされていた。あれってカップルでしょー、あれもカップルなんでしょー、あっちもどうせカップルなんでしょー。なんだよ全部カップルじゃねえか。しかも嫌いな人種がたむろしてる。こりゃ魔王に挑む前の勇者の心境だね、親近感沸くわー。

「帰ろうかな……」

これが必殺の敵前逃亡である。

逃げ出して何が悪い？ 得手不得手、好き嫌い、色々あるわけで、義務ってわけでもないし別に逃げてもいいじゃん。

それ逃げるーつづり菌が感染^{うつ}るぞー、はいタッチー、バリアがあるから効きませんー、バリア貫通するもんねー、えーじゃあタッチ返しだしー、うわきったねー、……まあつまりトラウマである。無邪気というのも場合によっちゃあ残酷だよね。orz.

「や！ 小学生に捕まったバツタみたいな顔してどしたのタッチー」

その後、脚をもぎ取られて遊ばれるんですね、わかりたくありません。

俺が顔を上げると、俺にトドメを刺さんばかりの声を掛けた張本人、桃井結衣がいつもと変わらずあどけない顔で目の前に立っていた。校則違反をばりばりしてるその茶色のサイドポニーを引っ張ってやろうか畜生！ お花のヘアゴム伸ばしてやろうか畜生！ ちくしょー……。

噴水前に蔓延っているやつと桃井はたぶん同種だから平気なのだろうが、俺から言わせてもらおうと敵地にも等しいから。武者震いという名の拒絶反応とか凄いから。ばねえっす。

「これから昼ご飯食べに行くんでしょ？」

言わずもがなだ。そのために今、わざわざこんな人^{ひと}気の多い場所に来ている。お前のせいだな。

「ああ」

ほんと腹減った。もう午後のおやつタイムが爪先を見せてるくらいの時間なのにも拘わらず、朝から何も口にしていなため胃液が気持ち悪い。ぎゅるんぎゅるん鳴ってる。俺の内臓は中でドリフトでもしてんのかよ。

「あたしもパフェ食いたいからさ、カフェか喫茶店行かない？ あとファミレスとか」

「……別にいいけど」

吉野さん家かすきさん家のどちらかに行こうとしてたんだけど……とはもう言える雰囲気ではなかった。

別にカフェも喫茶店も嫌いつてわけじゃないけど、ファミレスにいる客が嫌い。てことは俺ファミレスとか嫌いなんじゃない。

店内で大騒ぎする低能どもはみんな追い出されてしまえばいい。つつつても、大概の客は常識のある客なんだろうけど。笑い声マジで自重してくれよ。

「それじゃ行こっか」

俺は「お前場所わかんのか？」と聞こうとして、すんでのところでその愚問を喉奥に飲み込んだ。

さすがにこの質問はねえわー。と、自分でも引くくらいなんだから、桃井はきつとガチでドン引きするに決まってる。その光景が脳裏に余裕で浮かんだ。

今どきファミレスや喫茶店の場所を知らないやつなんて、俺か俺に似た出不精のやつぐらいだろうからなあ。あまり広いわけではない学生島なら、なおさらである。

そして移動し始める俺たち。端から見たら、俺たちって彼氏彼女に見えるのだろうか……。そこまで考えた時点で目眩がしてきたので、俺は思考のブレーキを全力で踏んだ。

なんか話でもして気を紛らわせるか。桃井と？ 桃井しかないじゃん。

「つか、なんでそんなに必死なんだよ。また何か頼まれたのか？」

前を歩く桃井の背にそう投げ掛けると、桃井は少し間を置いてから答えた。

「ツッチーからもらった芝田くんのメルアド渡したらさ、めっちゃ喜ばれたんだよね」

ああ、幼馴染みグループの話か。でも俺がした質問の答えにはなっていないような気がする。

「何も頼まれてはないんだけど、なんかモチベーション下がっちゃって」

そりゃそうだ。メアド聞いたり好きな女子のタイプ聞いたり、幾ら耀太を知ったところで桃井自身は耀太に近づけない。耀太から桃井に——なんてことはあり得ないだろうから、ぶっちゃけると接点

はいつまでも作れない。今さらそのことに気づいたのかよ、けど残念無念、もう遅いよ、これが俺の所感だ。

「あーあ、いつになったら芝田くんと喋れるのかなあ」

いるよねー、独り言なのか問い掛けているのか暈して言うやつ。構って欲しいんかい。でもまあ応えるんだけどね。

「さあな。でもまあ気楽にしてた方がいいんじゃないかねえの？」

「だよねー。気楽に生活できたら、ほんと楽なんだろうなあ」

ほんと、損なやつだ。

これシリアス認定しても悪くはなさそうだけど、なんか凄く空気が普通。世間話レベルなんだけど。

俺的には、どよんってしたりとか、ジメジメ〜とした重苦しい空気になって居た堪れなくなるかとげんなりしていたのに。その挙げ句、桃井が泣いちゃった、とか。

ちよつと見てみたいかもと期待している自分が気持ち悪いっつうか、趣味悪いなど、俺は一文字に結んだ唇を歪め自嘲する。

「モチベーション下がったっつう割には意外とお前元気なのな」

「元氣ってゆうか、別に芝田くん見てるだけでなんかもうカッコいいし、全然話し掛けれないわけじゃないし」

「話し掛けれるのかよ!」

あれ、前に話し掛けたら殺されるって言わなかったっけか？　これ俺の記憶違いか？　そうなのか？

「ちょっとだけならセーフなんじゃない？」

「マジすか」

「うん——、着いたよ！」

そう言って、桃井は俺を振り返った。そんな『ちゃんと案内できたよ』みたいな笑顔されても、どう返せばいいかわからないから困る。

「やっぱお前は笑顔の方が似合ってた可愛いよ」なんて異臭がする台詞が頭に浮かんだ俺は一旦冬眠するべきだと提案する。あー受理されたら冬眠できんのかなあ……？

「ふうん……？ 『喫茶サンライト』か」

ネーミングセンスが良いのか悪いのか、主観じゃこれっぽっちもわからん。第3者の意見で「なるほどな……」と、わかることが多いため、恐らく俺にネーミングセンスなど欠片もないのだろう。

この名前いいなーと惚れかけていたら、クラスのメジャー男女にこぞって「ださい」「キモい」「古い」などと批判され、少しへこんだこともある。学園祭のスローガンとか……。

「サンライトって『陽射し』で意味だったっけか？」

「たぶん？ ここ結構メニュー多いし、店の人も可愛いし渋いしでお気に入りのお店なんだよね」

「へえ。お前のことだからスタバ辺りにでも連れて行かれるのかと思っただわ」

「最初は行こうと思ってたんだけどさあ、ツッチーと2人きりだから……ねえ？」

「いやいや首を傾げられてもね。……俺とだから、こんな店に連れてきたわけか……」

「ただ俺といるところ見られたくないんだよ。」

「まー、そりゃそうなるわな。誰だって、男女2人だけでうろちよろしてる光景を目にしたらカップルに見えるもん。俺だってそう見える。」

「けどもう少しオブラートに包んで遠回しにそういう発言をして欲しかったなーというのが本音だ。ちよつとグサツてきたよー。」

「んーでもさ、ツッチー元の顔は悪くはないよ？ うん悪くはない」

「はいはいどうもありがとうございましたっ」

「ええー、なんで急にキレてんのかちよつとわかんないよ。……せつかくちよつぱり誉めたげたのにさ」

「桃井に着いていくがままに案内されたのは、『喫茶サンライト』という個人経営だと思われる小さめの喫茶店だった。人の通りが激しい表通りから少し奥に入ったところにある、影の薄い場所。でも陽当たりは良さそうで色鮮やかな花々が植えられたプランターが置かれていた。」

「ああこれ好きな人は好きそうな店だなあ。静かな雰囲気と飾り気のないシンプルな造りで、割りと俺も好きな趣旨の店かもしれん。」

「何としてんの？ 早く入ろ？」

ちっぽけなバッグを手に桃井が俺を促す。

俺は「ああ」と返し、店のドアを開けて待っていてくれる桃井に
少しでも感謝してから、焦げ茶色をした木の床を踏み締めた。

ズボラな俺が休日を返上する話？

「いらっしやいませー」

それは、聞き覚えありまくりの幼さの残る声色で、俺たちの前に現れた店員を思わずハッとして数秒間見つめてしまった。きっと店員は営業スマイルを浮かべながらも内心で「なにこいつ気持ち悪いんですけどお」とバイ菌を見るような感覚でいるんだろう。だがしかしその店員からはそんな邪悪な気配は感じ取れなかった。寧ろ歓迎してくれてるのかなとさえ思える雰囲気醸し出している。

「やはー。暇だったから来ちゃったよ」

「あれ？ 桃センパイじゃないですかー！ こんにちはー」

背が低く、桃井よりもさらに童顔で中学生と言っても十二分に通用する風貌。黒い髪の毛は肩辺りで切られ清潔感のある髪型にされている。白と黒を基調にデザインされた喫茶サンライトの制服＋エプロン姿は、幼く見える年齢に意外とマッチングしていた。少なくとも俺には可愛く見えた。

そして何を隠そう、この胸部の凹凸のなさ。制服にエプロンでもわかる凹凸のなさ。逆に存在感を漂わせている。あれ？ 俺何言ってるんだろ？ ただ1つ言えるのは、この店員——平塚梨佳はツルペタってこと。

これ、声掛けるべきだよなー。先手必勝ってよく聞くもんなー。って、俺は誰に勝つつもりなんだよ。なんてツツコミをする度に俺は残念な子なのかもしれないと危惧する。

俺は桃井という盾から半歩だけ横に移動して、

「よ、よう」

「——え？」

俺を見て目を驚きに開いている平塚に、ぎこちない笑顔で声を掛ける。おお驚いてる驚いてる。俺は異星人か何かってかよ。

平塚は予期せぬ俺の登場に驚いた顔から、次第に晴れ晴れとした顔に変わっていき、そしていつの間にか俺の目と鼻の先にいた。

「ち、近いって」

やべ、これ照れるわ。尋常じゃなく照れるわ。この香りはシャンブーなんだろうか、どこかの誰かさんみたいに香水振り撒いてなくていい香りだ。と言うのも平塚の顔がかなり近いから気になるわけ。俺を見上げる瞳は少し潤んでいた。

「……明日、地球は滅びてしまうんですか！？ だから神様は最後にあたしと有理センパイを……つまり運命！」

……つかお前ここでもあまり変化がないんですね。相変わらずおかしい発言といい、自然体過ぎるだろ。

俺が喫茶店に顔を出すのがそんなに信じられねえのかよ。いや俺も信じたくないけど。まあ、ここなら別に平気かなと少し考え始めてたくらいで……。

「でも一時の恋愛じゃなくて、センパイとは生涯の恋愛がしたかったです……グズン」

「だいじょぶだよ梨佳ちゃん！ 地球が滅びるのはもう少し先？
ってどっかに書いてあったから！」

「もう少し経つと地球滅んじゃうのかよ。つか信憑性なさ過ぎだろ
ソース出せ」

俺の呟きに、聞こえていたらしい桃井は「なんでこの場面でソース出すの？」と眉を寄せて不思議がっていた。そっちのソースじゃねえよ、情報源的な意味のソースだよ。

「ほ、ほんとですか！？ 桃センパイは物知りなんですなーっ」

「お前はガチで信じちゃうのかよ。つか、お前らいつの間に仲良しになったんだよ」

この前の昼休憩のときだろうか……？ それくらいしか心当たりがない。それ以前から知り合いだったようには見えなかったしな。
うん謎。

「えとですねー……もう忘れました！ それより、まさかここでこんな時間に有理センパイに会えるなんてうえひひひジュル」

「え？ ちよもしかして梨佳ちゃんの言ってた『有理センパイ』ってツツチーのことだったの！？ うわマジ！？」

頭いってえ。誰かこいつらを止めてくれ！ これは止めたやつにカフェオレなら奢ってもいいレベル。これじゃあ先月くらいに偶然寄ったファミレスのときの二の舞じゃねえか！ いやごめん嘘だけど。ただ『二の舞』を使ってみたかっただけだ。そもそも、ファミレスなんて行こうと思わない。

俺の心境なんて今はどうでもいい、お前ら頼むから喚かないでください。他に数名いるお客さんに迷惑だし、一緒にいる俺もDQN扱いになるかもしれん。そんなのは御免被る。

俺が目眩と頭痛に悩んでいると、カウンターの向こうにいる店長らしきおじさんが「むおっほい！」みたいな『さて、突然の再会に驚喜するのもそこまでにして、そろそろお静かに』という意味が込められていそうな咳払いをした。おい睨まれてんぞ！ 早く接客するんだ平塚！ お前バイトだろ？ つかお前ここでバイトしてたのかよ。

しかし、俺が心配するほど平塚もまるっきりのバカではなかったようだ。店長さんの咳払いに気づき、いち早く行動に移した。

「……あつ。えと、2名様ですねー」

「うん。できれば奥の席お願いできるかな？」

「はい。ではこちらへどうぞー」

先ほどのバカ騒ぎはコントだったの？ そう拍子抜けするほど静かになった平塚と桃井。……なんだよ、こいつら意外に常識つつうかマトモな反応できるんじゃないか。俺はてっきり、注意されても直さない直す気がないイカれた連中の一端かと思ってた。これは真面目にごめん。

平塚に席まで案内（と言っても、実際はたかが十数歩程度の移動だけ）をしてもらいながら、俺は少しだけだが反省する。

そして案内され、カウンター席とテーブル席あるうちの、奥まったテーブル席に座る俺と桃井。平塚はメニュー表やら水やら御紋り

やらを並べ終えると、

「決まったらお呼びください。ごゆっくりどうぞですー」

そうにつこり笑みを浮かべて言ってからカウンターの方へ引っ込んでいった。それから一連の動作を見ているうちに、平塚は意外とホールの仕事に慣れているように見える。さすがに狙ったようなドジっ娘属性はなかったわけだ。

「ふーん。ツツチーがああ『有理センパイ』だったんだー」

桃井がメニューを見、黒目を忙しそうに動かしながら意味深に言う。

「あの”ってなんだよ。何を言われたのか知らねえけど、どうせ平塚の妄言だろうから本気で受け取んなよ？」

「んー」

口開けるのが面倒臭いつてか。それとも俺に応えるのが面倒臭いつてか。どちらにしろ、なんてやつだ桃井結衣め！　なんなら、俺もなんかあだ名つけて呼んでやろうかっての。

それから一通りメニューに目を通したらしい桃井が「決めた！」と言ひ、俺にメニュー表が渡される。渡されるまでの間、俺はひたすら黙座していた。あんまり客いないんだし、平塚も気を利かしてメニュー表をもう1つ置いてくれたっていいじゃん、そう思った。まあそれはもういいや。俺は……そうだな、何にしようか。って、待て。

「……」

「なんでそんなにメニュー睨んでんの？ マジで不審者っぽいからやめてくれない？」

「いやどこから見ても不審者じゃねえから」

たぶんだけど。

ああ、目の方か。そうかそうか、自分の目なんて見えないからわかんねえよ。俺悄気でもいい？

あるよねー。言ってから自分が見当違いなことを言ってたのに気づくこと。でもそれは仕方ない、だって人間なんだもの。

「……この喫茶店は、随分オリジナリティに溢れてるんだなあと思つて」

「ああ、そゆことね。別にいいじゃん。食べたら意外と美味しいんだよ？」

食ったのか……この文面だけ見ても吐き気を催すパフェやサンドイッチやドリンクの数々を。

「桃井。お前、微妙に行動力あるよな」

「そうかな？ あっ、てかもしかして今あたし褒められた……？」

褒めてる。褒めてるよ。無謀とも呼べるその行動力を評価してる。俺には真似できねえよ。

メニューの至るところで見掛ける異常なモノを一言で述べると、何でもかんでも混ぜりゃイイってわけじゃねえぞ！ って感じ。

「あ、あはは。なんか意外かも」

「あ？」

「や、ツッチーが人を褒めるなんて予想外だったってゆうかさ」

普段からどんだけ俺は皮肉屋さんに見られてるんだよ。皮肉の特売なんかしてねえぞ。それに、誰でも彼でも手当たり次第に皮肉つてるわけじゃない。ただ俺の気に入らないやつを皮肉ってるだけだ。主に自分の心の中で。

「別に」

「……じゃあ、その話題はとりま置いといて。何にするか注文決まった？」

「決まった」

「うん、それじゃ梨佳ちゃん呼ぶね」

それから桃井が平塚を呼び各自で注文する。

昼過ぎだというのに客の流れはなく、注文したものが運ばれてくる頃には、店内にいるのは俺たち2人だけになっていた。

俺の勝手な憶測だが、恐らく大体の客は表通りに建つオープンカフェなどに向かっているのだろう。こんなロクに宣伝もしていないような穴場的喫茶店を訪れるのは、ここが気に入った人たちだけに違いない。

俺は少し遅めの昼食を、桃井は白やらピンクやら緑やらの色をし

たクリームで彩られた多彩なパフェをそれぞれ食べ始める。

驚いたのは、桃井がパフェを食べ始めるときに、小さな声だけで「いただきます」と言ったこと。あれおかしいなー、ギャルって礼儀正しかったっけ？ 俺なんか、最後に「いただきます」と言ったのがいつかまるで思い出せないくらいなのに。見掛けによらないとはまさにこのことだ。

食事中はグイグイこない程度に桃井が耀太のことを聞いてきて、それに俺が素っ気なく応える。その繰り返しだった。つまり年頃の男女みたいなの「なあなあ、今好きな人いるん？」「なぜ俺に聞いたし。お前はいるのかよ？」的な恋話を咲かせることもない。実に俺たちの関係を表している。協力者と被協力者——それが俺たちだ。こんな関係、面倒極まりない。さっさと諦めるか、見てるだけにするか決めろろつつうの。

そして昼食終了。

これでやっとこさ質問責めから開放されるわけだ。

ったく。なんで俺が野郎の趣向を口に出さないといけないんだつつうの！ 教えてて気分悪くなるわ！

俺はテーブルの上にある綺麗に空となった容器を見て、

「……よく全部食べたな。それ腹壊さね？」

と、形式だけで微塵足りとも真心の込めていない心配をする。

桃井はにこにこ顔、満足そうに言った。

「食べ過ぎた感するけど、だいじょぶ。んー抹茶クリーム美味しかったなあ」

女子って昼飯の弁当箱はアホかと思うほど小さいくせに、こういうスイーツは軽く平らげられるわけね。いわゆる『別腹』ってやつ？

「まあ、普通に旨かった」

ここの『オリジナルカツサンド』は堪らなく美味しいということが判明した。あと、コーヒーのくどくない苦味とほどよい酸味の良さに感銘した。これはもうお気に入り決定。これなら外出するのも苦にならないくらいだ。いやガチで。

「また来ようかな……」

マジで来よう。今度は当店オリジナルの『ミックスサンド』というサンドイッチを戴きたい。

休日のほとんどをゴロゴロとベッドの上で過ごしている俺でも、そりゃ腹は減るし飲み物も欲しくなるわけで、たぶん次に来たときに味わうであろう美味しさを今考えてしまい、にやにや顔になっていただろう俺に桃井が狙ってんのかクソビッチと罵りたくなる台詞を吐いた。

「え、ツッチーもこれから通っちゃう感じ？ あ、じゃあそしたら偶然にもあたしら出会ったりするかもしれないね！」

いやもうなんか知らないけど台無し。

「お前それフラ……く」

「フラ？」

「何でもねえよ」

フラグか？ おのれはフラグを立てたいんか？

俺は思わずツツコミかけた。こいつマジで狙って言ったんだとしたら、本気でフラグ建築士さんに謝って来るべき。

フラグ建築士1級を所有する者に限り、物語の主人公になれるらしい。ハーレムモノだと、要必須って求人票に書いてあった。つまり俺には到底なることのできない職業ってこと。俺が哀想になるからそんなコト言わないでよ！ 事実確認みたいに言われなくても重々わかってるつつうのバーカ俺泣いていい！？

「……まあどうでもいいよそんなこと」

「？ ならいいけどさ」

「……」

「……」

それから会話が途切れ、無言になる俺たち。どこことなく視線を泳がせ居づらそうにそわそわする桃井を視界の片隅に見ながら、俺は携帯電話を開く。時刻は既に15時を過ぎ16時を迎えようとしていた。

苦手なタイプの女子を目の前に、ざっと1時間以上も話していたのか……元々トークの上手くない俺にしては頑張った方だな。それに耀太のことも知っている限りの情報を提供した。あと提供するとしたら日頃の愚痴しかねえよ。うん、つまり俺の役目は終わったつつうこと。これから先、桃井はひとりで変わらずギャルグループと幼馴染みグループとの板挟みの中を巧みに生き抜いてもらうしかない。……シビアだなあ。

俺は席を立ち、椅子に座ったままの桃井を見下ろしながら言った。

「……手伝いは大体これくらいだろ？」

「へあ？」

対して、桃井は俺を見上げながら素っ頓狂な声をあげる。振りが突然だった感はあるけどその反応はさすがにねえわ。メニュー表眺めつつ内心で「気まずっ」とか思ってたところ先制され怯んだんですね、わかります。

「耀太のことだよ」

「あ、ああ！ うん……」

ちょっとちよつと、なんで萎れた向日葵みたいな感じになってんの？ 今めっちゃ居心地悪いんだけど俺。

「これ以上はもう知らねえし、あれだけ教えりゃ十分だろ？」

「そうだけど……」

何か言いたげな表情をした桃井が俺を見つめる。見つめられたところで、俺に何をしてもらいたいのか何を言って欲しいのか、わからないわかるはずがない。

こいつやっぱ苦手。もしくは単純に、俺のコミュニケーション能力が低いという事実なのか。だとしたらいい具合にコミュ力の無さが顕著になってる。ニューボッチは伊達じゃねえ！

話が続きそうなので再度腰を下ろし、お行儀悪いかなと気にしながらも、片肘をテーブルに置き頬杖をつく。そして桃井を直視……

できないため、下にずらすと……目に毒なため、仕方なくテーブルに視線を落とすことで落ち着いた。

「まだ性懲りもなく夢気分を味わいたいってか？」

「夢気分？」

「夢気分だろ。アタックできない状況で好きな男の話を聞いて、勝手に満足感に浸る。でアタックできない現実を再認識して、勝手に落ち込む。何だかんだでその繰り返しだろ？」

「う……」

今の桃井はループってやつに嵌まってる。しかし俺のネタは尽きた、たぶん桃井も尋ねることがもう見つからないはずだ。というわけで、ここでループも終わり。

保健室での雑談もメールや電話のやり取りも今こうしている時間も、きっかけはどうであれ桃井に幻想を聞かせるだけに終わるんだなと思うと、少し引っ掛かる箇所があるわけで。

ここは、嫌われてもこれ以上友好度の下がりようのないこの俺が幻想を碎いてやるべきなのかもしれん。

「まあ……そうかもしれない。でもさ？」

「でも、なんだよ？」

「うう……なんかツツチー怖いよ？」

「忠告だつつの。ありがたく拝聴しとけ」

関係を築けないことを理解しているくせに、未練がましく知りたがる。『もしかしたら』『運が良ければ』なんて可能性に夢見て今日も今日とて、俺の話を聞いてあり得ない恋愛思考に浸る……いつか溺れるぞ。溺れた結果はどうなるんだろうなあ。思い余って行動力の高さから告白か、それとも頭の痛い子ちゃんになってしまうのか。ま、苦手なやつ末路なんてどうでもいい話ではあるけど。

「可能性に夢見んな。お前の立場じゃ無理だっつう話だよ」

「……」

何も言わない、ということは無言の肯定と受け止めていいだろう。それに桃井本人も最初からわかってはいたのだろう。きっと『可能性』なんていう厄介なワードに取り憑かれていただけだ。

「それにリスクもある。ガチでハブられるかもしれないって、お前もわかってんだろ？」

曇っていく桃井を見ながらも、なお続ける。

でも恋愛沙汰がイジメに発展する率は高い……らしいよ。聞いた話っつうか、聞こえてきた話では。

クラスでイジメとか、マジで面倒臭いに決まってるから。どうせ臨時のLHRとかなって、多恵先生が困るに違いない。多恵ちゃん先生を困らせるなんて俺が許さないゾ☆ いやマジでごめん調子乗った。

「つまり俺の言いたいことはだな、揉め事になりたくないんだっただら耀太は諦めた方がいいんじゃないかね？ という話だ。OK？」

「お、おーけい」

コクンと首を縦に振る桃井。

「……」

「……」

気まずい。トイレで仲の良くないクラスメイトと鉢合わせしたときよりも気まずい。ばねえ気まずい。

経験値の少なさゆえ、こんな場面でどうすればいいのかわかんねえ。おい誰かマニュアル持って来いよ！

すると桃井が、すくつと立ち上がり「たはは」と笑ってから、

「あーうん、そだね。そうゆうのはマジでアレだし。ちょっと頭冷やして考えてみる」

バッグを持ち、レジへと歩いていく。

出遅れた俺は、先にいく桃井のあとを追いつけた。

桃井は俺が注文したサンドイッチとコーヒーの昼食代を支払うと申し出たが、それは断った。なんか桃井に奢られるのって癪に障るんだよね。何となくで特に明白な理由はないんだけど。

その後、桃井は御手洗いに寄ってから喫茶店を出るとのこと、はい解散！ となったわけだが――

「なんで着いて来んだよ」

「それ、違うし。ツツチーのあと着けてるわけじゃなし。てかその考え方キモいんだけど」

この会話だけで、文字数にしてたった数十文字を見た時点で大方察しがつくだろう。

「お前、次の道どっちに曲がんの？」

「あたしは……右、かな」

「俺は直進する。それじゃあな」

ちなみにこのまま真っ直ぐ直進すると学園へと道のりが短くて済む。直進という選択肢を除いて質問した俺は割りと策士。

桃井を追い越し、数歩進んだときだった――

「あの、さ」

不意に背後から声を掛けられた。たぶん、呼び止められたのは俺なのだろう。

右向けー右の要領で身体を90度動かし、横目で桃井を見る。回れー右をしなかったのは、なんとなく真正面を向くのに躊躇いがあったからだ。

「なんだよ」

「もう手伝ってくれないんだよね？」

「ああ」

「そっ………か」

「……」

「……」

夕方が近づき少し冷たくなった風が俺を撫でて体温を下げていく。
……早く言えよ。寒がり暑がりの俺には酷だぞ。

桃井は躊躇する素振りを見せてから、不安げな声色で尋ねた。

「……もし芝田くんを諦め切れなかったときには、ツッチー……あたしが手伝ってって言ったら、また手伝ってくれる？」

そんな問いか。そんなのわざわざ呼び止めて聞くまでもないだろうに。

面倒事、厄介事、グダグダやドロドロ、ましてやギャルでスイーッでビッチの恋愛相談なんて、

「あーそれ無理。めんどくせえから」

受けるわけねえだろ。

他人に干渉されるのも嫌いだが、他人に自ら干渉していった挙げ句、泥沼に嵌まりましたなんて洒落になんねえよ。ガチ笑えない。

「ええーっ！？ そこって普通は、仕方ないなあ的な感じで手伝ってくれるんじゃないの！？ マジあり得ない！ てかツッチー冷た過ぎノリ悪過ぎ！」

怒涛の口撃である。

例えるならターン制のバトルにも拘わらず、自分の順番をスキッ

プされて攻撃されているような状況だ。ずっと桃井結衣のターンってか？ 冗談じゃねえ！

「……これだから、俺はギャルが……」

俺は目頭を押さえ、重い重い溜め息を吐く。たぶん今この瞬間、俺は1ヶ月ほどの溜め息を消費したに違いない。半端ねえ。

これが人生ゲームなら、迷わずリセットしているところである。しかしここは現実で、キノコを食べても残機は増えたりしないし、超便利なポケットがあるわけでもない。しかし！ 敢えて言おう！

「もうゴールしていい？」

「ゴール？ ツッチーってサッカーでもしてんの？」

「……頭いてえ」

9月下旬。

我が敵、リア充どもの祭典である学園祭の準備すら始まっているのに、既に俺の繊細な心は砕け散る寸前なのであった。

ズボラな俺が例の美少女と遭遇してしまう話

友達の少ない俺が、今日は比較的多く友達と出会った日だった。

桃井結衣と平塚梨佳。

たった2人で多いのかよとリア充なら嘲笑うのかもしれないが、俺から言わせてもらおうと、それはちゃんちゃら可笑しい。

一緒にいて気を遣わなければならないような友達として、居づら
いと思ったことはないか？ 友達を前にして自分の素で話せない振
る舞えないトークを展開できないような、遠慮をしたことはないか
？ あれが好きでこれが嫌い、それが苦手でどれが得意かと本音を
言い合えない仲で、わだかま蟠りを感じたことはないか？ まあ多少のこと
は大目に見るとしても、明らかにムカつくやつ、気に入らないやつ、
負の感情を抱いてしまうようなやつらと一緒にいて、面倒臭いと思
ったことはないか？

そんなやつ、友達じゃねえだろ。仮初めの、名ばかりの友人関係
だ。表面上の笑顔を見せてりゃ仲の良いお友達だってか？ ンなの
面倒臭すぎだつっうの。

リア充どもに聞きたいけど聞けないが、果たしてお前たちが本当
に友達と思える人間は何人だ？ ちょっとノートに名前書いて俺に
提出してみろ。

反面、俺なんて超気楽。耀太と平塚と桃井だけだ、俺が素の反応
を見せることができるのは。……いやけど挙げた3人が面倒臭いか
否かと聞かれたら「Yes」って答えるんですけどね。上っ面だけ
の友達0人。これ凄くない？ ねえ凄くない？ 俺ってマジ正直者。

……認めたくはないが、ここ数日で何だかんだで桃井とは仲が良
くなった。耀太関連はもちろんのこと、その他の日頃から溜まって
いたらしい女子同士やらチャラ男どもの鬱憤を愚痴ってきたりだと
か。まあ色々と本音をぶちまけてくるということは、それなりに信

用はされているんだろう。たまにイラッとしたりすることはあるが、こいつは、まあ、嫌いじゃない。

そして、平塚梨佳とは中学からの馴染みだ。最近では晩飯を作らせたりした。頼んでもいないのに部屋を掃除したり、俺の発言によって一々感情的になるのが面倒なのだが基本的にはいいやつなのだろう。こいつも、まあ、嫌いじゃない。

桃井も平塚も、顔やスタイルはいくせして性格やキャラに難ありだと、人間として腐り始めてる俺だけど冷静に分析する。つかスーパーなら確実に廃棄処分されるよな俺。

桃井結衣と偶然にもスーパーで出会い、桃井に着いていった先にてまたまた平塚と出会う。これぞまさしく偶然の連続！ 偶然であるため必然ではない、よってこれは運命ではないということが証明された！ というか、学生島東区は学生の集まりなので知り合いと遭遇する確率は割りと高いんだけどねー。はっはっはっは。笑えねえよバカ。

……平塚の制服姿はいつもと違う新鮮な印象を受けたので、偶然もたまにはイケてる仕事するじゃねえかと思った。GJ。

視線を地面に落とし、イヤホンに耳に差して音楽を聴きながら帰路に立っている俺——綴有理。ふと、そこの書店でもらえるような物ではなく、明らかに手作りな感じ満載の葉が目に入った。

「あ」

白色の紙を下地に綺麗なピンク色を保つ桜の押し花と、小学生が書いたような汚い不恰好な字で『おねえちゃんへ』と、そう書かれてた葉だった。

「……」

拾おうか。でも、拾ったところで、この島では無能な交番に届けるくらいしか手段はねえぞ。

あとは学園に届け出る程度だ。でもこんな栞を学園に届けてもなあ。落とし主がうちの学園のやつとは限らないし。

「……誰のだよ」

口に出したところで、落とし主が現れるわけがないとわかりきっているが。それでも俺は口にした。

腰を屈め腕を伸ばして栞を拾う。しかも、アスファルトや細かな砂利で傷つかないように気をつけてだ。もう俺マジ天使。……誰かツツコめよ気持ち悪い。

栞の裏を見ても、表側と同じように桜の花弁が押し花として挟まれているだけで名前は書いていない。

『おねえちゃんへ』ということは、落とし主は女性である可能性が高そうだ。

さて、これからどう行動すべきか……。

——このとき栞を拾わなければ、俺のこれからの人生は変わってたはずだ。いや拾ったから変わったのかもしれない。そんなことはどっちでもいい。ただ、限りなく面倒なやつに遭遇したのは確かだった。

「……！」

「あ？」

知らない女の子が俺を……いや、俺の持つ葉を指差して何か言っていた。いやいやいや。イヤホン嵌めてんじゃん聞こえねえよイヤホン見えねえのかよ。

俺と同年代っぽい女の子はどこかで見たことのある容姿をしていた。長い黒髪に黒い瞳。英語で表現すると、平塚や桃井がキュートなのに対してこの女の子はビューティフルと言えよう。つまり美人。ああ、先ほどの既視感とは二次元で……あれ？ 三次元で二次元に既視感？ ん？ んん？ あーゴダゴタになってきたから、もういいわ。

仕方なく、イヤホンを両耳からテイクアウトする。バカ！ それだと『待ち帰る』だよ、言うんならテイクオフだよ！

お気に入りである曲のサビを目前にして渋々イヤホンを外した瞬間、

「触らないでって言ったじゃない。どうして……どうして拾ったのよ……！」

と、静かな怒声が聞こえてきたではないか。透き通る泉みたいに澄んだ声で、氷点下の中を連想させる冷たく刺々しい怒気を全面に放っている。吊り上がった眼で俺を睨みながら。

……は？ なんで俺、怒られてるんだろう？

思いがけない口撃に、面喰らう俺。よく見なくてもわかるほど女の子は肩で息をしていた。んー走ってきたのだろうか。つまりそれほど俺に拾われたくなかったと。そういう意味ですわかりました！ 凄くわかりましたとも！

つづり菌はトラウマだ。しかし、今の俺は青春を謳歌する男子高校生D Kである。D Kを決して某ゴリラのキャラクターの名前と勘違いしないように。それは要すると、まだ純真無垢で他人を疑わず外を元気に駆け回っていた頃の俺とは違うという意味なのだよ！

気合いの入った俺は、空気を吸い込み肺に急チャージして、一言物申した。

「あ、それ言い過ぎ、じゃない……です、か？」

しかしチャージした分を消費することはなかった。普段となんら変わらない普通の声だった。

……くっそ！ マジでちくしょう俺のチキンハートめ！ 反撃の一撃目がこれかよ。いや別にビビってるわけじゃねえし？ 寧ろ喧嘩バッチコイだし？

「そうね。けれど貴方にも非が——はあ、もういいわ。收拾がつかなくなりそうだからこの話はおしまい」

女の子はまだまだ罵倒したかったみたいだが、溜め息を吐いて昂った感情を鎮めようとしている。感情のアクセルとブレーキを自分でコントロールできる辺り、猪突猛進の馬鹿ではないことが窺えた。

「返して」

その言い方、命令に聞こえるぞ。見た目はそれっぽいんだから淑やかに話せ淑やかに。

少なくとも俺は善意で拾ったわけだし、それに一方的に言い負かさせるというのは気に食わない。

——ああ、そうか思い出した。こんな感じで同じように面倒なや

つと遭遇してムカついた覚えが最近あった。教室前の廊下、ぶつかった美少女、それから耀太に調べてもらった――

「お前……板垣夏希か」

「……」

途端に向けられる不審者を見る眼差し。俺めちゃくちゃ怪しまれてるじゃねえかよ。ナンパじゃなくて不審者と見られる辺り、俺の纏うオーラがわかるよね。ま、当然と言えば当然だろうけど。

「なぜ私の名前を？」

「まあ黎学の生徒だからわかるつつうか、この前、俺に難癖つけてきただろうが」

「？」

忘れてんのかよ。自分だけ覚えてて相手が覚えてないとか、居づらい空気流れるじゃん。そこは適当に相槌を打って欲しかった。説明するの恥ずかしい……。

「いやほら、朝に俺とぶつかったの覚えてね？　それでお前が文句をね」

「……思い出したわ。あの時の非常識者ね」

「そうそう。あの時の非常し……非常識者？」

思いもしない台詞に、思わず聞き返してしまう。

「だって謝りすらしなかったじゃない。本心でなくとも言葉に出すと出さないのでは印象は違うわ」

長く黒い髪を風に踊らせながら、美少女は強気な姿勢を貫いたまま俺を見据える。

「つまり貴方の印象は現時点では最低ということよ」

「……」

ハ。久しぶりに温厚で誠実な俺がキレちまった……屋上行くか！
まあ今ここ路上なんだけどね。

でもやられっぱなしは気に食わないのはガチ。不真面目でいい加減な生活を送り、無駄に世の中に否定的な考え方をするように成長した俺は反撃に本腰を入れることにした。

現時点で最低なら、その印象をマイナスにしてやろうじゃねえか。月曜日、学園中に俺の最低な噂が流れるかもなんて心配すら考えないほど俺は冷静さを手放していたようだ。これは結構ヤバめ。

「あのなあ、お前の中で俺の印象が最低か最高かなんて、どうでもいいんだよ」

俺の雰囲気と口調の変化を感じ取ったらしい板垣夏希が眉をひそめる。

「そんなこと興味ねえし、聞いたところで好印象に変える努力なんて更々する気ねえよ」

板垣夏希は黙って俺の話を聞いている。どうやら話の途中で割り込む、などという無粋な真似はしないようだ。その点は評価してやってもいい。

けど、

「けど、自分のことは棚に上げてるってわかってんのかよ。よほど鈍チンじゃない限りこの状況で気づくだろう？」

「……」

俺の言いたいことに気づいたのだろう、その証拠にそいつの眉間
がさらに寄せられ、表情が苦々しいものになった。

あれ、これ俺の方が押してるんじゃないか？

俺は「形式的でもいいから謝礼するべきなんじゃないの？」と、
最後の決め台詞を言おうと口を開く。しかし声に出す直前で、

「ご、ごめんなさい……。あ、あ、りがとう……」

ミジンコかゾウリムシかと勘違いするほど小さな小さな声でボソ
ボソと何かを言う。いやそんな声で言われても聞こえねえから。は
っきり喋れよ。

先ほどまでとは別人のような変化だ。弱々しく悔しそうに、目を
逸らしながらも一応俺の方をチラチラとたまに見る。これは勝った
など直感的に感じた。

「え……お、おう」

やったね俺。なんだか清々しい気分だ。今なら空も飛べるし、マ
グマの中だって泳げるに違いない。

勝利の余韻に浸っていたところに、板垣夏希がこいつ競歩でも挑戦してんのかと驚くほどの早足で近づいてきて、俺の手にある栞を奪っていく。その表情は何とも言えないものだが、いい感情でないのは瞬間的に悟った。

そして競歩のように去っていく——かと思ったら、くるりと振り返り、俺を睨みつける。

「……貴方さえよければなのだけど、名前を覚えてくれないかしら？」

こいつ嫌いだし、誰が教えるかよバーカなんつって答えてみるのもまた一笑できそうだ。しかし、これ以上調子に乗ると痛いしっぺ返しに見舞われるかもしれない。そもそも、初見に等しい異性に追いつかないでできるほど頑丈な心など、生憎と持ち合わせてない。チキンじゃねえよ？　つまり良識ってやつね、これ。

「綴有理」

「そ。綴くんね」

それだけ確認すると、板垣夏希は再びくるりと回り今度は早歩きで去っていった。長い髪が一步を踏み出す度にさらふわと踊るのを遠目に、もう振り返ることはないだろうなと思い、俺もゆっくり歩き出す。

ウォークマンで曲を聴くのは今日はやめといた。

「ぶえつくしゅいつ」

くしゃみが出てふと気づいたけど、俺の体温は随分と下がっていた。なんとなくわかる。薄着だし。

「あー……さみい」

鼻をぐずぐずさせ、誰に愚痴るわけでもなく独りで呟く。

まるで喧嘩を売っているかのように正面から吹き荒れ耳元で唸る秋風。生意気にもさつきよりも冷たく感じた。

ズボラな俺が月曜の朝から愚痴る話

月曜日の朝。教室。

一昨日おとといの土曜日、帰り道で起きた『栞事件』の経緯をバリバリ主観で芝田耀太に語り終えた俺に、耀太が反応した一言がこれ。

「マジかー」

「……」

お前、絶対に聞いてなかったろ。確実に左から右に俺の話を流してたろ。

『マジか!』と『マジで?』だけで話に応えたりするやつは、話を聞いてなくて困ったやつか、ボキャブラリーが極端に少ない残念なやつだけだ。

先ほどの耀太がどうでもいいような感じで言った『マジかー』は、聞く気が更々ない冷酷なタイプのやつである。話を押しつけるつもりはないが、聞く耳すら持っていないというのは及ばずながらダメージを受けるよね。

「……土曜の帰り、何があったか言ってみろ」

答えねえだろ! どうせ脳内で二次元嫁たちと戯れる妄想を繰り広げてたんだろ!

「帰宅途中に板垣夏希さんと出会って、栞がきっかけで口論になった。でFA」

聞いてないからわからねえd……マジかよ聞いてたのかよ。驚い

てないけど驚いたわ。

「……聞いてたのかよ？」

「もち！」

ちょっと意地悪な質問をしてやったとしたり顔でいたらこの切り返しである。やはり、このイケオタは侮れない。俺は心に刻んだ。

耀太は親指をグツと立てて、

「有理からしてくれる話を無視なんてしないぜ」

白い歯をキラリと輝かせ甘い笑みを浮かべ、力強く言う。クラス
の女子がするひそひそ話のボリュームが少し上がったのは勘違いだ
と思いたい。「芝田くんって超イケボだね」とか聞こえてきた
のも聞き間違いだと思いたい！

そういう台詞は頼むからひとりで行ってくれ。俺を巻き込むなっ
つう話。

「ってか、よほど大事な葉だったんだろーな、そんなに怒鳴ってた
ってことは」

うおーいお茶を一口含み飲み下すまでの間、少々思案して呟く耀
太。

「だとしても、あんなにキレなくたってよくね？ とは思うだろ」

今思い出しても納得いかねえ。なんで、善意で拾ったのにボロク
ソ言われなくちゃいけないんだよ。潔癖症かっての。……まあ珍し
い反応も拝見できたんですね。あと拍子抜けしたという言い方

でもOK。

耀太ならてっきり同意してくれるものかと思っていたと、予期せぬ言葉が返ってきた。

「有理、それは違うぜ」

「ん？ 何がだよ」

「大切な物は、自分以外の人に触れられないものなんだ。その葉を有理は触ったっしょ？」

「あ、ああ。拾うときに」

すると耀太は、あっちゃーとやれやれポーズを取り呆れた表情になる。

いやそれ中々ムカつくんですけど。オーバーな反応は願い下げだつうの。ははっ俺ばねえ好き嫌い激しいじゃねえか。やっべー。陰で叩かれたくねー。つか陰でも話題にされねー。

「それはねーわ」

「マジで？」

2回目のやっべー、『マジで？』使っちゃったじゃねえか。よって俺はボキャブラリーが無に等しいクズ人間ということが導き出された。はいQED証明終了。ああもう泣きそう。

耀太は椅子に座った体勢のまま胸を張り、決め所だと言わんばかりに無駄に周辺の空気をキラキラ光らせながら口を開いた。

「俺だって保存用のブルーレイとかゲームとか、鑑賞用のフィギュアとかガンブラを勝手に触れられたら、そいつフルボッコにすると思うぜ！」

「あ……ああ、そうか、そりゃヤバいな」

お前の頭がな！ もろろん大事な葉を無神経に触ってしまった俺もだけどな。イヤホンを嵌めて音楽に浸り、俯いて歩いていたばかりに……。いやでも音楽聴いてないと苦痛を感じる能力宿っちゃってるし俺。

「でも向こうも言い過ぎたとは思うよ？ 有理が善意で拾おうとしてたわけだし」

「ですよー」

善意、ここがポイント。普段なら絶対にスルーしてたところだよ？ でも息が上がるまで葉を探してたってことは、相当思い入れのある代物だったんだろう。察するに、妹からの手作りプレゼントと見た。

……妹欲しいなあ。「お兄ちゃん起きて学園に遅刻しちゃうよ！」とか言うんかなあ。それとも「兄さん早く起きてください！」みたいな敬語妹だったりするんかなあ。……これだと耀太の二次元脳とあまり変わらないような気がする。そんな煩惱は思考からパージして話を進めてしまおう。

「ま、愚痴ったらすつきりしたわ」

あ、終わった。やっぱ俺って口下手だよな……。

耀太はうーいお茶のペットボトルをラベルを弄りつつ、爽やかな笑顔を見せ物柔らかに言った。

「それならよかった」

「……お前はバカみたいに正直だよなあ」

「褒めてる？」

「わかんね」

「ははは」

俺が断言してやる。耀太は主人公素質ありだ。

重度なオタクである主人公と、女の子たち。主人公といつもつるんでいる2人の友人のうち1人が俺でめんどくさがり屋キャラ。もう1人が主人公サポートするキャラ。これでどうでしょうか監督さん。

俺が得体の知れない監督と対話していると、耀太が机上をぼんやりと見つめながら、小さな声で独り言のように洩らした。

「妹がいたのか……」

「あ？」

「なんでもねっす。それじゃ俺はもう戻るよ」

耳がいいわけでない俺がその蛇口から溢れた一滴の雫のような眩きの意味を尋ねる前に、耀太は自分の席へと行ってしまった。

なんで無駄に意味ありげに呟くんだよ、気になって仕方ないじゃねえか。

頼むから犯罪だけは犯すなよと口の中で忠告する。たぶん性犯罪とか、いわゆるアッチ系を犯しそうで不安だわー。さっきの台詞といい表情といい、変態度を危険度に換算したら、確実に要注意人物に定められるだろう。天然記念物ならぬ要注意人物ってな。

にしても、

「……謎だよな」

机の隙間を縫って歩く耀太に、憧れの眼差しを向けきゅーきゅーと騒ぐ女子の視線に紛れ、俺は僅かな猜疑心を抱いてそいつの背中を眺めていた。

視界の片隅で、明るい茶色をしたサイドポニーが揺れる。桃井結衣だ。休日の薄化粧とは違う、平日のギャルメイク。やつぱお前、化粧薄い方がいいって。

そんな桃井の視線を追っていくと、やはりと言うべきか耀太に辿り着く。おい軍団長（笑）にバレるぞ！ その辺にしとけて！

奇跡的に俺の念が伝わったのだろう、桃井は視線を耀太から切り、俺を一瞥してにこっと笑ってから、甲高い声でお喋りしているガールズトークの中に混ざり入っていった。女子の皆様と喋っているときより自然な笑顔に見えたのは、なんでだろう。こういうのってあまり深く考えない方がいいよね、俺みたいな無駄に推理力や洞察力がある人間は特に。いや冗談だって。

「どういつもこいつもキャラ不安定過ぎだっつうの……」

俺の細やかな独白は、キーンコーンカーンコーンというHRの始まりを告げるチャイムに掻き消され、誰の耳にも届くことはなかった。

1 限目は……情報かぁ。めんど。よし、寝よ。

ズボラな俺が黎明学園の鬼神に呼び出される話

私立黎明学園で生徒の痛々しい悲鳴があがるとすれば、その原因の8割方は『鬼神』と生徒から呼ばれ畏怖の対象になっている刻无先生だろう。

今まで一体何人の不良やヤンキーに鉄拳制裁を喰らわしてきたことか。もはや想像すらしたくない。

でも元ヤンが、道徳や慣習または法規などに背いた者に制裁を加えるってどうなんだろ？ 絶対に反感とか持つてるやついるよね。まあそういうのはどうでもいいや。俺ヤンキーでも不良でもないし。ちよっと遅刻とか保健室で休む頻度が多めなだけだからマジ。

果たして刻无という文字が苗字なのか名前なのか、それ以前に偽名ではないのか……怪しげに感じる部分や、どんだけ身体鍛えてんだよとか私生活だらしなさ過ぎだとか色々ツツコミたいこととか幾らでも挙げられるのだがこの際それらは置いておくことにする。

本題に入ると、俺はそんな黎明学園の鬼神様に「放課後、職員室に来るように」と、呼び出されてしまったわけなのだ。これはニュートンも驚愕するレベル。万有引力とかそんな平和的な発見じゃねえ。俺が何を言ってるのかわからないと思うが、俺もなぜ呼び出されたのかまったくわからない。心当たりは皆無。強いて言えば、遅刻が酷いことくらいだろう。

剛毅朴訥で隠忍自重な俺が呼び出されたものだからクラスメイト全員が心配してくれたよ。……というのは冗談のようで実は嘘100%なんだけど。誰ひとりとして心配してねえつつうか、放送で呼ばれたわけじゃないから、誰も俺が刻无先生に呼び出されたことを知らないだけの話。つまり俺が回りくどい言い方をしてただけというわけなのでしたー。はい、構ってちゃんタイム終了。これからは覚悟して臨まなければ。

念のため遺書でも書いておこうか、とか言ってほんとに書く気ゼロな俺が職員室に到着する。職員室の中に入ると、自前のマグカップを片手に持つ刻无先生とちょうど目が合った。ナイスタイミング！ いやー、職員室という空間はどうにも苦手だねー。職員室で発声とか無理な人だから俺。いやはやマジで助かった。

「……」

刻无が顎と瞳で「こっちだ、ついてこい」とサインする。職員室という完全アウェーなため、俺は素直に刻无先生のあとを追って、よくわからない休憩室らしき一室に足を踏み入れた。うんまあ普通の広さかなって感じ。テーブルにパイプ椅子というシンプルな部屋だ。

室内はコーヒーの芳香が充満しており、テーブルの上には洋菓子和菓子が籠に入れられ置いてある。ここは先生方の休憩室だったのだと確信した。

テーブルを囲うパイプ椅子に腰掛け、マグカップをドンと置く刻无先生。

「ふむ、まさか貴様がエスケープせずにきちんとやってくるとは。どうやら過小評価しすぎていたようだ」

まずはジャブ。このくらいならご挨拶程度だ。にしても機嫌の悪さがプンプン臭うな……。更年期障害かつつの。

「別にすっぱかしたりなんかしねえって」

「ほう？ よくもまあ平然と断言できるものだな。今まで幾度と貴様にすっぱかされたことか」

「あー、すみません」

ご存知だろうか、刀と刀で斬り合えば刃が欠けてしまう。辛辣な言葉に反抗的な態度で真っ向からぶつかると、そこから口論に発展するということに。

たぶん刻无先生はストレスが計り知れないほど溜まっているに違いない。ストレスが溜まれば苛々する。ならばここは俺がグツと堪えるところだろう。日々のストレス社会に生きる人たちに敬礼。：敬礼って右手左手どっちだっけ？ どうでもいいか。

「ところで先生」

「なんだ？」

「先生なら、誰かが落としたらしい葉を道端で見つけたら拾うか？ その葉は落とし主の大切なものだと。落とし主が全力で走り回って探すくらい、大切なやつ」

そんな突拍子もない質問提起に先生は「うむ」と目蓋を閉じ、顎に片手をやり考え始める。

睫毛長っ、とか驚く暇もなく先生は目蓋を開け、切れ長の瞳を覗かせた。

「そうだな……私なら拾うだろうな。そして学生島ネットに、紛失物として届け出て様子見だ」

なるほど。もれなく刻无先生も板垣夏希に文句を言われてしまう、と。あ、でもイヤホンで音楽なんか聴きなさそうな人だから杞憂かもしれない。

つか、聞き慣れない組み合わせの単語を聞いたぞ。『学生島ネット』だって。こりゃ恥を忍んで伺うしかねえだろ。

「学生ネットって聞いたことないんだけど……」

いっやー無知だと照れるなあ☆ はっはっは。

ギロンと鋭い双眸が向けられる。俺は、素直に教えてくださいと言い出せなくなった。決してビビってるとか、そういうのじゃないから勘違いすんなよ！

「学生島ネット——呼称は様々あるが、そんなことも知らないのか？ 学生島の学生としてそれはどうかと思うぞ」

「いやでも寮にパソコンねえじゃんかよ」

「携帯電話からでも利用可能だ」

時代の流れについていけてない、と。そういうわけか。

「……」

え、なんで得意気なの？ 俺ちよつとわかんない。

「まったく、パラボラアンテナでも頭上に取り付けてやろうか？」

「それだと指向性だから一定の方向しか送受信できねえつつうの」

なんだよ、パラボラアンテナを言ってみただけってパターンかよ。ははあ、最近仕入れた単語だから使ってみたくなったんで

すね、わかります。つかダサくねー。教え子にツツコミ入れられてやんのー。

「……」

『やられた……！』みたいな刻无先生の顔。ぷっ。笑っちゃアウトだ耐えるんだ俺！ 顎に力を入れ、奥歯を噛み締める。

「こほん。貴様を呼んだのは、少し頼みを聞いてもらいたからなのだ」

誤魔化した。これはこのままでは不利だと空気を肌で感じ取り、本題に突入することで誤魔化すヘタレ野郎がする手段だ。やーいヘタレー。……こんなこと言ったら、確実に腹パン一発くらいお見舞いされるんだろうな。

「これは頼み事というか提案に近いのだが」

刻无先生は脚を組み、籠に手を突っ込んでお菓子を取り出す。なんかこれドラえもんが四次元ポケットをまさぐる感覚に似てね？ 取り出したのは秘密道具ではなく、手の平サイズの水羊羹でした。

その水羊羹をテーブルの上をスーッと滑らせて俺へと寄越す。バターのマスター気取りかよ。というか、なんで渡されたんだ？ くれるって言うことか？

向かいに座る先生はマグカップを傾け湯気の消えたコーヒーを飲み干し、強気な姿勢を崩すことなく男口調で頼んだ。

「部活に入ってみる気はないか？」

「……そういうことか」

はい納得。この水羊羹は刺客だったわけだ。

急に敵意を覚えた水羊羹をデコピンで弾き返す。ビシッ、打ったー綴選手、場外ホームラン！　おいおいテーブルから落ちちゃったよ。向かいに座る麗しい婦人に拾っというて、という視線を送ると、見事な舌打ちを返された。聞き惚れるほど綺麗な音だった。恐ろしいや恐ろしや。

「物をぞんざいに扱うな」

「すみません」

拾われる水羊羹。そしてお菓子籠へと戻された。ちなみに先ほどの謝罪は先生に対してでなく、生産者さんに対してである。

「どうだ？　部活動に所属しているだけいいのだ。それに随分とメリットがあるのは貴様も十分知っているはずだろう？　貴様のような態度点がマリアナ海溝よりも低い生徒には、中々オイシイ提案だと思うがな」

再び問われる。若干バカにされた気がしたけど、事実だし言わせておこう。

背筋を伸ばし脚を組み直す刻无先生。大きな胸が強調され、目のやり場に少し困った。平塚に分けてやればいいのに、と実現不能なことでもうでもいいことに思いを馳せる。

……バカだなあ。そんなに返答を催促しても、答えなんてわかりきってるくせに。これも『可能性』ってやつか？　ハ、笑える。

きっぱり毅然とした態度で俺は首を横に振った。

「やだ。部活に入部なんかするわけないだろ」

入部したら負けかなと思ってる。

そんな水飴みたいな甘い話があるかつつの。そんな話をわざわざ俺に持って来なくとも餓えた蟻たちが群がるだろうに。

「しかし幽霊部員でいいのだぞ？ 貴様に働いてもらおうとは微塵も考えていない。私は部員数を確保したいだけなのだ」

「それって俺じゃなくても他のやつでよくね？」

「そうなのだが、部の活動が活動でな……はあ」

意味わからん。ついでに先生が溜め息を吐く意味もわかんねえよ。俺の方が溜め息吐きたいわ。

刻无先生は人差し指でテーブルを叩く。長い爪がコツコツと音を鳴らした。

「そもそも、これは廃部の危機が迫った部の部長から頼まれたことだな。私としては可愛がっているお気に入り生徒の頼みを無下にはできず、部員数だけでも確保したいという魂胆なのだ」

確かに書類上だけなら幽霊部員でもいいんだらうけど、それでいいのかよ……お前教師だろ。

「意外だな。先生が生徒を可愛がるなんて」

「私にだって好き嫌いはある。嫌いな生徒……例えば授業中に度を

超えた私語を話す生徒や、委員会や週番の仕事、掃除当番を果たさない生徒が嫌いだ」

いるいる。そんなやつ。そういう生徒はほんと肅清されてしまえばいい。

掃除を少ない人数でするほど大変なことはないんだぞバカ。そしてそんな生徒は注意されたらされたで文句をブーブー垂れる。やりたいことだけして、したくないことはしない、それを指摘されてヒス起こす……どんだけ残念で見苦しい生き物なんだよ。

思わぬ共通点を発見し、俺はほんの少しだけ、ティッシュペーパー4枚分くらいの親近感を覚えた。

「下心を持つやつも嫌いだが、最近は悲しいことに慣れてしまったな……」

「まあ、それは仕方ないだろ。思春期だし？ 健全な男子高校生なわけだし？」

「語尾を上げるな。無性に腹が立つ」

それは理不尽というものだ。『りふじんっ！』なんかラノベのタイトルっぽくね？ ばねえな理不尽。

「……で、無難なところで俺を選んだわけか」

「そうとも言う。嫌いな生徒の内申点を稼ぐ真似をしたくないのも理由の1つだが、その部の部長の性格に難ありでな」

「ふうん。……それでも先生ほどじゃな痛っ!？」

痛い痛い！ 脛を蹴んな脛を。つか脚長くね？ 足技強すぎだろこれ……。テーブル下の攻防戦、俺は防戦一方でした。

「部集会などがあれば、部長と部員たちが対面するだろう。やる気のある部員ならば今後の活動方針を巡り、部長と折り合いが悪くなる」

「なぜ自信満々なのか」

ま、想像は容易につくんだけどな。

「うむ。退部した部員たちの退部理由は、全員が人間関係だった」
期待を裏切らないとはこのことか。

「綴ほど偏屈で狡猾な生徒は簡単には見つからない……。屈強な精神の持ち主である綴——貴様ならば、部員としてやっていけるかもしれない。喜べ綴、今貴様を誉めてやったのだぞ」

「なんだそりゃ」

誉めてない。それは誉めてるようで、実はただ俺の人間性を挙げただけだ。

俺は偏屈でも狡猾でもないし屈強な精神を持ってるわけでもねえ、先生の言うこと全部嘘。いーけないんだいけないんだー。嘘つきは泥棒の始まりってね。

刻无先生は、それから「もちろん、部活動に参加するかは貴様の自由だがな」と付け加える。

部活動って、したいやつが集まって活動することを言うんだろ？

だったらやる気のない俺を勧誘して「参加するかは自由だ」っていうのも、少し変わった話だよな。

俺は暫く黙り込んだ。

損得勘定中……。

うん、まあ、悪くない。あかつき寮で寝てるだけで部活には参加したことになる、内申点はタダ上がり。部活に顔を出さなければ厄介な性格らしい部長とも出会うことはないだろう。部集会もしらばつくれば問題なし。ぶっちゃけると、遅刻や欠席の多い俺にとってはかなり美味い提案ではあった。

「……まあ、いいよ」

「そうか。入部してくれるのだな？」

最終確認。それに、俺は逡巡することなく頷いて見せた。

「ああ。でも入部届は一応、活動内容を確認したりしてから出すわ。念には念をな」

「綴ィ。相変わらず抜かりないではないか」

「当たり前だろ。俺がまるごと鵜呑みにするかつつの」

ムフフだとかグフフと気味の悪い笑い声をあげる俺たち。職員室に残っている先生たち驚いてんじゃねえかな。『きゅ、休憩室に悪魔が！？』みたいな。

学園新聞に掲載されるんじゃない？　されねえか。

「でだな」

グフフと笑ったまま、俺は口火を切る。

「なんだ？ 英語でも教えて欲しいのか？ 仕方な」

「手当ては幾らぐらい貰えるんだよ？」

「……っ、……………」

目線を逸らし口を一字に結び黙る刻无先生。その挙動は敗北を意味するのだと古来から言い伝えられている。よって、俺の勝利である。winner俺！

「部活の顧問を受け持っていると、それなりの額が貰えるって話を小耳に挟みまして。ねー刻无先生？」

我ながら気持ち悪い喋り方である。吐き気がするわ気持ち悪い気持ち悪い。

「……」

「……」

俺は調子に乗り攻め、先生は俯いていた。
と思ったら、

「綴イ」

物凄い形相で睨まれる。そりやもう妖怪もびっくりして逃げ出す大迫力。ああ、これが鬼神と呼ばれる由縁か。なんかガタがアシアシ震えるんだけど。ドキもムネムネするし。納得したから許してく

ださいお願いしますごめんなさい。

鬼神が降臨したあとはトントン拍子に話が進んだ。ほぼ脅される形で入部届にサインした俺は、それを先生に提出して帰宅した。

これが俗に言うパワハラか……。どうやら身を以て経験したようだ。

「なんでこんな目に……」

悲劇の舞台に立つ者は、いつだってそうばやくだろう。俺もぼやいた。

餞別だ、と刻无先生に投げ渡された水羊羹を咀嚼しながら寮までの短い帰路を歩いていると、携帯電話がヴヴヴと振動する。桃井結衣からのメールだった。

じゃあ決定、今晚の生け贄——もとい愚痴る相手はこいつだ。極稀だが俺だって話を聞いてもらいたいって思うときもある。ボツチが人との友好的な関わりの味を占めると、依存度が高くなっちゃうらしいけど、そんなの関係ねえ！

よし、君に決めた！ 行け桃井結衣！ 「ピッピカチュー♪」なんつって。

ズボラな俺がエスケープする話

代行部。だいこうぶ。ダイコウブ。

さて、この度、誠に遺憾ながら部活に入部する事態に陥ってしまいました俺。しかも入部先は、今までの学園生活で一度足りとも聞いたことがない『代行部』という正体不明の部。いや名前から察して、どんな部活か大まかにわかるでしょとか思ったやつは、まさしくその通りだ。が、それを口に出してはいけない。口にすれば、空気が読めないやつというレッテルを貼られることになる。……と、思う。たぶん。

ここで質問、代行部とは一体どのような活動をしている部活なのか答えよ。

答、仕事などを、本人に代わって行う活動！

ピンポンとランプが点灯する。綴さんの持ち点は×2倍され、40点となりまーす。……これがのちに自問自答と呼ばれるようになった由来である。

茶番はさておき、代行部という部に入部することになった俺は気分が劇的に滅入っていた。

音楽を堪能しようといやホンを装着し、片方のいやホンから曲が流れてこなかったときくらい、いや、それ以上の絶望感と味わったと言えよう。わかるか？ 帰宅部エースの俺が代行部などという、いかにもパシられてそうな部に転部するのだ。これは由々しき問題だ、ほんとガチで。

代行部は現在、俺と同じ2年生の部長がひとり。そして顧問は刻无先生なのだそうだ。

あのクソ寮長は、顧問の仕事などするはずがないのに部活動の顧

問を引き受けていたのだ。手当ては入ってくるのに働かなくていいって素晴らしいよね。挙げ句の果てには、部活が潰れそうだから人員補給のため俺に入部しろと脅してくる……どんな教師だよ。超さいてー。

と、いうことを芝田耀太というイケイケな青年に愚痴る……というか、八つ当たりする。

「これ俺もう不登校になっても許される域まで来てるんじゃないかなあ……」

昼休みの教室。そんなことを独り言風にぼやく。
雪ちゃんさんから椅子を借りて、俺の近くに居座る耀太がもちろんスルーするはずもなく、

「おバカッ！」

「!？」

なぜか一喝された。
すんごい迫力。

「裏山！　ちよっ、おまつ、そんなの羨まし過ぎるっしょ！」

「羨ましい……？　主にどの辺りが……？」

引き気味に尋ねると、耀太は焼きそばパンを急いで咀嚼しゴグンと飲み込む。

よかった、これでくちゃくちゃ音を鳴らしながら喋ってきたらブン殴ろうかと思ってたところ。

だいぶ気持ち悪いけど、耀太や平塚は俺の好き嫌いをよくご存知なため、俺の嫌いなことは滅多にしないやつらだ。基本的にボツチだけど、周りに恵まれているよなあとは感じる。この話は内緒な。

「まずは、シチュだ」

「シチュ？」

「シチューじゃなくて、シチュエーションな」

知ってるつつうの。「どんなシチュなの？」って意味を込めて聞き返しただけなのに、こいつときたら！

つかクリームシチュよりビーフシチュの方が好きなんだけど。あれ旨すぎじゃね？聞いた話、優秀な生徒しか入寮できない黎明学園学生寮のビーフシチュはマジ旨いらしい。つまり俺は一生味見すらできないというわけか畜生。

「まず先生に呼ばれて反抗するんだけど、なんだかんだで入部するっていう流れが完全に、この後の展開を指し示してる」

「へえ……」

「しかも部長ひとりだけって、これ完全に美少女フラグだと思われる！変わった部活だから変人氣質持ちには違いはず……よって部長は電波さん！いや、堅物委員長という線も捨てきれねー！」

「ふうん……」

あー、クロワッサン美味しいなー。飲み物ないからあとでコーヒー牛乳でも買ってきてもらおう。パンに水分なしは辛いからな。

「でも、もし正義感溢れるタイプの正統派美少女だったら、有理の腐った性根を叩き直すため奮闘するって流れもありか？　だとしたらツンデレか天然……ありだなギュフフ……」

「さりげなく俺のことバカにしてるよね？　あと、オタモード入ってんぞ」

「あ……、サーセン」

こいつの妄想癖は異常。もしも発研が人の思考を読み取る機械を開発して、それが風紀委員の手に渡れば確実に捕まるな。

風紀「ああああなた！　なっ、なっ、なんという破廉恥な妄想をしているのですか!？」

耀太「えっ!？」

風紀「た、逮捕です!」

みたいなノリで。

俺の方がキモい？　はいはい、どうもすみませんでした以後気をつけます。

「そんなお前が考えてるような展開にはなんねえよ。別に顔出さなくてもいいって顧問言ってたし」

「えっ?」

えっ?　じゃねえよ。ンな面倒なことをするわけねえだろ。俺は年中がら年中平常運転だ。学園行って、勉強して、帰って寝る。この繰り返しなんだよ。

「しかも今なら副部長つつう役職がもれなくついてくるんだと。わ

けわかんねえ部活でも副部長なら、まあ見栄えはいいだろう？」

「そうだけど……」

耀太は少し不満そうな表情をして、つまらなさそうに焼きそばパンにかぶりついた。興醒めだ、とでも言いたげな雰囲気が漂う。

え、なんで白けてんの？ 俺のせい？ ああ、俺のせいか……。

「……ん？ そういや有理」

「あ？」

「有理と部長以外に残り3人必要なんだけど、もう揃ってるのか？」

「え？」

「え？ って。有理お前知らなかったのか？」

オイオイ、と手でつつこみを入れる耀太。その動作に俺はイラツとした。口は災いの元、ここは堪えて何も言わないんだけど。

「部は最低でも5人必要で、人数や顧問がいないと無条件で廃部か、同好会に格下げなんだぜ？」

それほんとかよ！ 初耳だぞ。まあ、その辺りはたぶん刻无先生が動いてくれるだろう。寧ろ動けバカ。

「揃ってないんかい」

無言で明後日の方向を向く俺を見、耀太は呆れ返ったように鼻を

鳴らした。その鼻息すらも女子にとっては特別なものに見えるのだろうか……。怖いっつかキモいな。

「ンなこと知らねえよ。でもまあ、……揃ってないんじゃない？」

「なんという適當っぷり。無責任無関心？」

「その台詞、今さらだろ」

「ははは。数が足りないんだったら俺も入部する。有理が入るんなら、俺が入部する目的が生まれるってものだ」

「……お前、突発的な発言ばっかするよな。その適當っぷりは俺に匹敵するわ」

確かに、と耀太は同意してケタケタ笑う。別に笑うようなところじゃなくね。とりあえず笑って場を和ませておけば空気は安泰だという魂胆の愛想笑いに見えないから、ガチで耀太は変人だ。変わった人間で変人と読む……耀太にぴったりじゃねえかよおい。

俺は席を立った。お気に入りのコーヒー牛乳を買うためだ。そう言えば、クラスのDQNが生乳を『なまちち』と読んでいて無性に死ねと思ったことがある。最近の中学生でも、そんなこと気にも留めねえよ。つまり中学生以下。これだからDQNは……。

「どっか行くん？」

「昇降口の自販機」

「おー、有理自ら買いに降りるとか、久しぶり過ぎて新鮮な光景

に見えるぜ……」

反論できないからなんとなく悔しい。コーヒー牛乳も買いたいが、外の新鮮な空気もついでに吸おうと考えたのだ。教室だと、窓を開けた瞬間、女子から睨まれるからな……。換気くらいしろよ。寒がりか。

「行てらー」

耀太に見送られ、教室をあとにした。

教室を出、階段を降りていき1階に到着。降りるペースは個人的にまあまあ速いんじゃないか？ 自己新記録っぽい。つか、そんなことはどうでもいいし計ってすらねえっつの。……じゃあなぜ言った。

1階の廊下を進み昇降口を抜けて少し歩くと、3台ほど並んでいる自販機がある。それが俺の目当てである、紙パックのジュースが売られている自販機だ。

今日は運がいいのか、自販機前には誰もいない。普段なら数人の生徒が固まってたむろしてたりするんだけど、人っ子ひとり見当たらないから超ラッキー。人見知りの激しい俺としては、やはりひとりが気楽なのである。ボッチ最高！

「あ、あれ？ ツッチーじゃん。奇遇だねっ？」

「なんで疑問系……？」

そう声を掛け、昇降口からやって来たのは言動不審なスイーツ（笑）ギャル桃井結衣。手にはゴツゴツと装飾された財布があり、どうやらこいつもジュースを求めて降りてきたらしい。

タイミング悪っ。なんでこう色々と被っちゃうんですかね。

「やー、今日は少し冷えるね。秋が着々と近づいてきてるって感じ？」

「かもな」

寒いんだったら制服の前を閉めろよ！ 声を大にしてツツコミたい。カーディガン着てても、それだけ前が開いててスカートも短ければ意味ねえよ！

桃井はわざわざ俺の隣に寄ってきて、選り取り見取りのジュースを選ぶ。

言われると少し寒いような気がしなくもない。やっぱ海に浮かぶ島は、的なことをぼんやり考えながら小銭を投入し、コーヒー牛乳のボタンを押した。

「ツツチーは中間テストの勉強もう始めてる？」

「いやまだ」

コーヒー牛乳ゲット。念願のまでは大袈裟だが、コーヒー牛乳の魅力に取り憑かれているのは確か。いい仕事するじゃねえか自販機殿。誉めてつかわす。

というか、いちご牛乳って擬人化したら絶対えっちい格好してると思わね？ やべえ俺マジ末期。

「それ美味しいの？」

俺のコーヒー牛乳たんを指差し、桃井が尋ねる。
不覚にもカーディガンの袖口からちょこっただけ見える色白な指

にドキッとした、と言おうと思ったら実はそうでもなかった。

「旨いよ。これイチオシ。かなりオススメ」

「ふーん」

ピ、ガコガシャン。

桃井が購入したのは野菜ジュースだった。おい買わねえのかよ！
イチオシとオススメの2単語使った俺に謝れよ！ 見事に期待を裏切られたわけだが、よく考えてみれば俺が勝手に勧めただけで、「美味しいの？」とだけ尋ねた桃井がそれを買う理由にはならなかった。ばねえ自己中。

「てかさ、昨日のメールってマジだったんだね」

不意に桃井が言う。まるで昨日のメールは嘘だったみたいな口振りなのは気にしないっいたら気にしない。

「うんマジ。脚色した箇所はあるけどな」

「脚色してたの!？」

嘘半分真実半分ってところだな。まあ許されるレベルだろう。

「ツッチーが入部したのって代行部だね？ そんな部活聞いたことないんだけど……どんな部活？」

「俺も初耳だったの」

「ふーん。あ、あのさ……」

歯切れが悪くなる&上目遣いということは、また何か頼まれるわけですね、嫌でもわかります。ちっくしょう、俺に何でもかんでも頼めば自分は楽チン楽チンってか？ 味を占めやがってムカつく！
これ以上桃井が何かを言葉にする前に、俺はエスケープすることに決めた。

「実はあたしも——って、なんで逃げるの！？ ちょ、待ってよツチー！」

こちら帰宅部エース綴有理……戦闘が勃発すると予測される区域を迅速に離脱する！

「あいたたた腹いてえ！ こりゃコーヒー牛乳飲んで冷えたかなあ！」

「マジ？ って、まだ飲んでないじゃん！」

コーヒー牛乳を片手に、颯爽と逃げ去る俺。後ろで桃井が喚いていたけどもう何も聞こえない。

俺は風を切った。

某ウルトラ人間だって地球上では3分間しか戦えない。地球で姿を晒すことは即ち、怪獣との戦いでもあり自身の『3分』という壁との闘いなのである。

でも知ってる？ 某ウルトラ人間って、延滞金を事前に支払っておけば普通に活動できるらしいよ。つまりケチってるわけね。

ウルトラソウッ！ ハイ！ 俺はナントカ星雲ではなく、我が教室へ無事に帰還したのでした。まる。

ズボラな俺が人生の転機を迎える話

色々と謎に包まれたままの代行部に入部して数日が経過した。入部と言ってもあくまで書類上の話で、俺自身はいつもと何ら代わり映えない生活を送っている。しかし、呼んでもいない転機が訪れて来たのは憎き中間考査が始まる1週間前のこと。

放課後辺り、唯一無二のお気に入り喫茶店『喫茶サンライト』でテスト勉強に励もうと心意気を新たにしていたところを刻无先生に捕まり、生徒指導室まで有無を言わず連行された。

俺が何をした！？ という心境の中、先生は啖呵を切ったのだった。

「単刀直入に言おう。綴、部活に出るのだ」

「……はあ？ てめ、部活には顔を出さなくていいつつってたる！」

「うむ、事情が変わったのだ、それも想定外のな」

らしくない怒鳴り声をあげているのは俺。

申し訳なさそうな顔をすらする気が一切ないのは刻无先生。その安定力、揺るぎねえな。

「納得できそうな事情じゃなかったら、一体全体どうしてくれようか！」

「どうもしなくていい。調子に乗るな学生の方際が」

ちょっと調子に乗って攻めてみたら、一瞬で封殺された……。ひよっとするとこの人なら、三竦みの法則とかブチ破るんじゃないか

と真剣に思案する。やっべ、それマジ無敵じゃん。

刻无先生は椅子には座らず、腕を組んで立ちっぱなしだ。重くないのかなあ。何が、なんて言わなくても誇り高い変態紳士なら自ずとわかるだろう。ヒントは『む』から始まって『ね』で終わる2文字の単語な。

「今回、貴様を合わせて新規で4人が代行部に入部したわけなのだが」

「おー、やったじゃん」

「うむ」

パチパチパチ。

やる気の欠片もない音が生徒指導室に響く。

これで部は存続決定。俺は寝ているだけで副部長なのだ。しかも口うるさく干渉されることもない。……そうニヤニヤしていた矢先がこれだよっ。もうアレだね嫌になるね。

「それでは今から事情を説明する。心して聞くといい」

キャスター付きホワイトボードを引っ張ってきて、まるで教師のように振る舞う刻无先生。……あ、そう言えば職業は教師だったっけか。はっはっは、こりゃうっかり。

「入部した生徒で、ひとりは、お前もよく知っている平塚梨佳だ」

「何がどうなって平塚が入ったんだよっ！」

一方で、椅子に堂々と鎮座する俺は動揺せざることを大仏の如し。というはずだったが、つつい声荒げていた。いやだって予想外すぎるだろ。

「いつだったか寮で夕食をご馳走になったことを覚えているか？その日以来、たまに平塚家の食事に招かれる機会があつてな、それで親しくなつた」

ホワイトボードに平塚梨佳ときつたねえ字で書かれる。

つか聞いてて軽く疑問を感じただけど、順序が逆じゃね？ 招待されて仲良くなるもんなの？ 普通は仲良しになつたから招かれるもんじゃないのか。一度もそんな経験のない俺にはさっぱり理解できない。悲しいことに。

俺が項垂れている間も、ホワイトボードにはキュキュキュと、事情つてやつが書かれていく。

「それで誘つてみたら1度目はバイトを理由に断られたのだが、2度目の際、貴様が入部すると教えたその瞬間に承諾してもらえたのだ」

なるほど！ 要するに俺は平塚を釣るエサにされたわけですね、わかります。

安いよ安いよ！今なら綴有理が198円！ お買い得だよ！なんてセールでも買う人間なんて存在しないに違いない。いや、存在してるか。実際に綴エサで平塚つつう大物が釣れてるわけだしな。おつ、俺が人の役に立てるなんて光栄でございますうう！

ああくっそ、頭が痛い。頭蓋骨を紙ヤスリでゴシゴシされてるんじゃないかってくらい痛む。理由？ ンなの決まってるだろ、厄介

な後輩の出現にだよ。

「……」

「どうした頭を抱えて。そんなに将来の嫁と過ごせるのを嬉々としているのか」

「してねえよ！ 将来の嫁さんでもねえよ！ 人をからかう前に、まずお前が旦那を見つけやぐあッ!？」

我が決死の猛攻は、なんだか瞳が逝っちゃってる先生が机をガゴン！ と蹴り、蹴られた机と椅子に挟まれる形となって終結した。危うく上半身と下半身に分裂するところだったぞ。ガチ危ない。三十路直前の婦人にこの類いのジョークは厳禁。本日の収穫である。

俺を両断寸前まで追い込んだ当の本人は、罪悪感に見舞われることなく飄々と続ける。

「そして、貴様と同じ学級の芝田耀太」

「耀太も？ ああ、人数足りないんだったら入部するとか言ってたっけか」

そうだ、と先生は頷く。

先ほどボードに書かれた平塚梨佳の下に、芝田耀太と加えられた。

「聞けば、この芝田耀太とは友人関係を築いているそうではないか」

「まあ、一応」

「これは中々驚愕させられたな。よもや、貴様にあれだけ好青年の友人がいようとは思ひもなかった……」

実態としては、向こうがベタベタ関わってくるだけなんですけどね。俺が友達と言っても間違いないであろう変人野郎だ。

「……入部届を受理する際、『有理が新たな環境で心細くならないよう、俺がそばで支えますから。キリッ』と、爽やかに微笑まれたぞ。……き、貴様と芝田はアレな関係なのか？」

わざとらしく。だが、先生は本気で声を潜め小声で話し掛けてくる。

否、断じて否！ そうはつきりさせようとするよりも早く、

「違——」

「くっ、すまない！ 教師とあろう者が、教え子の恋愛に口を挟んでしまった！」

「は？ え……？」

おいおいこいつ何言っただよ。サイドブレーキ忘れた装甲車だよ。誰か先生を止めろ……止めてくださいッ！ 生徒指導室の中心で願いを叫ぶ。略称はセトチューでよろしく頼むわ。

「同性だろうとなんだろうと、人の恋愛に水を差すような外道な真似を……！ これはケジメをつけるしかない……よし、私を全力で殴れ！ 来い！ 受け止めてやる！ さあ！」

「やめろ！ 頼むからもうやめろ！ 俺が悪かった、悪かったから

もうやめろって！」

これ勘違いってレベルじゃねえぞ。

端から見ればさぞ可笑しな光景だろう。なんせ、教師と生徒が大
声で捲し立てながら頭を下げ合ってるんだからな……。

約1分後。

冷静になると、なぜあんなに取り乱してしまったのかと陰鬱にな
る。

原因は、恋愛と隔絶されている刻无先生の誤解からの暴走だ。つ
まり俺は何ひとつ悪くないわけで。とんだとばかりだよ。

話を戻そう、と咳払いをひとつ。先生は事情説明を再開した。

「あともうひとり、貴様と同じクラスの女学生なのだが……まあ、
知らないだろう」

「知らん」

「桃井結衣という、最近の流行り？　のような格好をしている女子
生徒だ。何度注意し言って聞かせても、服装の乱れは直らないから
困ったものだ」

「……」

桃井の名を聞いた瞬間、驚くというか、呆れに近い溜め息が腹の
底から出てきた。ヤンデレの愛にも匹敵するかもしれん重い重い溜
め息だ。なんでだろう、なんつうか、『またお前？』って倦怠感が
襲ってくる。……はあ、またお前かよ。

「桃井とは顔馴染みで、声を掛けるかどうかと一考していたとき、ちょうど本人から申し出てきてくれたのだ。私はもちろん喜んで入部届を受理した」

「へえそうですかそれは良かったですね」

このとき、既に俺の優秀過ぎてあまり出る幕のない脳ミソでは、連立方程式をいとも簡単に解いていた。

俺たちの会話に耳を澄ましていたところ、桃井は耀太が代行部に入部することを知った。同じ部活動なら自然な形で接近できるし、いい機会かも！と目論んだ末、このビックウェーブに飛び乗ったに違いない。これらを整理をすると、XⅡ巨乳で、YⅡ大波だ。意味不明？つまり乳揺れってことだよ。たぶん。

「なぜ干からびる直前のナメクジのような状態になっているのだ気色悪い」

「……言つとくけど、お前の例えも十分気色悪いからな？」

「む……？」

ごもつともだ、そう言わんばかりに先生は顔をしかめる。しかめっ面が般若に見える時点で、女性として残念な気がしてならない。残念な女性はホワイトボードに桃井結衣と書き、

「……でだ、この3人が入部したのはいいが、問題が発生した」

校舎の近くにある練習グラウンドから軟式野球部のコーチと思われる怒号が聞こえてきた。静かな生徒指導室では、それがはつきりと聞き取れる。田中がエラーしたのか……今月で何回目だったの。

だから部活中はコンタクトレンズにしろと、あれほどテレパシー送ったじゃねえか。不順なやつめ。

数瞬の現実逃避を堪能し終えた俺は、椅子に座ったまま背骨を伸ばす。バキバキと音が鳴った。首を回すと、今度は目眩がした。

「あー……、俺が部活に出ないからか？」

俺が部活に出ないってことは平塚と耀太が入部する理由を失う。

耀太が部活に参加しなくなれば、次は桃井が見出だせなくなる。

それを伝えると、先生は「ふむ」と手を組んだまま片手を顎にやった。

おお……これは壮大な連鎖ですね先生。何連鎖くらいでしようか？
うーん……じゃあ3連鎖。地味ー。

「察しが早いな綴。負の連鎖は続くと身を以て体験したぞ」

「マジか、俺か……」

笑みを浮かべる先生。反してげんなりする俺。心待ちにしていたゲームが販売延期になったときくらいのげんなりだ。

くそ……！ この流れは嫌な予感しかないぞ！

くつくつ笑いながら先生は言い切った。

「なあに、単純に貴様という負を連鎖に掛けてやれば正の連鎖に豹変する」

でも、胸を強調して威張るようなことではないと思うんだけど。
あと俺が超平然と負扱いになってて許せん。反論できないから余計に許せん。

「なら、新しく3人集めろよ……」

語尾が弱くなるのはなぜだろう。腹が減っているからか。

「女子生徒から人気あがって人望も厚い刻无先生なら簡単だろう？」

ただし一部に限りの話であることを踏まえておくように。

「確かに容易いがそれではダメだろう。この際だ、私は代行部をきちんと部として完成させようと思う」

たった一言で逃げ道が塞がれてしまった。これはピンチだ俺！
つか、代行部まだ完成してなかったのかよ……。大変だろうなあ、代行部の部長さん。

待てよ？ ふとした発想に俺は勝機を見出だす。確か書類を誤魔化せば廃部は免れることが可能だったはずだ。だから仮初めの副部長として、俺が入部する羽目になった。……これは武器を手に入れたも同然！ ははっ、ピンチになった主人公の前に具現化する強大な力——いつの時代だってそんな都合主義のストーリーだな。胸糞悪かったけど今だけは感謝してやる！

「そもそも廃部や格下げは書類で誤魔化せるんだろ？ だったら人数補充してはい終わりだ。それなら、副部長や部員なんて実際に集まらなくてもいいんじゃないの？」

「そうはいかなくなった。都合上、部一丸となって活動せざるを得ない仕事が舞い込んでな」

うおおお……力及ばず、か……。この際いつそのことゲームオーバーになれ！　そしてロードさせろ。いや寧ろ人生をニュースタートさせてください！　……無理だよねー。わかってるよそんなことくらい。

……こうなったら、誰か腕の立つ正義のヒーローを呼んで来てくれ。強者が弱者をいびるのなら、弱者を救うのもまた弩級強者なはずだ。そうでなければ、世のハッピーエンドは減少してしまうぞ。

「……なら、期間限定で募集すれば……」

「無駄だ綴。諦めろ」

「くっ……」

四面楚歌。背水の陣。危急存亡の秋。八方塞がり。エトセトラ。さて、世の中にこんな言葉が存在しているということは、即ちそんな目に合った人がいるというわけだ。今ならわかる、偉大な先輩方の心境が今ならわかる！　……そうか、これが魂の共鳴か。

魂の共鳴を果たしたのなら、偉大な先輩方もきっとこう嘆いたに違いない。この状況めんど臭い、と。

「面倒くせえええ」

眼前に憎たらしいクソ教師の表情が広がる。にんまり。まさに、そんな笑顔だった。

「そういうわけだ、明日の放課後は部活動に勤しむといい」

「……」

「貴様が代行部に現れるようになれば、部員たちも集まってくれるだろう」

「……」

「では頼むぞ綴副部長。くれぐれも私の期待を裏切るような、無粋な真似はしないでくれたまえ」

人一倍ズボラだけど美人な教師の勝利宣言を俺は垣間見た。そして、俺は敗北したのだ……。これがバッドエンドか。

最初は軽い気持ちでやって……。まさかこんなことになるなんて思わなかったです。みたいな、法を犯した中学生的な台詞を不意に思い浮かんだ。

甘く美味しい話にホイホイ釣られ、気づけばこのザマである。なんたる失態。これは信長様の前で切腹をしなければならない。腹切りだァァ！　こうして人は陥れられていくのか……。なんか悟りを開いた気分。

「仕様がないな、今晚は私が夕食を振る舞おうではないか。出前で中華か何か頼もう。な？」

なんで嵌めたやつに晩飯を奢られなきゃいけないんだよだし！　しかも先生は出前頼むってだけで振る舞うとかいう表現すんじゃないやねえよだし！　これマジでムカついたぞだし！　俺は負けず嫌い、一方的に攻撃されるのは我慢ならない性分である。なら今こそ反撃ののろしをあげるときだし！

語尾をくだし！　にしてみたけど、俺がすると魅力溢れる知性が半減した感じになるんだな。いくら知的な俺でも似合わないからやめとこうかな。うん、賢明な判断だ。

「じゃあ餃子と唐揚げが食いたい。できればラーメンも」

「うむ、いいな。チャーハンとエビチリも注文するでしょう」

ああああっ。食欲には勝てないのか……！ 結局、ふらふらして
る俺はこうやって底なしの泥沼に片足突っ込んで、そのまま
沈んでいく人生なのだろう……。

なんちゃら童話に例えてみると……。

ある日、貴方が散歩していると池が見えました。近づいてみると、
それはそれは綺麗な女神（21）が池の中から浮かび上がってきた。
白い服が濡れて透けています。これはけしからん。女神は尋
ねました。

女神「貴方が落としたのは、この綴有理ですか？ それとも、こ
の綴有理ですか？」

綴有理を目にした者は口を揃えて「要らない」と言います。……
こうして、俺の人生は誰に拾われるわけでもなく時間だけが無駄に
経過していき、要らないと答えられる度にダメージを受けるのでし
た。

ああ、あとは毒林檎を食べて眠ったままの状態になっちゃったけ
ど、誰も集まらないし気づかない。白馬に跨がった王子様も現れず
一生寝たまま……そんなシナリオでも可。

次はゲームオーバーした画面で例えてみると……。

人生をコンティニューしますか？

↓できません

貴方の人生は

一度切りだからこそ

味わい深いのです

みたいな？ いやいや、味わい深いって俺はコーヒーかったの！
違うっつうの！

一連から推察できるが、我ながら結構痛い子だな。今さらだが自覚した。自覚したところで何を改善するってわけでもないけど。

ここってあれじゃね、反省してもう少し思慮深い人間になろう的な改心して、俺レベルアップできるシーンじゃね？ ははっ、ノーセンキューです。

刻无先生は、あまり事情とやらを記入しなかった、何のために用意したのか不明瞭なホワイトボードを蹴って壁に寄せると、腰に手を当て仁王立ちになる。その風貌たるは焼け野原に佇立する冷酷無慈悲な鬼神を連想させた。

「それでは我が家に帰宅しよう。部屋を少し整理しなければ皿が置けない、貴様も少しばかり手を貸せ」

「いや待て仕事しろよ。まだ5時にすらなってねえぞ」

なんか久しぶりに真っ当なツッコミ入れたような気がするの勘違いだ。俺の指摘はいつだって神がかったセンスで輝いてる、間違ったツッコミなんて入れるわけがない。きつと。

……まあいいや。余裕も猶予もないけど、今は先見の明を一層研ぎ澄まして、これから始まるであろう波瀾万丈物語に備えるとしよう。

十人十色な代行部が新たな面子で発足する話？

9月下旬ともなると肌寒いと感じる機会が多くなってくる。黎明学園やそれ以外の学校でも、冬服やカーディガンを着用する学生が増えてきた。

ちなみに黎明学園は中間考査終了後、冬服完全移行となる。服装云々は風紀委員にいちやもんをつけられる事態になりやすいので要注意だ。

中間考査まで今日を含めて残り6日。学園全体がテスト週間に入り、勉強モードに移行している生徒が多く見られるのは当たり前である。まあ、俺はまだ移行してないんだけどね。学生が島民のほとんどを占める学生島では、ほぼ同時期にあるテスト対策週間に入ると島全体が一風変わった雰囲気包まれる。

『学生応援☆セール実施中！』とか、『テスト期間中のみ24時間営業！』とか、『テスト対策模擬試験無料配布』とか、島全体で学生をサポートしだすのである。それもそのはず、この島は学生によるための学生島。ならば大事なテスト期間中は、島の学生をあらゆる面から支援するのが当たり前、という習俗がより顕著に強大となるのだ。

そりゃもう、なんつうか凄いの一言。

ファミレスなんかは、学生さんいらっしゃーい♪ 的な感じでドンドン宣伝してる。料理やドリンクバーが激安になるらしい。

塾や予備校なんかも、ますますヒートアップして力を注ぎ入れるとかなんとか聞いた。

もはや、道端に植えられている、名前も知らない木までもが『綴様ががんばってくださいファイトです♪』って応援してくれてる気がするもん。げへへ。

他にも、まあ色々と興奮しちゃってるところがあるのだが、面倒臭いから省略する。ただ言えるのは、『あったらいいな』『こうだったらいいな』なんて願望が、学生島では当たり前前だということだ。

俺も書店で参考書を購入するとき、半額になっていてラッキー♪ と思ったことがある。つか男が音符マークって気持ち悪くね？ 男が音符マークを使った文章見る度に、使った男に嫌悪感を抱くんだけど。いやこれマジで。

そんなテスト対策週間。にも拘わらず、俺は自分スタイルを貫き通しているのだった。キャーツヅリサンカッコイー。はは、照れるじゃんかよー。

「テスト前日にしか勉強はしない」

「マジっ!? ツッチーそれでよく今まで生きてこれたね……」

「でっすよねー♪ 有理センパイだからこそ成せる技ですよ」

「授業聞いて、授業の時間で理解して覚えてるから慌てることなんてねえよ。出ない授業や、聞いてなかった授業の内容は前日に覚えればもう何も怖くない」

「はー、なんか天才みたいな発言だけどさあ、ツッチーのキャラと違くない?」

「ちっちゃです桃センパイ。有理センパイは成績良い方なんですよ? センパイは努力家なんです!」

左に平塚。右に桃井。甲高い声をステレオで聞きながら、俺たちは代行部の本拠地である部室を指して広い広い校舎内を冒険していた。伊達に学生島1番の規模を誇る私立黎明学園じゃねえな！というのも刻无先生が部室がある場所を教えてくれなかった、そして俺たちも確認するのを忘れていたため、校舎内を彷徨う羽目になっている。

脚が筋肉痛になるだろ、しっかりしてくれよ！ 毒づこうにも、女子が両隣にいるんじゃ、どうにも自己中な発言はできな――

「もう疲れたし目眩してきたんだけど……。あとはお前たちだけで探しといてくんね？」

くないですよー。バリバリ言えますよー。ほら俺って正直者だから？ 嘘とか言わない人だから？ このご時世、嘘は信用を失うから些細なものでもいけないと思うんだよね。

「俺、風邪気味だから。ゴホッ。つうわけで中庭のベンチで休んでるから、見つけたらメールしてくれ。ゲホッ」

校舎でか過ぎ。つか生徒也多すぎ。話し声で耳も痛くなってくるし、廊下を歩いていて他人を見ると酔ってくる。重症だ……こりゃあ重症だ！ 大事なことなので2回言いました。

すると、俺の両隣、特に右側から大きな不満があがった。

「そうゆうこと言っちゃう人なんだ！ 見損なったよツツチー。しかも咳、超嘘っぽいし」

「桃センパイ、有理センパイはこういう人なんです。残念ですけど、もう……」

「そだね……。もう……」

「もう手遅れってかよ。やかましいわ!」

頭をパシンと一発はたいてツツコミたい! でも、女の子の頭をはたくなんて難易度高すぎるから。非常に無理だから。クラスのメジャー男子みたいに、女子の肩に平然と手を置くんて俺にはマジ困難だから。

あとどのくらい歩けばいいのだろうかと思案になっていると、一房の髪をふりふりさせながら桃井が、仕方ないなくみたいな口振りで切り出した。

「んじゃあさ、あたしちよつと案内板見に行って部室の場所確認してくるよ」

なん……だと……! ? そんな案内板とかいうのがあるんなら、場所がわかんないってときにすかさず言い出せよと。いやもう声を大にして言ってやりたい。

「学園案内図みたいなのがあるなら最初から確認しとけよ。つか、早く言えつつうの」

「? 逆に、なんで有理センパイは案内板のことを知らなかったんですか? センパイは効率悪いこと嫌いなはずですよね?」

「……あのな平塚、世の中には、口にして良いことと悪いことがあるんだよ」

「ツッチー情報疎すぎ」

「ハ、お前には言われたくねえよ」

冷やかな視線を送ると桃井は「てへっ☆」と舌をチロツとだけ出す。そしてウインクをして笑った。てへぺろってか？ やかましいわ！

気づけば俺は、桃井の頭をはたいていた。どうやら俺が封印していた、神から授かりし右腕が暴走したようだ。

「いった！？　ちょ、暴力だって、それ暴力！」

「ああ酷いです！　綴センパイは女の子に手を出すような人だったんですね！　幻滅してません、寧ろ新たな発見に少しだけ興奮しますっ！」

軽くはたいただけでこの言われようである。でもこれは俺の意思じゃねえ、いわゆる反射ってやつに違いない。つまり俺は微塵も悪くないってことだ。論理破綻はお手の物。

そして平塚も通常運転である。こいつは大雪の日でも台風の日でもいつだって平常通りに違いない。

「いやなんかムカついたから。てへぺろ今後一切使用禁止な」

「ちょっとした茶目っ気じゃん、酷いなあ……」

「……あたしは日々DVに耐える人生を送らなければならないんですか……。幾らせんパイとは言え、暴力は……グスン」

「おい待て。お前は妄想が口から流れ出てんぞ。それにさっきから

横でベラベラうるさいわ」

しかも俺が平塚に暴力を振るう前提になってるし。お前ら！俺をデイスってんじゃねえよ！俺は紳士だつうのに。誰が暴力なんかするか、さっきのはツツコミだツツコミ。ツツコミと暴力は似て非なるものだよ。

「よしよし、だいじょぶだよ梨佳ちゃん。ツツチーに暴力振るわれたら、あたしがうちで守ったげるからね」

「も、桃センパイっ……」

桃井が平塚を抱き締め、頭を撫でよしよし慰める光景をそばで眺める俺。見ていると、なんとも言えない気分になる。百合的な意味じゃなくて、こうして少人数側は多人数側によって悪者にされるんだなあ、というね。もうね、反吐が出ちゃいますね。

「ぐあああ……桃センパイのおっきな胸が、あたしの胸を、潰して、いきます……」

「あ、ごめんね。梨佳ちゃん抱き心地良くてさ、つい強く抱き締め過ぎちゃったかも」

すまん、1つ平塚の発言を訂正させてくれ、平塚は元から潰れるほど胸ないから。桃井は成長し過ぎで半端ねえ。

「……アホだなー。いやもう見ててほんと恥ずかしいよ」

これが廊下で繰り広げられているのである。当然だが放課後、しかもテスト前ということもあり人の流れは多い。視界で抱き合っ

るこいつたちには、もう少し人の目を意識してほしいと切実に願う。

俺が鼻で溜め息を吐いたときだった。

「あ……、ちょうどよかった」

「ん？」

「あ、近衛先生です」

「ほんとだ。あたしに用かな？」

我がクラスの担任、数学教師の近衛多恵先生がパタパタと駆け寄ってくる。あなたの微笑みはまさしく天使です。エンジェル多恵と名乗れるレベル。将来、絶対幸せな家庭を築く人柄だよ、あれは。多恵先生に気づいたアホの子2人が抱き合うのをやめ、今度はやって来た多恵先生の元へ集まる。

「どしたの？ 多恵ちゃん先生」

「ずっと桃井さんたちをお探ししていたのですが……」

春の陽気のような、柔らかな雰囲気が多恵先生を中心にぼわんぼわん広がっていく。青空の下、大草原の上で寝転んで陽射しを浴びるみたいなイメージ。天使顔負けの微笑みに、マジでハートブレイクですわ。纏めると、覇気を自在に操れる刻无先生とは正反対の人ってこと。

「たちって、有理センパイとあたしもですか？」

「はい。お恥ずかしながら中々見つけれず……」

校内放送でも使って呼び出せばよかったのに。何のための放送だよ。

くっそ、多恵ちゃん先生マジ天然ボケか！　こりゃ未来の彼氏や旦那はしっかりした人の方がいいな。ほら、例えばの話、俺とか綴とか有理とか。これ例え話ね、例え話。

「皆さんを代行部の部室まできっちり連れてくるように、と刻无先生に言われていますから、今からご案内しますね？」

「あーだいじょぶ、案内板見てあたしら自力で行くから。多恵ちゃん先生忙しいんでしょ？　ほら、テスト前だしさ」

遠慮する子、桃井。しかし個人的には、多恵ちゃん先生の後ろを歩いてって先生の残り香を堪能したいわけですけど。

「……ジー」

「なんで睨んでくんだよ」

「なんとなくです」

俺の変態チックな思考でも読んだのだろうか、平塚が横目で睨んでくる。お前にはどれだけ俺のこと筒抜けなんだよ怖いわ。

「うーん。でもお」

せっかく多恵先生が広い園内を小走りで俺たちを探し、連れていてあげると申し出ているのにも拘わらず、それを辞退する桃井。

バカめ、それだと自ら赴いて来た多恵先生の顔が立たねえじゃん。責任感が人一倍ある先生の性格を配慮しろっつうの。帰宅して布団で寝るときちょっと泣いちゃうぞ。

そんなこと、俺が阻止してみせようではないか。どれ、空気人間エアーマンに任せておきない。俺はさりげなく近づき、

「あ、ちょうどよかったです。部室わかんなかったんで、案内してもらっていいですか」

「は、はい！　そ、それじゃあこちらですっ」

俺が機転を利かせたおかげで、多恵先生をこれ以上困らせてしまうような窮地を回避することができた。縁の下の力持ち、とも言うように、他人のために努力をする俺は大変立派である。

桃井は少し納得のいかない様子だったが、さほど深く気にすることでもなかったのか、すぐに女の子同士で談笑を始めた。平塚と多恵先生なら、話を交えているうちに打ち解けていくだろう。

は？　俺？　もちろん女子の少し離れた後ろをひとりで歩いてますけど、なにか。

十人十色な代行部が新たな面子で発足する話？

桃井と平塚は先生を交えて楽しくお喋り中。

「じゃあ近衛先生は駅前通りの料理教室に通ってるんですか？」

「すごっ！　じゃあ先生って料理とか超できるんだ。マジすご……！」

「そ、それほどでは……」

俺はというと、女子たちのあとを無言で歩いている。唇を動かす必要がないので上唇と下唇が乾燥してくっついた。そのうち退化して声帯がなくなりそう。

「あたし、お菓子くらいしか作れないんだけど……。やっぱ料理作れないと女子的にヤバいかなあ……？」

「料理は練習すればすぐ上手くなりますよ！　それに桃センパイとお菓子の組み合わせて、可愛いもの同士で2倍可愛いです！」

「そうですね。桃井さんも平塚さんも可愛らしくて若いですし、……れっ、恋愛なんかも……」

「あはっ、多恵ちゃん先生かわいー！　そだ、先生は彼氏とかいる？」

そろそろ背後の俺に話が振られてもいい頃合いなので、3人のトークを聞きながらいつ振られてもいいよう即座に切り返す準備はできてる、「カレーは辛口、福神漬けもセットでお願いします！　新

婚旅行は温泉巡りなんてどうですか！」だ。しかしですね、そもそも俺に振りが来るはずないから無駄で儂い準備なんですよねええ…。

そして、一切会話に交ざることなく、謎に包まれたままの代行部の部室に到着した女子一行。あとオマケ程度にプラス俺。

「ここが代行部に割り当てられている部室です」

ツアーガイドのように、俺の方を向いて微笑みながら言う多恵先生。俺は忘れ去られてたわけじゃなかったみたいだ。よかったよかった…。

多恵先生が鍵を開け、ドアを開けて先頭からぞろぞろと部室に入る。

で、代行部の部室だが、

「普通だね」

「普通ですね」

「……」

発言するタイミングを逃してしまった。まあ？ 別に喋っても喋らなくても変わらねえし？ 仕方なく顔を出すだけだし？

「もっと廢れてる感があるかと勝手に思ってたよ」

などと宣う桃井。そのサイドポニー引っこ抜いて、化粧や香水も落としてやろうか失礼なやつめ。

代行部という名前からわかると思うが、代行部は運動部ではなく文学部……のはずだ。ラグビーやサッカーなど運動部はグラウンド近くに建てられた部室棟が拠点としているが、茶道部や写真部など文学部の部室は校舎5階のフロアと決められている。

先ほどの桃井がほざいたけど、部室内はこれっぽっちも廃れていなかった。想像を上回るという言い回しが適しているのかイマイチだけど、想像していたのと全然違い、綺麗に整理されたショールームのような空間となっている。

1辺が窓窓なのは通常の教室と同じだが、その他内装がちよいちよい装飾されており普段使っている教室とは違う。床はカーペットが敷かれ、うっすいテレビの前にガラスのローテーブルが置かれていた。そのローテーブルを囲うような配置でソファが置かれ、小さな冷蔵庫や流し台なども隅に設備されている。雰囲気や設備も引くくくめて洋風に作られた、一般家庭のリビングキッチンと何ら大差ない。

「うわ、なんでテレビとか置いてあるの？ 見て見て梨佳ちゃん、これなんか凄くない!？」

「どれですかー？ って、なんで水槽が!？ あ、ハムスターですよ、ジャンガリアンハムスター!」

「そのハムスターさんは、ジャムさんって言うんですよ?」

「めっちゃかわいいー!」

「でもなんでハムスターや魚が部室にいるんですか?」

俺を除いた、女子陣がなんだか盛り上がって参りました。しかし俺は、

「……ふうん、学生の部室に置くにしては上質な物じゃねえかよ」

実は上質かどうかかわかんないんだけどね。ただ言ってみたくなっただけっつうか、ほら、こんな台詞を呟くだけでなんとなく切れ者みたいでかつこよくね？ 『こいつ、この花瓶の値打ちがわかるのか！？ ……中々やりおるではないか』的な展開じゃん。つか、女子から俺に一切話し掛けてこないんだけど。ま、いつもと変わらないしどうでもいいかー。

「……魚、花、小動物」

多種の熱帯魚が漂う水槽の数々。色んな花が串刺しにされてる生け花。ちっこいハムスター1匹が、からからからからから！と滑車みたいな遊具で全力疾走している飼育ゲージ。……一瞬、誰かの私室かと間違えてしまいそうなほど生活感のある部屋——これが、『代行部部室』の全貌なのだろうか……。

呆然と立ち尽くす俺と、テーマパークにでも遊びに訪れたかのようなテンションの桃井と平塚。

ただボーッと突っ立っていたところ、出入口のドアが開いて、いつもより仏頂面のおっそろしい刻无先生がやってきた。

「む？ 着いていたか」

「はい、つい先ほど。ご苦労様です刻无先生」

「そうか、多恵にも手数を掛けたな。……おいその2人、あまりはしゃぎ過ぎるなよ？」

刻无先生が声を掛けると、「はい」なんて感じで桃井と平塚は声を揃えて言った。声がハモったのが楽しいのかわからんが、クスクス笑い合う2人。ちょー仲良さそうなんだけどー。俺には理解も経験もできない世界である。

「教頭に少し足止めされて遅くなった。私も急ぎ事がある、早速ミーティングをするでしょう」

「忙しいなら、私から説明をしておきましょうか？」

「ここは私がする。代行部の顧問として明確にしておかなければな」
珍しく随分と気合いの入った刻无先生を見た。こりゃ明日辺り雪が降るかもしれんね。

桃井、平塚、刻无先生、多恵先生がソファに腰掛ける中、俺は女ばかりの一带に座るのが少し躊躇われたためソファ近くに突っ立っている。横に座れば？ と桃井から促されたが、俺が首を横に振るとそれ以上何も言ってこなかった。

その直後、ドアが控えめにノックされる。

怒ってんじゃねえかと思う声色で刻无先生が「入れ」と呼ぶ。

入ってきたのは、代行部に入部する理由がすこぶる気持ちの悪いけどイケオタな芝田耀太。

「掃除当番で遅れました」

「ああ、把握している。座ってくれ」

「はい」

それと、もうひとり。耀太の背後から女子が緊張感だとかいったものをおくびにも出さず、凜とした立ち姿を見せる。

俺たち新入部員は全員揃っているわけだから、つまりこいつが必然的に代行部の部長ってわけだ。どんなやつなんだろう——？

部長と思われる少女の、今どき珍しく何の手も加えられていない天然の黒髪をサラサラ揺らしながらこちらに歩いてきて、決して大きな声ではないがよく通る声で言った。

「先日の依頼の打ち合わせをしていて遅れました」

「ああ、わかっている。君も座ってくれ。……っと、恐らく諸君らは彼女を知らないだろう。彼女は——」

紹介しようとした刻无先生を片手で制止した部長と思われる少女は、順に新入部員の顔を見渡す。桃井、平塚、芝田ときて最後にソファに座らず立っているままの俺を見てから、

「特別科の2学年、いたがき なつき板垣夏希です。以後どうぞよろしく」

白い肌に黒髪が特徴の美少女は板垣夏希と名乗ったのだった。学園の廊下で起きた出来事や、休日の路上でのやり取りがフラッシュバックしてくる。俺はこの状況下で悟った。

そう、これが、この瞬間までずっとバカに生きていたラノベ展開だということに……。

だってそうだろう？ 学園でぶつかり嫌味を垂れ、路上で軽くだけど口論になる——こんな印象の悪い出会いから始まり、今じゃ同じ部活動の部長と副部長ときやがった。しかも、何千人いるとも知らない学生島で、同じ学園同じ部活、こうやって対面するまでにい

ざござ経験あり。こりゃあ一体どこのラノベなんですかね？　ちょっとタイトル教えてよ、今後の参考と対策にAmazonで注文してくるわ。

「弱り目に祟り目って、このことだったのか……」

テンパってない。が、動揺はしちゃってまーす。俺ほんと想定外すぎて笑えてくるんだけど。今、DQNに机と椅子を占領されてたときくらい絶望してる。いやそれ以上かもしれない。

「よし、これで代行部勢揃いだな。では今から、第1回代行部ミーティングを行う」

表情を少し緩和させた刻无先生が、脚を組みながら張り切った様子で言う。

「ヤバいこれ超ヤバイよ……！　梨佳ちゃん、あたし顔赤くない？」

「うーん……熟れたいちごみたいに赤いです！」

「ダメじゃんっ！」

耀太の登場に、一瞬でキョドる桃井。耳真っ赤。

そんな桃井を隣で励ます平塚。距離が近い。

俺にアイコンタクトをしてくる耀太。いや意味わかんねえし伝わらねえよ。

そして、俺を横目でチラチラ見てくる板垣夏希。これだけ群を抜く美貌を持つ生徒を学園で見掛けたことがなかったのは、板垣は特別科の人間だったからだと今理解した。

面倒だけど特別科の補足を少し。俺たちみたいなのが普通科で、

特別科の生徒は特待生とか、いわゆる優秀な生徒のクラスというやつだ。黎明学園ではこうやって区別化されているけど、今のところ特に問題はなしだ。挙げるとしたら、普通科と特別科の生徒同士の接点が少なくなっていることくらいか。ま、そこまで問題視されるわけではないだろうけど。

ここで俺は誰にもわかるはずもない憤りを、歯を噛み締めることで抑える。

理由なんて、そんなもの今さらだ。言わなくても理解してもらえるだろう？

「……」

……清々しくなるほど盛大に狂った。俺が実はそこそこ——いや、十分満喫していた学園ライフが崩壊していくからだ。

DQNや不良気取りに虐められることもなければ、先生や耀太以外に干渉されることもなく安寧に過ごしていた日々。途中から平塚という弾道ミサイルに追尾される羽目になったが、なんだかんだでそんな日常を俺なりに謳歌していたというのに。

そりゃ俺は友達も限りなく少ないし彼女もない。リア充からしてみれば暗くて楽しくなさそうな俺の日常を、謳歌しているとはとてもじゃないけど言えないだろう。でも、俺は俺なりに満足していたんだ。

なのにこんな事態になってしまったでござる！ やべー、耀太の口調が感染してるじゃん。気が動転しているんですね、わかれ。

はあ。なんかもう溜め息が出るね。俺は諦めたかのように視線を窓の外に向ける。特に何も表現するようなものはなかった、残念。夕焼けと呼べるほど夕焼け出てねえし。タイミングわっりー。

「……なら早くやれよ」

これがホールドアップ。観念した俺は、カタカナのコの形に並んでいるソファの、耀太と桃井の間に腰を下ろすのだった。

「見た目に似合わずやる気ではないか綴イ」

「……刻无先生、その態度でやる気と呼べるのですか？」

「板垣、そこを指摘するのではない。擁護できないだろうが」

「すみません……？」

なんでクエスチョンマーク浮かべてんだっつうの。

こんなやつにツッコミ入れるのも癪だし、関わりを持つのも必要最小限にするつもりだ。

「面白くなってきた」

「どこがだよ」

「ようやく綴の青春が息吹き始めたかな」

「いい迷惑だっつの」

耀太と俺は小声で言葉を交わす。俺には、耀太の発言がこれっぽちも理解できないけど。

あー、ミーティング？ が始まったし、もう黙っとこ。なんだかんだで一番気合い入れてんの刻无先生だからね。って、多恵先生が副顧問なの！？ やったね俺、部室に唯一無二の潤い成分を発見し

たよ！

……仮にこの世に神様が存在するとして、さらに幸と不幸を振り分ける係——通称、振り分け神がいると仮定する。で、この振り分け神は絶対に職務を甘く見ちゃってるわけだよ。「うほっ、このイケオタはうはうはハーレムにしてギャルゲ人生にしよ（笑）」と、幸せをのりたまの如く豪勢に振り掛けるのだ。対して俺みたいな人間は、「あゝ……めんどいし、適当に幸せの粉を振りく——ああっ、幸せの粉と不幸せの粉間違えちゃったよ（笑）」みたいな、あり得ねえミスを犯すに違いない。料理下手な女の子が好きな男子のために手作りクッキーをクッキングする場面で、砂糖と塩を間違えて入れちゃうくらいあり得ないわけ。わかる？

つまり要約すと、振り分け神は職務怠慢だってことだ。ちゃんと仕事しろ！

ああそうだ、今後は、人間の幸せと不幸せを振り分ける神様のことを、ミスで人生を左右させたのにも拘わらず猛省しない性悪の神様つつうわけで『邪悪神』と称する。ごめん嘘。厨二臭がそこはかとなくするのは気のせいじゃない。

明日、退部届を提出して直帰することにしたわ。部活なんて辞めた。代行部の存続？ そんなもん知るかつつうの。それに根底の話になるけど、そもそもズボラな俺が部活なんて続くわけないだろう？

「オイ綴イ。代行部の主な活動方針を概説してみろ。ついさっき話していたばかりだ、答えられないわけないよな？」

「……聞いてませんでしたすみません」

くっそ！ 代行部なんて絶対に辞めてやる！ 部活なんて所属しなくても進学就職できるし。何がなんでも辞めてやる。大事なことなので2回言いました。でも「絶対に辞めてやる」って辞められ

ないフラグじゃね？　と思っただけでもう手遅れというね……。俺の人生、マジ狂った。

ズボラな俺が渋々部室に足を運ぶ話

翌日である。

昨日のミーティング云々は面倒臭いから省略。結果だけ報告すると、退部はできなかった。

『退部届を提出して直帰することにしたわ。部活なんて辞めた。代行部の存続？ そんなもん知るかつうの。キリッ』と決意の炎を燃やしていたけど、たったの一撃で鎮火させられた。鎮火したのは、学園の鬼神こと刻无先生。そして退部届を撃ち落としたのは、意外や意外、多恵ちゃん先生だった。今日のSHR後、多恵先生に、退部するので退部届をくださいと言った瞬間、涙目涙声で「辞めないで……」って懇願されちゃいましたー。こりゃ辞められるわけないだろ！ てな具合で、俺はこれから多恵先生のために代行部に足を運ぶことにしました。……まあ、どのくらい続くか知らんけど。

刻一刻と近づいてきたテストの対策をしている今日この頃。いくら超絶イケメンで聡明な俺と言えど、保健室で寝ていて授業に出ないときの内容はわからないため、耀太から借りたノートを書き写して理解したり、配布されたプリントの問題を片付けたりなど、それなりにそれなりな試験勉強をしている。

そんな多忙な時期、成績に影響大である中間考査があるというのにも拘わらず、代行部は変わらず活動をするらしい。どんな活動かイマイチわからんけど。情熱で生きるコーチがいる野球部じゃあるまいし、普通にテスト休みでいいんじゃない？ とは疑問に思っているものの、部活があると言うのだから出席しなければならない。ばっくれる？ そんなことしたらあとが怖いって。

授業を終えた放課後、ひっきりなしに聞こえてくる「テスト勉強しねーと」「直帰するわー」とかいう会話。だったら早く帰れよと

胸中で8連発ほどツツコミ入れつつ、まるで両足に鉄が蛇の如く巻き付いてるんじゃないかねえかと感じるほど重たい重たい足を代行部部屋に運ぶ。すると驚いたことに、なんと俺が一番乗りだった。

「誰もいねえのかよ……」

誰かいることに期待していたのではなく、時間を掛けてやって来たのに俺しかない現状に対して、どうなってんだと呆れてしまったのだ。てっきり俺以外集合してるかと……。べ、別にひとりで寂しいわけじゃないんだからねっ。勘違いしないでよねっ。

「しかしお前も不自由だよな、回し車しか遊ぶことねえじゃん」

特にすることがないので（ほんとには試験範囲のプリントを終わらせなければならぬが）代行部が飼っているジャンなんとかと言う小型ハムスターのジャム君♂に話し掛ける。カラカラカラカラカラカラ！ と怒涛の勢いで回し車を走る、説明のしづらいグレーっぽい毛並みをしたフツメンな感じのジャム君。もちろん返答はないが、いや返ってきてそれもそれはそれで吃驚仰天するだろうけども。

多恵ちゃん先生が言うには、ジャム君は運動好きらしくいつも回し車で爆走しているとのこと。きっと熱血漢なんだろうなあ。

俺はゲージの上からジャム君にひそひそ声で話し掛けた。

「……前から気になってたんだけど、ひまわりの種って旨い？ どんな味？」

カラカラカラカラカラカラ！

おい、これシュール過ぎんだろ。ハムスター特有の頬袋をはち切れんばかりに一杯させ、メロス顔負けの速度で走るジャム君と、ハムスターにボソボソ話し掛ける俺……。部屋にはこれだけしか音が

ない。掠れた声と回し車が回転する音以外を挙げるなら、学園に残っている生徒たちの喧騒が微かに聞こえてくる程度で、それがまたシュールさに拍車を掛けていた。

こんな元気の良いジャム君だが、今は既に廃部している飼育部に以前飼われており、酷い扱いを受けていたと多恵先生から聞いた。部員たちが部活動しいくそっちのけで遊び呆けていて、満足に餌や清掃が行われていなかったらしい。で省略、結果的に代行部が飼育を代行することで落ち着いたのだそうだ。

壁際のロッカーの上に置かれている水槽で悠々自適に泳いでいる、ヒレが無駄に長いのが特徴の熱帯魚、エンゼルフィッシュ2匹も、代行して育てているらしい。たぶんオスとメスでカップルだって多恵先生が言ってた。こいつらリア充魚かよ。人間の俺ですら彼女いない歴Ⅱ年齢なのに……。いや案外、魚とかの方が進んでるから仕方ないのか。まあ彼女なんて、いたらいたでまた面倒だから要らないんだけどねー。これ強がりじゃないから。マジで要らないから。

「いるんだよな……育てる重さを知らないやつが。なあ、ジャム君先輩？」

人間でもパンダでも、動物でたまにいるよな、育てることを放棄するやつ。望んで子供を産んだんならきちんと育てなくちゃいけないと思うんです。ちよつとこれ良いこと呟いたんじゃねえか俺。綴君ってカッコいいし優しいのね的な？ まあ、望んでもいないのに子供を産んでしまったら、それが育児放棄してもいいという理由にはならないはずだろうけど、世の中はわからんからな。

どこぞの主人公みたいに独り言なんて呟いてしまった俺の携帯電話が着信を告げるメロディを流す。設定は構っていないから、よくある着信音だ。

電話相手は……多恵先生かよっ。思わぬ人物からの電話に、心拍数がズッキン上昇である。

昨日のミーティングで部員やら顧問やらの電話番号やメールアドレスは登録していたから、多恵先生から掛かってきても全然おかしくない。でも突然すぎだろ、つか、なんで電話って突然なんだよ驚くじゃねえか。着信に不慣れな利用者のこと考えろよ。呼び出し音鳴らす前に、呼び出し音を鳴らす合図を出すべき。

くだらないいちゃもんはさておき、多恵先生を待たすなど言語道断である。俺は若干の手汗を掻きながら電話に出た。

「ひゃ……は、はい？」

『綴さんでしょうか、私、私立黎明学園代行部の副顧問をしております近衛多恵と申します』

「あー、はあ、その綴ですけど……」

『よっ、よかったあ……。電話番号を間違えていたらと心配でしたが、無事に繋がって何よりです』

「いやまあはい、何よりですね」

あなたは初めて携帯電話を使ったこの前の俺ですかつつの。まったく同じ気持ちですよ。変に緊張するよな、電話掛けるとき。でも、どうやら多恵先生は電話口だとしどろもどろしなくなるようだ。流暢に話せるんじゃない、なんか意外な一面を垣間見た。

『部室には他にどなたか来ていますか？』

「いや、俺だけです」

『そうですか。では、ジャムさんとエンゼルさんの餌はすみしました？』

「まだです。やっときますか？」

『ええ、助かります。ええと、職員会議が多少長引くようなので、申し訳ないですけど会議が終わるまで待っていてください』

「わかりました。もしかして今、会議始まってるんですか？」

時間的に考えて。まるっきり適当じゃねえよ？

『はい。でも連絡は入れておこうと思ひまして……。綴さんに迷惑を掛けるわけにはいかないので』

そうか、これが思い遣りの心か。優しいなあ……。あれ、なんか目から目水が出てきたぞ。

『あの、ええと……』

多恵先生が会議に戻りたそうな雰囲気を出し、それを感じ取った俺は自ら通話終了を切り出した。

俺は空気の読める男。近くの人とグループ組んでと指示を出されたときだって、調理実習でナポリタンを作るのに役割を分担するときだって、いつだって最後まで発言することなくいい子して待機している。俺が率先すると必ず空気が微妙なものになるからだ。自然と残った班や枠にぬるりと滑り込んで与えられた仕事を淡々とこなす。これが一番平和で無難だよ、結論的に。そんなことをして

きた俺だから、人が醸し出す雰囲気の変化や流れを感じ取れるのである。

「あ、はい、職員会議頑張ってください」

『は、はい。ありがとうございます』

あつるえー？　なんで微量にほっとしたような口つきなのー？
俺、勝手に傷ついちゃいますよー？

「そんじゃ失礼します」

なんて、嘘だけど。

通話を終え、自分が直立不動で携帯電話を握っていたのに気づく。
なんか精神的に疲れたけど充実感に満たされてる気がする。あれ？
これもしかすると俺、若干リア充の域に踏み込んでんじゃね？
人気のある可愛い教師と電話したんだよ？　やっべえ、なんか今
さらだけどテンション上がってきたっぽい。ひゃっほうう。

「……」

俺は大人しくジャム君先輩とエンゼル先輩に餌をあげた。虚しい
かって？　のんのん、この程度とつくの昔に慣れてますよってね。

スイーツな桃井結衣が思い切ってぶっちゃける話

代行部の古参方に餌を与え終えたところで、桃井と平塚が揃ってやって来る。すっかり仲良しさんになったなあ。こいつら初めて出会ったの今月だろ。これが意気投合ってやつか？

2人は俺がいるのを見つけると、心底意外そうな表情をして言った。

「ツッチー来るの早くない？ てか部活来たんだ」

「仕方ねえだろ。仕事があるって言うし……」

それに、あとから刻无先生に説教されるなんてマジ勘弁。生徒指導の先生は権力持ちすぎだろ。ただでさえ畏怖の対象なのにな。誰とは言わないけど。

桃井平塚はコの字ソファに腰を降ろし、鞆から問題集やら教科書やらを広げていきながら困ったような声を出した。

「あたしテスト勉強もしなくちゃなんですけど、提出物もまだ終わってないんですう……」

「あ、それあたしも。でも歴史とかヤバくない？ 授業聞いててもさっぱりで困っちゃうよ」

「たしかにヤバいですっ。どこからどう覚えればいいのか、よくわかりませんよね」

胸のサイズの意味で凸凹コンビの2人がどこか遠くを見る目で

眩き合うのを横目に、俺もどっこいせつとソファに座る。どちらが凸凹かなんて質問は愚問である。

部活とやらが始まるまでの待機時間を有効活用するため、足元の学生鞆から英語の要点を纏めたプリントとルーズリーフを出して、我流暗記術——簡潔に言うと、要点や解き方を書きまくって脳ミソに叩き入れる勉強方法であるそれを行動に移す。

「ねえツツチー」

「……なんだよ」

「芝田くん来ないね」

「……そうだな」

来ましたー。その話題になるんじゃないかと予期していたけど、まんまじゃねえかよ。

平塚は、俺がしかめっ面をしたのに少しだけ苦笑し、それでも恋愛話に興味がそそられるらしく早速食らいついた。

「芝田センパイってかなりモテモテですよ。下級生でも凄い人気ですよ？」

「やっぱりかー。芝田くんカッコいいもんね」

「はい。でもでもっ、あたしはもちろん有理センパイが一番ですっ！」

「あはっ、梨佳ちゃんは一途だなあこのかわいい子ちゃんめ！」

「んっ、そんなところくすぐらないでくだっ！ 桃センパきゃっ」

「このこの」

桃井が平塚の腰に手を回し、腋をこちょこちょ擦る。指を蜘蛛の脚のようにバラバラに這わせるその手つきがどこか慣れていていやらしい。さすがビッチばねえな……。

平塚も抵抗するがあまり抵抗になってない。されるがままだ。

でも目の前でイチャイチャするのはやめてほしい。色々と刺激が強いから！ それ、妄想癖持ちの男にケンカ売ってるようなもんだよ、つか俺も混ぜて！ いや冗談だって冗談。

イチャイチャタイム強制終了。つか桃井が動くたびに香水くせえ。ソファとソファの間隔が近いのが問題だな。あとで少し動かすでしょう。

こいつらなら俺の性格を知っているだろうから、こちらも気兼ねなく素の対応ができるというもの。

「あんま暴れんなよ」

ぶっきらぼうにそう注意すると、桃井が素直に擦るのをやめた。

「やー、ごめん。ほら梨佳ちゃん、愛しのツッチーが暴れなって」

「桃センパイが擦るからじゃないですかあ……」

実にその通りである。

乱れた髪型やリボンを整えながら、頬を赤らめた平塚がジト目で言い、桃井がけらけら笑って誤魔化す。

「ふう。でさ、話戻すんだけど実際問題、芝田くんって彼女いないんでしょ？」

「そう言われると、彼女いるとか聞いたことないな」

嫁なら沢山いるけどな、と扁桃腺まで出かけた台詞の重大性に気づき、無理矢理飲み込む。すると、ガチでむせた。こんな苦しい思いをするなら気管なんて要らないと言おうとしたけど、それだと俺生きられないから我慢するわ。

つか苦しいんだけど！

「息……くる、し……」

「ああつ、センパイ大丈夫ですか!？」

「あっちゃー、気管入っちゃった感じ? がんばれツッチー、回復役の梨佳ちゃんがそっち行ったから、もう少しの辛抱だよ」

俺の背後へと回ってきて背をさする平塚。桃井は外野から励ますだけで、なんかうるさくて邪魔臭い。

平塚のお陰かどうか知らないが、やっと楽になって喋ることができそうだ。

「……もういい」

「そうですか? センパイさえよければ、ずっと背中をさすっていてもいいですけどジュルリうえへへ」

バカお前女子が普通に唾啜んなよ……色々残念なやつだよ、こいつは。あと笑い方も自重。

「お前、耳の近くで囁き掛けんな。自分の場所に戻れつつの」

「了解でっす！」

敬礼をビシッと。平塚は桃井の隣へと戻った。

「ふーん。へえー。やっぱりねー」

意味ありげに桃井がにやにやと笑う。意味不明というか、いよいよバカがビッグバンするのかもしれない。回避だー回避だー。それ逃げろー。いやマジでこの現在から逃げたいっつうの。

「なんだよ？」

「別に？　なんか超ラブラブじゃんと思って」

たぶん桃井としては俺と平塚を弄る側になったつもりなんだろう。そんな桃井に平塚の照れ隠しのツツコミが入れられた。

「んもう、ラブラブだなんて桃センパイったら。あたしは見返りなんて求めませんよっ！」

「あいたっ!？」

それは効果音だと明らかにドン！　とかいうレベルの類いだった。俺がうわぁ……：てなるくらい。

横からのツツコミ(?)という名の思わぬ奇襲に桃井はしばし呆然としたあと、我に返って独り呟いた。

「裏拳……？」

「思考能力まで吹っ飛んだのかよ。さっさと戻ってこいスイーツギヤルビッチ」

「は！？　今さっき宇宙を泳いでた……？」

「いや知らねえよ」

なんだよ宇宙って。俺の悪口に反応しない辺り、ほんとにボーッとしていたらしかった。桃井が打たれ弱かったのか、平塚のツッコミが強かったのか。真実は興味ない。

だが、平塚には悪口が聞こえていたようで、口を尖らせる。俺が桃井を貶したことにちよっぴり怒ってるみたいだ。

「ダメですよ、桃センパイの悪口なんて！」

「え、あたし悪口言われてたの？　いつの間に？」

「いや挨拶みたいなもんだから。ほら、仲のいいやつって独特の挨拶とかあんじゃん」

おはようと言うのが気恥ずかしいのか、友達の横腹を突っついて登校したのをアピールするやつとか、わざと友達の前を通って席に座るやつとか。

あ、でも言うほど桃井と仲よくねえか。普通に談笑できる仲ではあるけどね。

「それって、本当ですか？」

「マジ。ほんとほんと」

「聞いてなかった。ツツチーなんて言ってたの？」

「スイーツギャルビッチ、です」

「なっ！？　り、梨佳ちゃ……」

まさか平塚の口から言われるとは予想外だったろうな。桃井は衝撃を受けたように目を見開き、それから声を荒げて反論した。

「ち、違うし！　スイーツとかビッチとか意味わかんないから！　ツツチー酷いよっ」

「え？　え？　まさか、有理センパイまたっ……！」

騙される方が悪い、とは言わないが、騙される方が間抜け、とは思うよな。

顔と耳を赤く染めて抗議する桃井と、騙し云々と叱る平塚を軽くスルーし、俺は続ける。

「別に間違っただけ？　……お前、今までに何人付き合ったことがあるんだよ」

これを言うとき、少し緊張したのはきつと気のせいだ。異性と初めて彼氏彼女の話までいってドキドキしてるとか、そんなんじゃないから。ただちょっとエアコンが張り切って部屋を暖かくしてることに尊敬を覚えて、これから敬語にしようかなーとか考えてただけ

だから。

そんな、実は緊張してます心理状態の俺に、ギャルならではの強気な口調の訊き方で桃井が迫った。

「は？　なんで付き合った人数とか出てくるわけ？」

「それがスイーツギャルビッチに関係あるんじゃないですか？」

「そんな感じだ」

「うーん」

桃井は少し間を置いてから、なぜか疑問符を浮かべて答えた。

「……ええっと、たしか6人くらい？」

「6人……」

おお、さすがビッチ。マジばねえな。言っとくが、これは決して誉めてるわけじゃない。「たしか」「くらい」を使う時点で、今結構ガチで軽蔑してる。

高校2年生で6人……これってどうなの？　実は俺もよく知らない。つつうわけで教えてエロい人。

そこで素頓狂な声をあげたのは平塚だった。

「あれっ？」

「梨佳ちゃんどしたの？」

「桃センパイ、この前喫茶サンライトで喋ってたとき、付き合った回数は4回って言ってませんでしたか？」

「えっ……」

驚きを含んだその発言は桃井のものだった。

口にこそ出していないけど、俺も「なんか回数違ってね？」とか「別れて付き合ってたまた別れたのかよ」と胸糞悪く思った。おいおいどんだけ付き合っては別れてんだよ。

……そこで俺の第六感が告げる。こいつは嘘をついている、と。なぜなら明らかに動揺してるからだ。

「あ、ああ！ そうだったそうだった！ やー、ちよつと勉強し過ぎて記憶が曖昧になっちゃってたなあ。たははは」

誤魔化すように笑う桃井だが、笑い声が不自然で頬の筋肉も強張っているように見える。はい桃井お前ダウトー。ほんととは2桁近くいっちゃってて口にするのを躊躇ってるんですね、わかります。つか、そんな誤魔化し方でほんとに凌げるとでも思ってたの？ ギャルゲーやラノベじゃ通用しても、この俺の洞察能力の前じゃ不審感を余計に煽るだけだ。

……なら、深く突っ込んでみるのもまた一興。ギャルカーストでは下位でも、あっちはこっちでそっちだったってな。いやいや結局どっちだよっつうの。

「なあ桃井」

「な、なに？ ツッチーから話し掛けてくるとか、なんか珍しくないかなーなんて」

「キョドんなよ。つうか、俺この世に産まれた瞬間から、嘘つくのはよくないと常々思ってたんだよな」

「それをセンパイが言っても説得力が皆無です」

説得力が皆無とは、失礼なやつだなあ。

平塚を黙ってろと目を細め睨むと、可哀想な小動物は呆れた顔つきをして口をつぐむ。黙視することにしたようだ。賢明な判断である。

「あ、あたしもそう思うよ？　嘘つきは泥棒の始まりとか言うもんね」

「おう。見栄やプライドなんかのために小さな嘘をついたら、その嘘を隠すためにまた嘘をつく。で、いつしか小さな嘘は巨大化して手に負えなくなるわけだ。……嘘つき者は身を滅ぼすってことだよな」

嘘よくない。これ真理。

そして桃井も同調し頷いた。

「うん、そだね」

「じゃあ訊くけど、……お前、今嘘ついてね？」

「うぐ……別についてないし」

俺の活気溢れる新鮮な眼で凝視すると、桃井は俺の視線から逃げるように目を逸らし、苦しげに詰まる。

しかし俺の追い討ちは止まらない。別に本気で桃井を潰しに掛かるわけじゃないから、適当なことを並べてるだけなんだけど。俺マジ思慮深い。

「夜眠れなくなるかもしれないねえよ？　ずっと頭に引っ掛かったままでテスト勉強に集中できなくて、後悔することになるかもしれない」

「……それは、困るかも、しんない、けど……」

「ほら、学祭とかテスト終わったらあるじゃん？　補習授業とか入ったらお前どうするよ？　ギャル友とはしゃげなくなっちゃうかもよ？」

「うう……」

「話しとけて。周りに言つときゃ気分的に楽になるとか聞くじゃん？」

あと一歩か、半歩くらいでいけるか。こいつ絶対に悪徳商法やセールスで人生狂わされるタイプだな。御愁傷様。俺は涙目の桃井を思い浮かべながら、未来の被害者に合掌した。

「俺も平塚も、面白がって吹聴したりなんかしねえから」

偶然にも口は滑るかもしれないけど、そこはご愛嬌ってことでよろしく。しかしですね、滑ったところで誰も聞いてないから大丈夫なわけですよ……。

「うーん……。まあツッチーと梨佳ちゃんなら平気かもしれないけどさ。……絶っっ対に言いふらしとかしないですよ？」

「平塚梨佳、地球に隕石が落ちても口外しないと誓いますっ！」

「……俺もよくよく考えてみりゃ、駄弁る友達なんて耀太以外いなかったしなあ」

俺がポソリと言うと、同情の眼差しが2人から向けられた。水槽と飼育ゲージからも似たような視線を感じたが、俺はフツと自嘲するしかなかった。なんも言えねー。

桃井は観念したのかどうか知らんが、真実をぶっちゃける気になったようだ。

「じゃあ言うけど――」

渋々、という形で桃井が口を開く。

「おう、言っとけ」

「ドンと来やがれてんですよ！」

そして、桃井はぶっちゃけた。

「――あたし実は男子と付き合ったことないんだよね……。うわっ、やっぱりこれ予想以上に恥ずいよっ」

「ハ、そっちかよ」

「あ、そっちですか」

顔を両手で覆い隠した桃井は本気で恥ずかしいらしく、首を左右にぶんぶん振る。その動作についていくように、左側頭部で纏めた明るい茶色の毛髪もイヤンイヤンと振り回される。

ぶっちゃけた本人はテンション高めだが、なーんか狐につつまれた気分だ。それは平塚も同じだったらしく、どう言えいいのか悩んでいるみたいである。

いやね、俺としては、「実は10人近くと経験があつて」みたいな風に、想像しただけで嫌悪しそうなカミングアウトかと身構えてただけだね……。

もう、なんだこれ。サービスでワンモア言つとく、なんだこれ！

「羞恥に悶えてるところ悪いけど、なんで恥ずかしがってんの？別に嘘ついてまで隠すことじゃなくねえか、それ」

ですよね、と平塚も不思議そうに頷く。中学のときに連立方程式を教えてやったときと同じ顔で、俺は少し笑いが込み上げた。

まあそんなのはどうでもいい。

そこで疑問に思う。なんで偽ってまでアホビッチぶつてたのか、逆にこっちが尋ねたいくらいだ。

もう失うものは何もなくやけくそ気味となった桃井が、人差し指と人差し指でイジイジしながら、嘘をついていた理由を蚊の鳴くような声で話し始めた。

「だって、あたし以外の女子友みんな彼氏とか元カレいるんだもん……」

「でも、それでどうして桃センパイが嘘をつくんですか？」

平塚は首を傾げたままだけど、俺は大体察しがついたぞ。……うん、つまり女子は女子で大変なんだなあと思いました。

「周りの女子友は色んな恋バナしてて、あたしだけ恋愛経験ゼロで意味わかんないのに、内容知ったかぶって『わかるー』『だよー』って言いながら実は冷や汗流してるんだよ？ 実は付き合ったことないとか、バレたら恥ずかし過ぎるよ！」

「……？」

「平塚、例えるとだな、仲のいい友達はケーキやシュークリームを作る話題で盛り上がってる中、自分だけ砂糖と塩を判別する段階に取り残されてて会話に混ざれない感覚だ」

「なるほどっ！ わかりやすい例えをありがとうございます有理
センパイ♪」

「あたしってそんな段階なんだ……。砂糖と塩……」

さらにショックを受け、がっくり項垂れる桃井。ジャム君が回し車を爆走している音が、カラカラカラじゃなくてケラケラケラに聞こえてきたから俺マジ末期っぽい。

桃井はスイーツギャルビッチではなく、実はスイーツギャルバージンでしたっつう話だ。……なにこれ、くっだらねええ！

「はああ。やっぱおかしいのかな、高2で恋愛経験ゼロなんてさ……」

「センパイ大丈夫です！ あたしもまだ経験値ゼロですからっ！」

「あ、ありがとね」

「はいっ♪」

そんな桃井を平塚が慰めるが、ちょっと俺には意味わかんない慰め方である。

どうせ嘘をついて自分を偽装するんなら、完璧に嘘をつけばいいだけの話なのにな。不器用なやつだ。俺なら、やるからにはとことんやるけどね。

「……まあ、処女か非処女かなんてそんなに気にすることじゃねえだろ」

「気にするよっ。ツッチーはどうせ童貞でしょ。周りから遅れてるとか気にならないの？ 焦ったりとかしないわけ？」

「はあ！？ ベベベ別に俺どどど童貞じゃねえし！ 全然童貞じゃねえし！」

「センパイ、嘘がバレバレです。あとどうせ唾を飛ばすならあたしに飛ばしてくださいいいい！」

「ほら、ツッチーだって超動揺してるじゃん！ やー、恥ずかしいものは、やっぱり恥ずかしいんだってば」

恐ろしいことを要求している平塚を華麗に無視する辺り、桃井は平塚の扱い方を習得したらしい。平塚取扱説明書でも読んだか。中々やりおる。本人曰く、まだやってないらしいけど。

「動揺なんかしてねえよ。ただ、不意打ちされて即座に反応できなかったただだからマジで」

反応できなくて噛みまくったのは本当。童貞じゃないのも本当。
ああそうだよ童貞だよ！ 童貞で何が悪い？ 童貞すら守れない男
に何が守れるんだよ言ってみろよ！

ソファの背もたれに背中を預け、両腕を天井に向け伸ばす桃井。
肌色というよりピンク色に近いカーディガンがぐいーんと伸ばされ
る。子供っぽい動作だが、桃井にしっくりくるからバカとは言えな
い。

「うう……。なんか納得できない！ ツッチー童貞のくせしてさ。
あゝあ、芝田くんと付き合ってみたいなあ……」

「あたしも早く有理センパイと恋人の仲になりですう……」

「おい、夢見んなったろ処女ども」

シャーペン片手に平塚が呟き、チラチラ俺を見ってくるけど、白紙
に近いルーズリーフでそれを遮ってやった。やっぱあれだな、女子
の向かいに座ると暗記に集中できないどころか、ろくに勉強できな
いな。

「しょっ、処女とか普通に言わないでよ！」

俺の的を射たツツコミにムキになって突っ掛かってくる桃井結衣。
見た目やギャルな友達とは裏腹に、桃井は彼氏いない歴〓年齢何で
すよねー。耳と頬ともに真っ赤であるため、この手の話にあまり耐
性がないらしいことが窺える。

「お、そろそろ耀太とか部長も来るかなー。あー、勉強できなかったなー」

「うわあつ、ちょ、芝田くんに言うとかやめてよ!？」

「そうですっ。もし約束破って言ったりなんかしたら、有理センパイが童貞だってこと、芝田センパイに言いますよ!」

桃井が怯んだのを庇うかのように平塚がでしゃばってくるけど、耀太にチクる意味がまるでわからない。こいつマジ頭大丈夫か。

「脅しになってねえし、わけわかんねえから」

……ふと気になったんだが、もしかしたら俺たちって割りとダメな集まりだったりするのかもしれない。

ふとゲージに目を向けると、ジャム君が頬袋を向日葵の種でぱんぱんにして、こちらをジーツと凝視していた。『汝、恥を知れ』と渴を入れられたような気がする! ジャム君先輩マジばねえっす!

桃井と平塚がきゃーきゃー喚く部室のソファの上、俺は複雑な心境で、神々しく煌めくジャム君先輩を眺めるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0512x/>

ズボラで何が悪いっ！？

2011年12月21日19時49分発行